

【完結】 真・誤解†夢想-革命?- 蒼
天の覇王

妙義

彼には才能は無い。やる気も無い。しかし見た目の良さと幸運だけはあった。つまりやる気が無い袁紹のような彼は曹操の弟なのである。周囲が彼に向ける目は、何故か皆、節穴である。

目次

第一話・愛される弟	1
第二話・日向ぼっこ	11
第三話・金持ちにタカる男	21
第四話・国の重鎮の圧迫面接	29
第五話・名将	39
第六話・武勇、天下に響き渡る	49
第七話・聖人君子	59
第八話・長安	65
第九話・馬超、心酔する	73
第十話・涼州の救世主（童貞）	79
第十一話・なんだかんだ姉が好き	89

第十二話・幽州到着

第十三話・戦場の盃

第十四話・洛陽激震

幕間・賢姉愚弟

第十五話・曹一門合流

第十六話・曹犬軍の日常

第十七話・こうきんのらん？

第十八話・曹一門の金庫番

第十九話・聖人の手刀は音速を超える

第二十話・ヴェルタースオリジナル

第二十一話・幼女の元へ逃げる聖人

第二十二話・虎の口を塞ぐ

第二十三話・最短記録

第二十四話・迷子犬探してます

第二十五話・犬、猿になる

第二十六話・唸る袁家の豪運

第二十七話・日向ぼっこ式

第二十八話・愛情の種類

第二十九話・本妻無双

終話・初代大統領、犬

第一話・愛される弟

彼は自室の扉を閉めて施錠した。この時代の、自室の扉に鍵とかあるのかな？まあそれは置いて、さっきこそつと買ってきた新作の春画を彼はドキドキしながら履き物を降ろし、下肢の中央部に血流を貯めながら、貯めた情熱を吐き出す為、春画を舐め回すように眺める為に机の上に置いたその時だった。

「ぼち！　ぼちはいるのー！」

「華琳姉!？」

施錠していたはずの扉があっさりと破壊音と共に開かれる。正確に言えば我が姉、華琳姉こと曹操孟徳と共に現れた春姉、夏侯惇元讓が蹴破った。いつもの事である。部屋の中に吹き飛んで来た扉だった残骸が床に飛び散るまでの間に、曹操の弟である曹柴犬、真名ぼちは一瞬で春画を破り捨て履き物を履き直した。いつもの事である。

「どうしたの……」

「こっちの台詞よ。また私塾さぼって何してるの」

ナニしようとしてました。なんて言ったら瞬時にこの首が飛ぶことをぼちは理解していた。

「今はもっと大切な事を考えてたんだ。私塾に行くよりさ」

「……そう」

昔から姉である曹操は、というより曹一門ほぼ全員は何故かこのぼちに対してだけはその確かな観察力と考察力が節穴となる。ぼちがこうやってぼかしながら言葉を吐くと、彼女らの素晴らしい頭脳は何故か彼の都合の良い方向へ解釈される事がとても多いのだ。

「……確かに今の都の情勢を見れば貴方が考えている事は間違いないじゃないわ」
「え？ ああうんそんな感じだよね」

「でも今はしっかり基礎を身に付けるべきよ。分かるでしょ？」

「……でも私塾なんて行ってもなあ」

だってほとんどさっぱり理解出来ないんだもの。意味無いと思うんだよなあと思うぼち。高い学費が無駄になるだけなのだ。曹一門の中に置いて姉がこの大陸最高峰のチートに生まれた。この弟の分の才能ほとんどは姉が吸い付いたかの如くである。若干変な方向には才能を持つてはいるのであるが。但しその親類一同と同じく、容姿だけは良い。容姿だけは。名だたる将が女性であるこの世界では、容姿が良い男というだけで本来ならば超がつく程の勝ち組であるはずだった。ヒモで種馬になれば良いだけだもの。しかし彼は何故か期待され、その低脳っぷりを勘違いされ続けて今に至るのだ。

「そう、もう全て覚えたのね。流石だわぼち」

「へ？ ああいやそうじゃ——」

「でもね、あの私塾に通っているのは名門士族の家柄の子ばかり。そういった子達

と縁を結んでおくのは大事よ？」

「……華琳姉がやればいいだけじゃない」

「……貴方はそうやって私を立てようとする。ぽち、私は貴方にも私の隣に立って欲しいの」

「俺じゃ無理だよ、男だし。華琳姉に迷惑掛けたくないし」

これだけはこの男の本音である。姉と一つ違いである彼は同じ私塾に通っている。

「それにどうせそのうちどっかに婿に出されるだけ——」

破裂音がした。今まで黙っていた夏侯惇が壁を殴ったのだ。壁が粉碎された。いつもの事である。

「ぽち様が婿に出されるだ?!」

「落ち着け姉者。まだ決まった訳ではあるまい」

「これが落ち着いていられるか！」

夏侯惇を宥める、静かに姉の横に立っていた妹であるクール美女、秋姉こと夏侯淵妙才。だが妹の言葉にも姉の興奮は止まらない。

「じゃあ秋蘭はぽち様がどこぞの馬の骨の所に婿に行ってもいいというのか！」

「いい訳あるまい。どこぞの馬の骨の所になど行かせるものか。だがなあ姉者、そもそも華琳様がそのような事を一言でも言った事があるか？」

「そうよ春蘭。私はぽちを政略の為の婚姻などに使う気は無いわ」

え？ そうなの？ 寝耳に水なんですけどぽちは自分の耳を疑った。夢のヒモ生活が遠のいた瞬間である。

「簡単な話よ。他家と縁を深く結ぶ事より遥かに、ぽちには曹一門の一柱になってもらう事が遥かに有意義だわ」

当然でしょ？ と笑みを浮かべる姉曹操。曹操よ、それは無い。絶対にだ。

「……で、貴方はいつこちらを向いてくれるのかしら」

ぽちはずっと曹操達に背を向けて椅子に座っていた。だって一物に血流が集中したままなんだから。屹立しっぱなしなので振り向くなんて出来る訳がない。

「……空がね」

「空？」

とりあえず窓の方を向いていたので適当に呟いた。ふむ、と華琳は窓から空に目をやる。

「風が……、なるほど。分かったわ。今日はいいから明日は一緒に私塾に行くわよ」

「華琳様……？」

「今から一刻程で恐らく雨が降るわ。ぽちはそう言いたいよ。じゃあね、ぽち。」

二人共行くわよ」

『はっ！』

え？ そうなの？ めっちゃ晴れてるけど。内心でそう思いながら三人が部屋から出ていった後、床に散らばる扉だった木屑や粉碎された壁、そして自身の息子

を眺めながら、まあ良く分からんがいつもの事かため息を付いた。そして一刻後、ちゃんと雨が降った。華琳姉すげえ。

翌日、華琳姉に連れられて嫌々ながら私塾にやってきた。授業中、先生の問いに対して無視を貫いたりもしたが、答えが分からなかっただけである。

「ちよいとぼちさん？」

「ふえ？ ああ、何じゃらほい麗羽さんや」

何故か私塾でしょっちゅう絡んでくる名門袁家のお姫様、袁紹本初こと麗羽さん。姉と喧嘩も多いが、それでも何故か仲が良いようで姉が真名を交換する際に何故か一緒に交換する事になった。真名ってついでに交換するもんじゃないと思うの。

「さっきの先生の問い、何故答えなかったんですの？」

「そんなの……分かってるでしょ？」

俺の頭の出来では解答なんてさっぱり分かりません。ちなみに麗羽さんは頭すっからかんで夢詰め込めているように見えて、私塾で一番成績が良い。姉は二番手である。まあ姉はひねくれた解答や、自身が正しいと思った解釈、それも新しい解釈を貫き通すときがあるのでそこが減点対象になっているだけだが。それはともかく、勉強は出来る。頭はおかしい。素晴らしいおっぱい。それが麗羽さんなのである。

「ええ、分かっていますわ。貴方が一步引き他の方を立てていることなんて。ですがぼちさん。確かに女性を立てる事も殿方の大切な役割かも知れませんが、貴方も自身に見合った評価をされるよう少しは動いても罰は当たりませんことよ？」

「ええ、良く言ったわ麗羽！」

なんか勘違いしてる麗羽さんにいつの間にか横に並び同調する我が姉。二人とも金髪がくるんくるんで仲の宜しい事。

「そうよぼち。この前の試験、白紙で出したそうね。さっき先生から聞いたわ」

「まあ。ぼちさん？ 流石にそれは駄目ですわ」

「確かに男より成績が下と言われれば誇りを傷つけられる人間は一定数間違いないわ。でもそれで傷つく程度の相手に貴方が氣を使う必要はなくてよ？」

「そうですわ。たまにはぼちさんの全力を見せて頂きたいものですわね」

「あら、ぼちが全力を出したらこの私塾の人間なんて貴方や私を含めても勝てるかどうか」

なにそれ。姉の俺に対する評価が天元突破やばい。いや麗羽さんの評価もかなりおかしいけど。話題を逸らさねば。

「……勝ち負けなんて意味無いし。それより美味しい物食べたい」

「まあそれでこそ、ぼちさんらしいのかも知れませんか。今日はうちに来ませんか？ 美味しい茶菓子を用意していましてよ？ おーっほっほっほっほ」

「じゃあ頂きに行きます」

「あら、じゃあ私も頂きに行こうかしら」

「良くてよ？　おーっほっほっほっほ！」

高笑いをする麗羽さんに即答するぽち。割りとゴチになりに行ってるからいつもの事なのである。金持ちの袁家のヒモになりたいとぽちは常々思っているのだ。ぽちにプライドなんてないのかって？　ないよ。

華崙と柳琳の姉妹が大好きです。あと秋蘭の新ボイスも好きです。個人的に違和感無かったし。声優変わって無いはずの恋が一番違和感を感じるといふ……。

第二話・日向ぼっこ

「ぼっちー！　居るっすかー！」

大きな声で叫びながら部屋へやって来る元氣系天然美少女、曹仁子孝こと華崙。これは捕まったら面倒だと曹操の弟ぼちは部屋から脱出しようと窓から身を乗り出した。

「あー、居たっすー！」

「なんでそっちから来るの」

部屋の窓から華麗に脱出しようとしたら、何故か窓側から現れた華崙に捕獲された。華崙は別にぼちの行動を先読みした訳ではない。なんとなく窓側からやってきた。なんとなくで行動しその動きが功を奏す女、華崙。ぼち程度がどうこうできる相手ではない。

「ぼっちー、今日は良い天気っすよー！　一緒に日向ぼっこするっすー！」

「華崙、また柳琳に怒られるよ？」

「じゃーあー、柳琳も誘うっす！　皆で一緒にするっすー！　ぼっちが誘ったら

柳琳も断らないっすよー！」

満面の笑みでなんかぎゃーぎゃー言ってる華崙。この前屋根の上で二人で寝てたら柳琳に涙目で怒られたのをもうお忘れか。ぶっちゃけ何かに目覚めそう……じゃなかった、まあ忘れてそうだよな、この娘はと思うぽち。でもぽちは日向ぼっこは自体は嫌いではない。むしろ好きである。時間を無駄に使ってる感がとても良いのだ。しかも柳琳の涙目とかいうご褒美付き……駄目だ。やはりぽちの中に何かが目覚めようとしている。

「姉ーさーん！ 何処に行ったのー！」

「あ、柳琳！ こっちっすよー！ ぽちの部屋っすー！」

柳琳こと曹純子和が華崙を探して部屋にやってきた。いつもの事である。いつも大変だね柳琳。

「ああもう姉さんったら、またぼちさんに迷惑掛けて……」

「迷惑なんてかけてないっすよー？ そーれーよーりー、今から三人で日向ぼっ

こするっすー!」

「姉さん、屋根に登るのは止めてってあれほど……」

「えー、いいじゃないっすかー。気持ち良いっすよー?　ね、ぼっちからも言ってくれっすー!」

そんな無茶なとぼちは思ったが、キラキラした目で見つめてくる華崙に逆らえず、とりあえず言うだけ言って、柳琳からの駄目!　じゃあ解散!　でいいかと言う思考で柳琳に声を掛ける。

「あー……、俺も柳琳と一緒にいいなー。日向ぼっこ気持ち良いよ?」

「……ぼ、ぼちさんがそう仰るのでしたら」

「あーそうだね。じゃあしようがな……え?」

「おー!　さっすがぼっち!　じゃあさっそく柳琳も行くっすよー!」

「きゃ!　ちょ、ちょっと姉さんったら引っ張らないでー!」

え?　柳琳止めてくれないの?　と一瞬呆氣に取られたが、自分で言っただけで訂正する訳にもいかず、しょうがなく華崙に引き摺られる柳琳を追い掛ける事にし

た。実に性格が似てない姉妹である。あれ？　周りに性格似てる兄弟姉妹居たっけか？　えーっと、華琳姉と俺、春姉と秋姉、華崙と柳琳、異母だけど麗羽さんと美羽ちゃん。お？　麗羽さんと美羽ちゃんくらいしか似てないなこれ。などとどうでも良いことを考えながらぼちぼちは二人の後を付いていった。

「皆で日向ぼっこ気持ち良いっすねー！」

華崙の声が空に響く。ちなみに華崙が全裸になるのは柳琳が必死に止めていた。まあしゃあない。華崙は可愛いが色気が皆無である。実に健康的な肢体をしている。間違いない脱がれたらフルに勃つな！　男の子なら当たり前！　色気ないって言ったじゃないかって？　それとこれとはまた別なんです！

「たまにはこういうのも悪くないわね」

「まあたまになら……でも日射しで肌の日焼けが気になりますわ。お姉様やぼちの美しい肌が焼けてしまいます」

「ふふ、栄華らしいわね」

屋根に向かう途中で出会った華琳姉と栄華こと曹洪子廉に、止めて欲しいと願

を込めながら一緒に日向ぼっこでもどう？ と声を掛けたら何故か快諾された。解せぬ。ていうか日射し気になるとかぼやくならせめて断れや栄華。男嫌いであるはずの栄華、俺がいるから拒否してええんやで？ まあ栄華から拒絶された事なんてないけど。少女趣味の危ない娘で、普段男性に対して物凄く辛辣である彼女だがはじめて会った時から普通に優しくしてくれている。俺の顔立ちが姉に似ているせいだろうか。

「はぁ……」

お天道様を見上げて、ぼちは一人ため息をついた。いや、美女四人に囲まれて幸せですよ？ しかし贅沢言うなら親戚じゃないほうが良い。後、振り回されないほうが良い。ついでに言えば寝転がって飯だけ食べさせてもらえるヒモになりたい。私は貝になりたい。

「どうしたのぼち？」

「いや……夢ってどうせ叶わないんだろうなって」

華琳姉の問いに正直に答えた。曹家にいる限り、きっと働かされるんだろうなあとぼちは考える。きっと何処かで大ポカをやらかすまでは労働を強いられる未来が待っているのだ。ヒモになりたい。働きたくない。

「このまま皆で居られたら幸せだろうなあ……」

この屋根に張り付いたまま、太陽を浴びぼーっと日向ぼっこを続けたい。そうすれば無理矢理仕事をさせられ、そのうち重大な間違いをやらかして皆に白い目を向けられる事もないだろう。そういう未来、絶対やってくる。考えるだけで憂鬱と、素直に告げるぼちに華琳が答える。

「何を言っているの？　ぼち」

「華琳姉？」

「私達も、春蘭も秋蘭も、ずっと貴方と一緒によ」

違うそうじゃない。そうじゃないんだ。後、それはそれで迷惑です。華琳姉は早く弟離れしてどうぞ。

「そうっすよ！　ぼっちは不安なんすね！　なんだか良く分からないけどぼち

の不安は私が取り除いてあげるっす！」

「華崙……」

じゃあとりあえずいつも無理矢理連れ回すのやめてくれないかな華崙。最近は華崙のノリに付いていけなくなりつつある。

「だっ大丈夫ですよ！ ぼちさんには皆が付いてますから！ 私も頑張ります！」
グツと両の拳を握り、励ますように言ってくれる天使。じゃなかった大天使柳琳。癒し粹。どうか養って下さい。

「……もしかしてまたぼちに縁談でも来ましたかお姉様」

「……ええ、勿論断ったわ。知っていたのねぼち」

勿論知りませんとも。ていうか本人に確認しろ。いい物件だったら喜んで寄生しに行くぞ俺は。そしてどう思ったら今の流れから察する事が出来るの栄華や。低脳を持って生まれた俺にどうか教えて。

「……それは断って良かった話ですの？」

「栄華、貴女ぼちを手放してもいいと言うの？」

「そんな訳！ でもその手の話を無下に断れば曹家の立ち位置が危ぶまれますわ」
「大丈夫よ。……麗羽が、袁家が話を付けてくれるらしいわ」

知らない所で何か話が進んでいる。もしかしてあれ？ この前麗羽さんの所にお茶しに行った時に言われた「心配しなくても大丈夫ですわ」とかいふあの謎の言葉はもしかしなくてもこれの事かな？

「あの、お姉様」

「言わなくても分かっているわ柳琳。……あまり麗羽に借りは作りたくないわね」

「まあ借り返せなくなったら俺が袁家に——」

「[[駄目よ！（っす！）（です！）]]」

凄い剣幕の皆に怒られたばかり。曹一門、やはりぼちに対してめっちゃ過保護である。

「……やはり家の力を上げなければぼちさんを守れませんね、お姉様」

「ええそうね栄華、その為には皆の協力が必要よ。皆も聞いたでしょう？ ぼち

の願いを」

「皆一緒っす！」

ああ違うんだと思うぼちだが、この場で否定してもらくな事にならないというのが自身の経験で分かっている為、だんまりする事に決めた。

「ぼちさん、良かったですね」

ニコッとぼちに笑いかける柳琳。そんな笑顔見せられたら実は出ていきたいなんて言えねえ。言える訳ねえ。もうなんかなんて言えばいいか分からないし、やるせなくなつてとりあえず皆にやけくそでニコッと笑つて見たら皆笑顔を返してくれました。

第三話・金持ちにタカる男

「ぼち兄様、この蜂蜜も食べるのじゃ！」

「美羽さん、ぼちさんに無理矢理勧めはいけませんよ？」

「うう……、麗羽姉様。ぼち兄様は妾に蜂蜜を勧められて喜んでおるに決まっておるのじゃ！」

「ごめん美羽ちゃん、もう結構お腹一杯かな」

「なんと！」

驚く美羽ちゃん可愛い。

ぼちが割りといつもどおりに袁家にお茶しに来たら、美羽ちゃんこと袁術公路が来てました。袁家にお邪魔すると美羽ちゃんにもよく出会います。ぼちが出会った頃は、美羽ちゃんは麗羽さんの事苦手だったのだけれど、ぼちが誘い三人で一緒にお茶を繰り返してたら徐々に打ち解けて仲良くなってきているようだ。しかも麗羽の高飛車な性格が美羽の面倒を見る事でお姉さん補正が掛かり少しずつ矯正されつつあるという。

タダで美味しい物を食べにきているだけのぼちだが、麗羽と美羽の仲の悪さが次世代の懸念であった袁家にとって二人を繋ぐ鍵となり麗羽の成長にまで繋がったぼちの存在はとても大きかった。茶菓子的美味いからというだけで四世三公の名門である袁家に出入りしまくっている男は袁家の懸念を晴らす救世主となり元来優秀であるその血が覚醒しつつある切っ掛けとなったのである。

後、袁家に出入りする頻度が上がるに連れて、見た目だけはいいぼちに沢山来ていた縁談が落ち着いてきました。皆、下手に袁家に目をつけられたくないからね。美味しい茶菓子をタカりにくる事で名家の後ろ盾を知らずに得た男、ぼち。

「うう……、ぼち兄様、ごめんなさいなのじゃ」

「あはは、でも美羽ちゃんに勧められて嬉しかったよ？」

「ほんとかや？　もっと誉めてたも！」

「美羽さん？」

「わっ分かっておるのじゃ、調子に乗ってはいかんのじゃな」

「はい、良く出来ました」

窘めつつも誉める麗羽と、麗羽に頭を撫でられ嬉しそうにする美羽。二人共にぼちが出会った頃よりほんとに人格がまともになってきている。これ二人が成長した後、袁家に隙は無いなと他人事のように考えるぼち。将来姉と対立する可能性なんて微塵にも考えてないぼちは、頭すっからかんでも数で押してくるだけで強敵だった相手を超強化した上で大陸最大最強タッグを作ろうとしているなんて塵程も思いませんだろう。頭残念だからね。

普通に考えたら袁紹が優秀になったら曹操が詰みそうである。霸王様が霸王出来ない。あとついでにこのまま美羽が麗羽と共に人格が成長すれば登場していない孫策も詰む。ていうか謀反企む必要が無くなる程度にまともな娘になりそう。三国志ってなんだっけ。

お茶菓子を摘まみに来るだけで本来の恋姫の歴史を大幅に変えつつある男、ぼち。恐ろしい男である。

「そういえばぼちさん、貴方の家の推薦や袁家の推薦を辞退なさったそうですね？

「あー、その節はごめんなさい」

「いえ、気になさらずとも大丈夫ですわ。ぼちさんの器量を思えばあの位では確かにわたくしも低いのだと思いますから。ですが、まさか文官として下級仕官の試験をお受けになっていたなんて思いもしませんでしたわ」

「兄様、何故兄様がそのような位の試験を受けたのじゃ!？」

「美羽さん。ぼちさんはね、男性の身で自らの力だけで駆け上がって行くつもりなのですわ」

「なんと！　さすが兄様なのじゃ！」

違います。まずうちの家や袁家に用意された地位が高すぎて仕事こなせる自信がまったくなかったんです。特に袁家な。雑用係である舎人とかでええねん。書庫の整理とかがええねん。いくら官位なんて金で買える時代だからっていきなり司馬とか出来るか！　軍統括、賞罰、人事、祭祀などを行う軍事行政官なんてド素人にやらせる発想頭おかしいと思う。袁家が与している派閥の編成に組み込まれるのは

間違いないだろうけど、俺が派閥崩壊の切っ掛けになる未来しか見えない。殺されるわそんなもん。

ていうかそもそも働きたくない。なのでこの間受けた試験も白紙で出したので就職失敗は確定的……!! まあどうせ真面目に受けても分からなかったけど。いやー国の為に働きたかったわー！ でも落ちたらしやうがないわー！ 残念だったわー！

「ぼちさんなら当然の事ですが、筆記は合格だったようですからあとは面接だけですわね」

……は？ 白紙で出したのに？

「試験、かなりひねくれていたそうですわね。合格者がまさかぼちさんお一人だなんて」

そうかそうか。まさか正解が無回答とか誰も思わないだろうね。え？ ほんとに？

「不思議そうな顔をなさってますわね。周りがぼちさん程優秀では無かっただけで

すわ」

「いやいやいやいや。ていうかおかしくない？下級文官の採用試験で筆記一人だけ合格とかおかしくない？採用枠イカれてる。」

「本来ならコネや金銭の無き者を落とす、建前だけの試験だったそうです。それを知った時は流石に呆れましたわ。まさか正面から突破する者が現れるなどと思っていなかったように宮廷ではちょっとした騒ぎになっていきますわ」

まさかの悪目立ちですやん。

「兄様なら当然なのじゃ！」

何故か自慢気な美羽ちゃん可愛い。ていうかこれ面接すんごく嫌な予感がしてきた。

「今回の試験、袁家とか曹家から何かしてないですよね」

「いえ、わたくし達も、貴方の家もぼちさんを信じていますから」
なんてこった。くそ、それを理由に辞退しようと思ったのに！

この時のぼちは、まさか司馬のほうがましかったと思う事態になろうとは露程も思っていなかった。まあ普通に考えたらそうだろうね。

第四話・国の重鎮の圧迫面接

——袁家

「麗羽姉様ー」

「なんですか美羽さん」

「姉様はぼち兄様と結婚せんのかや？」

兄様にはそういう話が沢山来とると聞い

たのじゃ！」

「……美羽さん」

「麗羽姉様？」

「わたくしはぼちさんを必ずや手に入れてみせますわ。ですが今はまだその時ではありません。今のわたくしは袁家の娘、世間からそう見られています。わたくしの事を袁家という家柄しか世間は見ていないのです。ああ、ぼちさんはわたくし個人を見てくれています。ですがそれではあのぼちさんと釣り合いませんわ。わたくしが自身で地位も名誉も手にしてぼちさんに向かっていきますわ！」

「おお！ さすが麗羽姉様なのじゃ！」

釣り合っていないのは見た目だけの低能のぼちさんのほうだと突っ込む人間は袁家にはいない。縁談の相手を選ぶ権利を持つ、それだけの力が袁家にはある。次期当主がそう定めているのであればそれに向かって袁家は動く。ちなみに麗羽や美羽と真名を交換した際に、麗羽に付き従う袁家を支える家柄の顔家の顔良、文家の文醜とも真名を交換し、二人がぼちを様付けで呼んでる時点でお察しである。それをぼちは気付かぬフリをしている。鈍感なフリをして問題を先伸ばしにして誤魔化す駄目人間である。

さてさてその袁家で噂をされてるぼちに場面は移る。

ぼちは遂に面接にやってきたのだが、入室を躊躇っている。なんせその部屋の中から嫌な空気がびんびんにしている。ぼちにはこの空気は経験がある。春蘭から無理矢理拉致られて山賊狩りに同行させられた時のような嫌な予感だ。

腕試しとか言ってならず者をぶったぎる春姉の後ろで無心になる俺ぼち。剣も持たず無手の俺は春姉が山賊相手に無双する様を後ろから能面のような顔でジッと眺

めていた。春姉に何かあったらとか心配なんてしない。絶対無いからだ。だって春姉くそ強いもん。剣持っていたら戦ったかって？ 俺が戦える訳無い。春姉に剣渡されたけど、いらねつつて返しました。「流石はぼち様」とか何故か言われましたが、少しでも俺の事思ってくれるなら連れてくるんじゃないかね。なんでそんな顔してたかって？ 怖かったからと、さっさと帰ってたからだよ。なんで俺が鉄火場に立ち会わなくちゃいけないんだよ。あの後しばらく肉食べられなくなったやんけ。

家に帰った時、「まあぼちも一緒なら問題無い事は分かっていたわ」とか華琳姉が言っていました何が分かってたんですかね。

まあ部屋の前でぼーっと立っていてもしょうがないので、仕方なく部屋の外から声を掛ける。

「曹犬、面接に参りました」

「来たか、遅いぞ。入れ」

高圧的な声が聞こえて来た。憂鬱だなと思いながら部屋の扉を開け、俺は固まっ

た。数秒固まった後、部屋に入らず扉を閉めた。

……見間違ひ？　あり得ない人居たような気がする。

「何をしている！　早く入れ！　私も暇ではない！」

「……曹犬、入ります」

覚悟を決めて扉を開く。うん、見間違ひじゃない。何度か偉そうにしているの街で見た事ある。

「その顔は私が誰か分かっているようだな？」

「はい、何遂高大將軍の顔は街で何度かお見掛けしました」

何進遂高大將軍。おいこの国の最高権力者の一人何してんだよ。

「……ここは下級文官の面接の部屋、だと思ひ参ったのですが」

「ああ、合っておるぞ？　暇だからな。戯れだ」

おおい、暇ではないって言つたばかりやんけ。くそ、これだから上の人間は嫌いだ。失言したら理不尽な理由で殺されそう。早く帰りたい。

「貴様が曹犬か。ふむ、噂通りなかなか良い見目の男ではないか。」

あかん。獲物を見る目してる。このエロそうな姉さんに狩られそう。いや正直貞

操に関してはむしろばっちいんだけど、華琳姉や麗羽さんが斬り込んでくるような気がする。大將軍の所にカチコミとか洒落にならんとか言う次元を遥かに越える。どうしたものかと黙っていると更なる災難が扉の向こうからやってくる。

「あら、姉様。こちらでしたか」

「おお、瑞姫か」

何進の妹、つまり何太后が現れた。めっちゃ可愛い。何この部屋。仕官すらしてない小市民である俺と国の心臓を握る二人が対面するとか太公望だって読めはしないと思うよ。

「あら？ あらあらあら？ 姉様？ そちらの男性は？」

「ああ、ほら、少し噂になっておっただろう？ 金髪碧眼の見目良い男が曹家におると。そやつだ」

「姉様、確かその曹家の嫡男は袁家の庇護を受けているという話ではありませんでした？」

「そうだ。こやつは自ら仕官してやってきたのだ。こやつの面倒を見てやるのは旨が多いとは思わんか。ついでに男の喜びでもこやつの身体に教え込んでやろうと思ってるな」

「もう、姉様。その子の扱いを間違えると大変な事になりますよ？」

「ふん、私が喜びまで教えてやろうと言うんだ。何の不満もあるまい？　なあ小僧」

やったぜ。じゃなかった多分色々不味いです。

というかそもそも働きたくないです。しかし今の会話にこの場から逃げ出す手掛かりがあった。袁家の庇護を受けているからと言った。ならば多少の無礼はいける。後で麗羽さんに泣きつけば首跳ねられなくてすむかも。もうこうなったら暴言吐いて逃げよう。

「は？　何が嬉しくてお前みたいな年増のババアに抱かれなくちゃいけないんだよ」

「……なんだと？」

やべ。多少どころじゃない暴言が口から出た。この場で打ち首にされるかも知れない。もうやけくそだぜ。

「何も嬉しくないつつつてんだよ。調子乗ってんじゃねえよババア」

「な、なにを……言って——」

「……へえ？」

何やら様子がおかしい何進。何太后がやるじゃないといった具合の表情を浮かべこちらにやってきて耳打ちをしてきた。ああ、美人の吐息がくじゃなかった、正直内容に耳を疑った。は？ほんとにそれを言えと？それ言ったら相手が大将軍とか関係無く誰に首を跳ねられても文句言えない。あ、そっか。もうそれくらいの暴言吐いてたわ。死ねって事か。良いですよ。最後は超可愛い何太后の言う事聞いて死にますよ。

「なあ傾」

「き、貴様我が真名を……!？」

「あ？ 喋って良いって誰が言った？ 黙れよ傾」

「……ハア、ハア、貴様……許しても無いのに真名を……ハア、ハア」

息遣いが荒い。顔が蕩けて朱色掛かってきた。これ……もしかして……罵られて喜んでるよな？

「姉様の性癖を一見で見抜くなんて凄くない」

ニコリと笑う何太后。あ、やっぱりそうですか。

「でも、これ俺やっぱり打ち首ですかね。真名なんて……」

「大丈夫よ。姉様こうなった後、何故かその時の記憶無いもの。自分の性癖認めたくないんでしょうね」

「……いやでも凄く後ろめたいんですが」

「気にしないで？　ほら姉様凄く喜んでるでしょう？」

なんか赤面しハアハア興奮して床に伏せてしまった一匹の雌犬。じゃない何進大將軍。……いいのかなあ。ていうか死を覚悟したとは言え真名を呼んだ俺も相当だけど、姉の真名を呼ばせるとかいいう妹、何太后、畜生だなコイツ。姉より性質が悪いわ。関わってはいけない人種。

「私以外にこの事を知っているのは貴方一人だけ。……分かるわね？」

「はい、誰にも言いません」

「宜しい」

「あの……じゃあ帰ります」

「はい、またね？」

「あはははは……」

もう会いたくないです。笑って誤魔化しながら帰路につきました。後日、連絡が家に来ました。面接の結果、大將軍補佐を命じられました。補佐で。え？ ほん
とに？

袁家の庇護を受ける男、ぼち。

大將軍の弱味を握り一気に権力を手にする（笑）

第五話・名将

何故か大將軍補佐とかいう新しい役職に任命された俺は、城内で色んな噂が飛び交う今一番話題の熱い男となりました。まあ売男とか色情魔とか誰とでも寝るとか何進の肉便器とか顔と身体で地位を手にいれたとか、そんな話ばかりだけれども。

そして若干否定しにくい。なんせあの面接の時の何進の記憶は、何太后によって、俺は何進にあひんあひんにされた事になっている。どっちだよあひんあひんになってたのは。でも事実が何進にばれると打ち首である。幸いな事は華琳姉や麗羽さんは噂を鼻で笑い、姉からは「実力で手にいれた地位だもの。実力で黙らせなさい」と無茶振りが飛んできました。なので何進と二人きりや、何太后もいる時は出来るだけ何進を罵ってびくんびくんさせてます。姉の言い付けだから仕方ないね。ま、何進の頭の中では俺がびくんびくんなってる事になってるから問題あるまい。

ま、仕事らしい仕事してないけどね！ 何進をびくんびくんさせてるか、何太后……秘密を共有する仲って事で真名交換した瑞姫や、何度も閨を共にする仲（一

度もしてない」と交換した傾と恐らくこの国最高級の茶菓子やお茶を楽しんでるだけである。でも袁家で食べる茶菓子のほうが美味しい……。あれ俺の好みに合わせてたんだなと実感する。ちなみに真名は他人の前では呼んではいけない事になった。とくに瑞姫なんて他人の前で呼んだら大変な事になるからと。まあそれはそうだろうと納得している。ていうか交換したくなかったけど圧力に負けただけなんだから。

「なあぼち、城内の噂を知っておるか？」

「ん？ なんの？」

大將軍の問いかけにタメ口で返す男、ぼち。恐らく大陸広しといえどもこの男だけである。

「お主が私の肉便器だの呼ばれている事だ」

普通言いいにくい事をズバッと言う傾。ヒューっ。男らしいぜ。

「まあ、事実だがな」

いやいやいやいや無実です。あんたの頭の中だけだよ。

「だがあまりにもうるさいと面倒だな。お前ちょっと手柄を立ててこい」

「……は？」

「何、私の代理として賊狩りをしてこいと言っているだけだ。お前なら簡単だろう。先日袁紹と話をしたが、貴様の才覚を偉く高く評価しておったからな。」

……麗羽さん何してくれてるんですかね。

「安心しろ。討伐の際はお前には私と同等の権限を与える。故に勝ったも同然だ。お前の声は私の声という訳だ」

「いやその理屈はおかしいだろ頭の中まで発情したのかクソババア」
「な——」

最近、傾の発情スイッチ入ってからあひんあひんになるまで時間が短くなってきた。調教が行き届いてる模様。

まあ残念ながら賊討伐には行かされる事は決定事項であり、何故か総大将に命じられた俺。何進大將軍の代理である。今この国の軍事の頂点は、一度も軍を率いた

事がなく、剣も槍も使えぬ俺である。頭おかしい。相手の規模は三千程度。こちらは正規兵六千を率いて出立である。そしてあからさまに軍内で腫れ物扱いされる俺。俺、賄賂要求しないし発言気に入らないからって首刎ねたりしないよ？ 俺がそっちの立場なら関わりたくないから残当である。

出立一週間前、未だに軍議していない事に気付いた。あれ？ 俺ハブられてる？ いや別にお飾りでいいんだけどさ。きつと周りが既に全部把握してるやろうと能天気に関内を散歩していると薄紫色髪の少女から声をかけられた。ある意味事案である。

「……あ、あの、曹犬大将軍代理であっていますか。シャンは……私は姓は徐、字を公明と申します。この度は共に遠征を……えーっと」

可愛い幼女が現れたと思ったら、どうやら賊討伐の遠征を共にする一人のようだ。堅苦しい挨拶が苦手らしい。まあ俺の悪名がひどすぎるというのが多分にあるだろうが。そしてそんな俺の元に恐らくお前行けよと無理矢理貧乏くじ引かされたであろう、徐公明。可哀想。

「徐公明か、宜しく！」

笑顔で挨拶し、右手を差し出したらビクッと一瞬驚かれた。大丈夫、握手で妊娠した人間はいないぞ。恐る恐る握手を返す徐公明可愛い。

「あ、あの……遠征についてなんですが……」

「うん？」

「まだ何も手配されていないようですが、その……」

言いづらそうに話す徐公明から衝撃の事実が告げられる。まじかよ。全部終わってると思ってたわ。無能ここに極まり。そうだ。

「委細任す」

「……へ？」

「委細徐公明に任す。あ、兵糧だけやっとくから！ 後は大將軍代理命って事で宜しく！」

そう言って大半を目の前の少女に投げて逃げ出し、俺は兵糧の管理をと兵糧庫に向かった。が、どれくらいあれば足りるか良く分からなかった。どうすんべと悩ん

でいたが、考えても分らないのでとりあえず保留にしてまた城内を散歩する事にした。明日やろうは馬鹿野郎とはよく言ったものだと他人事のように感心していると、麗羽さんに出会った。

「あらぼちさん。この度は賊討伐の総大将の大任、おめでとうございますわ」
「ますですわっておかしくない？ まあそれはおいといて、実におめでたくないですわ。」

「……あら？ どうしました？ なにやら浮かない顔をされているようですが。わたくしで良ければ相談に乗りますわ」

「うわーい。私塾一の天才なら間違いないと兵糧どれくらい持っていくか悩んでると話す。」

「そんな事ですか。ぼちさんの悩み、この麗羽にお任せあれ。手配はわたくしがしておきますわ」

「麗羽さん、ありがとう」

「初の遠征での総大将の就任祝いと思って下さいませ。おーっほっほっほっほ」

ありがとう麗羽さん。次回以降は今回を参考にさせてもらおうと三日で忘れる誓いをぼちは立てるのであった。

遠征当日。

「あの……曹犬様」

「なんだい徐公明」

「その……兵糧が……」

「ああ……うん」

麗羽さんに手配してもらった兵糧。くっそ多い。流石に俺でも分かるくらいくそ多い。将と兵も全員啞然とするくらい多い。適当に誤魔化すしかない。

「これはな……余った兵糧は皆の褒美として山分けするからだ」

『!?』

ぼちの言葉を聞いていた皆が耳を疑う。

兵に兵糧？ 現地調達で良からう。ああ欲しければ賄賂を寄越せ。何、金が無いだと？ お前らの兵最前線な。くらいが常識な漢王朝において、遠征当日まで一

切賄賂を要求しなかった所か、明らかに多い兵糧を皆で山分けすると言ったのだ。「賊討伐を早く終わらせればそれだけ皆の褒美が増えるぞ。将だけではない、兵もだ。全員に兵糧を配るぞ。さあっと討伐済ませて皆で山分けしよう」

『おおおおおおお！！！！！！！！！』

「あ、あの……シャンの所にも貰える……んですか？」

「当たり前だろう？」

「!？」

徐公明は現体制にうんざりしていた。何かあれば賄賂、賄賂。昇級も自身の兵の待遇を保つのも。今回だって、最低限ではあるがなんとか自身の兵を守る為の金銭を四苦八苦用意していたのだ。でなければいつもなら捨て駒確定は明らか。徐公明はその武勇天下に響いてもおかしくなき武芸者であるが、自身の率いる兵を守る為に現体制では埋もれている人材である。

「シャン……頑張る！」

「お、おう。頑張ったら頑張った分だけ渡すからな」

「うん！」

これで自身についてきてくれている兵にお腹一杯にご飯を食べさせてあげられると徐公明は気合を入れた。ぼちは自身の懐具合には興味がほとんど無い。美味しい物を食いたければ袁家に行くだけだから。くそ野郎である。

何もかも徐公明に押し付け自身は号令くらいしかしなかったぼちの初遠征は、異常な程の士気の高さに加え、異常な行軍速度と異常と言える被害の少なさで敵を殲滅した。悪名ばかりであったぼちが、名將と言われるようになるまで時間は掛からなかった。全部他人に任せた結果がこれだよ。ただ賄賂などは一切受け取らず、自分で戦場を見て自身なりにちゃんと周りを評価して褒美を配った事だけはきちんと仕事をしたと言えるかも知れない。もちろん評価筆頭は徐公明である。

第六話・武勇、天下に響き渡る

都度四度。賊討伐の遠征軍の総大将として文字通り大勝で終えたぼちは希代の名将、皇帝の懐刀、竜の牙と呼ばれるようになっていた。本人が聞いたら憤死するかも知れない。二度目の遠征から副官として徐晃公明を指名した。それに際し、騎都尉であった徐晃は裨將軍を任ぜられた。この飛び級昇進は徐晃も驚きである。

ぼちが何進に頼んだら「ああ、いいぞ」の一言で決まった模様。そして自軍（というか徐晃軍）の編成に、徐晃の負担が大きい事を案じたぼち（自分で働く気が無い自分）が働くと邪魔でしかない思いと引っ込んでいる）は、賄賂を拒み干されていた盧植子幹を取り込んだ。

何進には「余ってるならくれ」と言い、何進も流石に盧植はと躊躇したものの最終的には首を縦に振る。その時の交渉テクニックはこの大陸でぼちと何太后しか持っていない。尚、盧植をぼちが指名した理由は大人しそうだし眼鏡枠とか貴重なのではとかいう良く分からない理由である。

何故か指名された盧植は、困惑しながらも賊討伐時に献策を書簡に纏め名将と噂

されているぼちの元へ行つた際に「じゃあ採用で」と即答され更に戸惑う事となる。「大丈夫。信頼してるから。責任は全部（何進が）取るから任せて」と初めての献策で全て信頼すると言つてのけたぼち。そして徐晃と盧植に渡せる物がろくにないがと、真名を預け信頼し命を預けると言つた。それは行動に現れていた。何故ならぼちは行軍の際、帯刀しないのだ。剣も槍も、二人がいくら言つても持たない。だつて使えないもん。だが事実はどうであれ、二人はそれを信頼と受け取り、二人がぼちに心酔し彼の為の剣となり盾となる決意を固めたのも当然と言えたかも知れない。

まあそんなこんなで過ごしていたある日。

何故か皇帝陛下の御前で華雄と試合をする事となった。

俺は今日、死ぬんだと思う。

事の切っ掛けはこうだ。俺と何進、あと徐晃が城の中を歩いていた。大將軍と大將軍補佐、周りは皆道を譲る。まあそんな中に華雄がいた。譲つてはくれたものの、俺に向かつて「何進の腰巾着めが」と小声で呟いた。俺は無視した。小言など

慣れているからなんとも思わない。が、「ぼち様を……悪く言った！」と徐晃がキレた。徐晃がキレたのなんて初めて見た。普段はのんびりしていてふわふわした空気を持つ穏やかな娘なので、ぼちは徐晃が怒る事なんて想像もしていなかった。「やるか」と得物を構える華雄。応じ構える徐晃。どうしたら責任を全て何進に押し付けられるか考える俺。

三者三様の場面で、何進が言った。

「華雄、貴様そんなに不満ならぼちと一戦交えるか？」

「ふん、その男が私と戟を交えるか？ 笑わせてくれる」

「なら負けたら分かっているな。ふさわしい場を用意してやる。首を洗って待っている」

「首を洗うのはその腰巾着だろう」

は？ と口を挟む間もなく俺が華雄と戦う事になった。この時はまだ軍同士の模擬戦かなと思っていたのだが、何進から皇帝陛下が見守る御前試合となるとか後で言われて素直に何進死ねと思いました。死ぬのは俺ですな分かります。

まあそんな事があり、ほんとに最悪な事にちゃんと場が整いました。靈帝に少帝が豪華な椅子に座り退屈そうに眺めています。観客も割りといいます。ていうか城の中の主要な将や文官皆いるんじゃないかねえかな。華琳姉や麗羽さんもいるな。みんなそんなに俺の惨殺ショーみたいのかそうかそうか。

「曹犬、よく逃げずに私の目の前に立ったと誉めてやろう。だが、貴様どういうつもりだ」

「……なにが？」

「剣も槍も持たず、この私を舐めているのか！」

「いや必要無いし」

「なんだと！」

そう、フル装備の華雄に対し俺は普段着で無手である。だって剣も槍も使えないし。戦場にだって一度も帯刀して行った事ない。徐晃や盧植にも何度も護身用に帯刀をと言われた事があるが、全部断った。必要無い、皆がいるからと剣なんて振れないなんて今さら言えず、信賴してると言って誤魔化し続けて今に至るのだ。

この場ですら帯刀していない事に驚いていたが、徐晃は「ぼち様……信じてる」と言っていた。いや負けるの分かってて信じてるとか言われても。もしかしてこの試合賭博やってる？ もし誰かやってたら俺の負けに全額ぶっこめばいいよ。

とかなんとか現実逃避していると、俺の格好と武器を持って来なかった事に華雄がキレた。あれ、おかしいな。あわよくば手加減してもらえるかと思ったのに。

「始め！」

何進の合図と共に駆ける華雄。棒立ちの俺。相手の烈帛の気合を目の当たりにし、死を確信した。

華雄が大戦斧を全力で横風ぎに振るう。「ぶあつくしょおおい」大戦斧が空気を切り裂く豪音で、声だけ掻き消されたクシャミで腰が90度曲がり不格好にぼちは屈み込む。大戦斧の下を、まるで様子を見ながらさっと掻い潜ったように周りからは見えただであらうぼちは、「うっわ……恥ずかし」と慌てて立ち上がる。立ち上った際にぼちの後頭部がやや前屈みの体勢であった華雄の顎先を掠める。例えるなら

ボクサーの右フックが顎先を捉えたかのように。ぐらんと華雄の脳が揺れる。華雄の意識を身体が無視し、膝が崩れ背中から地面に落ちる。

「お？」

立ち上がったら華雄が倒れた。訳が分からないぽちは咄嗟に華雄の背と腰を抱いた。俗に言うお姫様抱っこの体勢。顔だけは良い男、ぽち必勝の形である。

「ッッ!!」

何故倒されたか分からないが今の自分の体勢が、周りからどのように見えるか気付いた華雄の顔がゆでダコのように真っ赤になる。猪武者華雄、間近に接近したばかりの顔を見て一瞬自分が武将である事を忘れ、女である事を自覚する。

「は、離せ！」

「あっはい」

離せと言われ、優しく地面に華雄を降ろすぽち。華雄は立ち上がりたくてもまだ腰から下が言うことを聞かない。

「あの、続き……やります？」

「……私の負けだ」

え？ そうなの？ ぼち的にはよく分からないうちに勝負が決まった。何故か勝ったらしい。これ周り納得するのかなと周りを見渡す。

「今の見えたか？」

「多分……あの屈んだ瞬間に腹部に一撃を入れた……ように見えたが」

「いや、屈みながら側頭部に拳を入れたように見えた」

「そうなのか……ただ屈んだようにしか見えなかった」

「凄まじい速さの一撃だった」

「それに加え、一撃を加えた後のあの優美な振る舞いよ」

「あれ幾ら払ったらやってもらえるのかしら」

「羨ましい」

周りがなんか勝手にガヤガヤ言ってるが、とりあえず勝ったって事で良いらしいとぼちは考えるのをやめた。猛将華雄を正々堂々と正面から鮮やかに破ってみせた

ぼちの武勇は、瞬く間に大陸中に知れ渡る事となるのであった。ほんとかよ。

「ぼちさんが勝ちましたわね。当然ですわ！」

分かっていたと大きな胸を堂々と張り、まるで自身が勝ったかのように誇る袁紹。

「ま、当然ね」

こちらも当然と話す曹操。がそんな曹操の表情に何か引つ掛る袁紹は訝しがる。

「華琳さん、何か意外そうな顔をしていますわね？」

「あら、そうかしら？ 私は元々ぼちが負けるはずがないと言っていたでしょう

？ 信頼しているもの」

「それもそうですわね」

確かに常日頃から弟を溺愛しているこの姉が弟を信頼しないはずがないかと、自身の思い違いと直ぐ様思いを改める。

「さ、忙しくなるわよ麗羽」

「分かっていますわ」

賭け事は胴元が儲かる物。そして胴元は信頼が大事。袁家の名を借り今回の勝負の胴元を務めた曹操と、名を貸し協力した袁紹が今回一番金銭的に儲けを出した。そして男が勝てるはずが無いと大穴であったぼちに無二の信頼を寄せている二人が、売り言葉に買い言葉と乗せられて、まんまと賭けさせられたが大勝したのは言うまでもない。

感想ありがとうございます。

第七話・聖人君子

権力を手にして人が変わったと言われる人はとても多い。いきなり漢王朝の軍事実質ナンバー2となったぼちは、曹家の出でありながら本質の小市民っぷりは相変わらずであった。

華侖から「すごい美味しい点心の店見つけたっすー！」と言われれば華侖や柳琳と一緒に普通に行列に並ぶ。周りがぼちに気付き、譲ろうとしても「いいからいいから」と普通に並ぶ。店の人間が気付き「お代は結構です」と言えば「いやいや美味しかったよー」と少し多目に払って出る。

街中で子供が迷子になっていれば手を繋いで一緒に親を探す。子供達とはしょっちゅう華侖と一緒に遊んでいるので扱いは慣れたものである。

自身が黒と言えど白であろうが黒となる程偉いはずなのに、余所見していてぶつかれば咄嗟に「あ、ごめんなさい」と謝る。下端役人がぼちと気付かずに高圧的な態度を示した際はどこからともなく徐晃が現れぼちと身分を明かし、「……俺死んだ」と諦めた役人に対して「次からはお互い気をつけようね」の一言でなんのお咎

めも無しで終わらせる。

賄賂献金その類い一切受け取らぬぼちではあったが、市民であつた時に比べれば遙かに手持ちの金が多くなつていた。小市民ぼちは小金を持てば気が大きくなる。ぼちは軍事の際の報奨を、何進がケチれば身銭を切る。「俺金持ちだし平氣平氣」と予算をあまり考えずに報奨を出す。なので当然褒美として出すつもりだった金が足りなくなるのは必然だったと言える。ぼちは袁家に金を無心した事は一度もない。援助も全て断っている。お腹一杯食べられれば満足出来る男なのだ。しかしなんとか金を捻出したぼちは褒美を渡す為に皆を集めた会議に出る。

集められた人間は一樣に絶句する。とても役人とは思えぬ、一市民でも着るかなというボロ着。そして何より美しく長かった髪が坊主に近しい短髪となつていた。その変わり果てた姿に皆が言葉を発せず黙る中、盧植が言葉を絞り出し「ぼち様、その……お髪は……どうされたのですか」と聞けば「皆に褒美出す為に売つてきたよー」と笑い話のように答える。ぼちが身銭を切つて出していた事を知らなかった一同、余りの出来事と事実に関心し言葉を失う。ぼちが賄賂を拒否している事は既に周知の事実。曹家にも袁家にも、どこからも金銭を頼りにしているとは聞かない

目の前の我らが將軍は、皆に褒美を配る為にその美しい髪まで犠牲にし金銭を捻出してきたのだ。その出来事に泣き出すものまで現れる。その場にいた全員完墜ちである。信者といえる人まで現れ始める始末である。あざとい。ほんまあざとい男やで。

ぼちのこの行動、一気に噂が拡がり「何それ……聖人？」「え、やだ格好良すぎ」「まじかよ真似しよう」となんと部下に献金を要求するのが当たり前の風潮から、部下に褒美出すのマジ格好良すぎという一大ブームがやってくるのである。腐敗した漢王朝を自らの行動で変えつつある男ぼち。

腐った洛陽、俺を誰だと思ってるんだと無銭飲食する役人も多数いる中で、常勝不敗にして自身の武勇も凄まじいと言われているぼちの変わらないマイペースっぷりは大陸中の噂となり、いつの間にか聖人として持ち上げられ漢王朝は曹犬様がいる限り滅びぬとまで言われる始末である。どうしてこうなった。

洛陽中の人気を背負うぼち。ここまであからさまになれば、流石に何進も自陣営とはいえ己の立ち位置の邪魔となるかと思ひ始める。ぼち本人は素直に言うこと聞

いているだけなのに。何進もぼちは自身の魅力の虜だと思っているが、ぼちの周りがぼちを持ち上げ巻き込めばクーデターも余裕の様相になってきたから何進的にはしゃない。しかしぼちを切るのは愚策も愚策だと理解している。己が使える手駒でここまで軍事が優秀な人間などいない。ならば使い潰すしかあるまいと何進は今後の方針を決めた。

「ぼち、長安で馬騰軍と合流しそのまま涼州に行つて羌族共の反乱を抑え、返す刀で幽州へ行き幽州軍と共に烏丸の奴らを討伐してこい」

「は？」

こうして新たに対異民族軍として編成された軍の総大将となったぼち。軍の出立に際し、洛陽中の市民が集まり「護国の英雄、曹犬様万歳！」とまだ対異民族戦をこなす前から護国の英雄扱いに困惑を隠せぬぼちと、軒並みぼちの為ならば自らの命など投げ出す覚悟の將軍並びに兵達、曹芝犬の為なら死ねる会会員一同は洛陽の地を後にするのであった。

短めです。

革命の新キヤラ達とイチヤイチヤさせたくて始めたはずなのに、そこまてなかな
か行けない。

第八話・長安

長安に着き、のほほんとしたぼちを除く周囲の人間は殺氣立っていた。馬騰が病氣だから行かないと言つてぼちに会わないのだ。何進の命令なんか聞くかボケという感じが透けて見えすぎである。娘の馬超猛起が代役として立つという話だ。何進の代役のぼちと馬騰の代役の馬超。ぼちは親近感を覚えた。

「お前が曹犬か、あたしは馬超猛起。宜しくな」

仮にも立場が上のぼちに対する馬超の礼を失するってレベルじゃねーぞ的な齒に衣着せぬ態度にぼちの周囲は殺氣立つ。馬超はそれに対してなんだこらやんのか的な空氣を出しているが、馬超と共に来た横に立つ馬岱の顔は「は？ 何やっちゃつてんの姉様」と驚きと焦りとふざけんじゃねーよ的な複雑な表情になっていた。

「おー宜しくー」

馬超の態度を特に気にせず軽く返事をし、握手を返すぼち。ぼち側も、己の主がそう返すのであれば殺氣を引っ込めるしかない。が。

「涼州はあたし達の庭だ。あたし達にはあたし達のやり方がある。邪魔すんなよ？

無礼不躰不作法粗野。馬超の言い様にぼちの周囲がキレたのは当然だろう。馬岱の顔が青ざめる。だが周囲が口を出す直前にぼちが口を挟む。

「あ、そう？　じゃあ邪魔しないからそっち主力で宜しく」

なんだ楽出来るじゃねえかと特に考えずに任せる発言をしたぼち。こっちの戦力減らさないからそっちでやれよと言った趣旨の発言で、無礼を許す懐の深さを見せつつしてやったりと言ったぼちの周囲は少し熱が下がる。

「中央の連中は融通が利かないって母様が言ってたけど、なんだ分かってるじゃないか！　任せろ！　この錦馬超の槍の冴え、その目に焼き付けてやるぜ！」

この勇ましい馬超の発言に、ああなんだこの娘アホの脳筋娘かとぼち側の人間が全員気付いたのはいうまでもない。ぼちの馬超に対する思いは会話の途中から一つだけしかない。そんな短かい丈の服で馬乗ったら中身見えるよね？　見せてるの？　見ていいんだよね？　これだけである。男なら仕方ないよね。

「あの、蒲公英は……じゃなかった、私は馬岱と申します。先程は姉様が失礼な態度を取り、本当にすみませんでした」

馬超を若干口リ気味に寄せた容姿の馬岱が、馬超が気分良くその場から離れて直ぐに謝ってきた。どうやら涼州側の良心はこの娘のようだと理解した。

「いいよいいよー、実際対羌族はそっちに一日の長があるのは間違いないから。勉強させてもらうよ」

嫌味もなく笑いながら話すぽちに、これまで出会った中央の官僚とはまったく違う人物だと馬岱は理解した。

「これが聖人、曹犬様の人となり……。聞いてたよりも素晴らしい人だね曹犬様は！」

聖人って何？ と若干の引っ掛かりを覚えつつも褒められて悪い気はしないばかり。

「ところで馬岱も出立するんだよね？」

「うん、じゃない……はい、蒲公英も姉様に負けないよう頑張ります！」

まじか。この娘もこんな短かい丈の服で馬に乗るのかと今回の遠征に来て良かった

たと思い始めたぼちであった。思考が最低である。

長安にて少しの滞在の間に筆を取るぼちの元に、主に用があった盧植が訪ねてきた。

「ぼち様、今宜しいでしょうか？」

「どうぞー」

「失礼します……あら、仕事中でしたか」

「これ？ これは文通相手に文をね」

「文通……ですか？」

「そうそう、ほら、雑誌の阿蘇阿蘇で文通相手募集みたいな項があつてさ、栄華……うちの従姉妹が読んで面白そうだったから始めてもう三年かな。しばらく文出せないだろうし出しと思うって」

「そうでしたか」

「この文通相手凄くてさ。よく色々相談してるんだよね」

「ぼち様が相談を……？」

「まあ軽い話だけどね」

ぼちがこの文を交換している相手にしている相談、実はまったく軽くないし割りと重大な事が多かったりする。しかし相手からの返答はまるで未来を予想したかのような適切な解答がよく返ってくるのである。文通相手、その名を諸葛亮孔明という。

「で、用事？」

「はい、実は教え子でぼち様に紹介したい娘がいます……桃香ちゃん、入ってきて」

「は、はい」

盧植に促され部屋に入ってきたのは桃色髪の巨乳で大人しそうな娘。百点ですね。

「あの、私は劉備玄德って言います。真名を桃香って言います」

「いや初対面で真言われても困るんだけど」

いきなりの出来事に困惑するぽち。ぽちの周囲で言えば、華命も自身の真名を渾名程度にしか考えていない人間なのでいきなり真名を名乗る人物が元々周囲にいない訳でもないが、やはりぽちにはいきなり真名を名乗られても抵抗があった。何姉妹に強制された過去は忘れた。まあ言っても何姉妹だって出会ってしばらくしてからの交換だからね。

「もう、桃香ちゃんったら……。ぽち様、桃香ちゃんを少しうちで面倒見てあげられないかと思いました」

「あの、私色々曹犬様の噂を聞いて、どうしても一度お会いしたくて来ちゃいました」

来ちゃいましたとか言われても。でも巨乳だし大人しそうだし、盧植の教え子なら問題無いだろう、なんかあったら責任は盧植が取るやろ、巨乳だしとなるべく顔に視線をやりつつ視界の端でデカさを確認するぽち。

「いいんじゃない？ 文官？」

「はい、私の補佐をしてもらおうかと」

「そう、じゃあ宜しく劉玄德」

「はい、宜しく願います曹犬様！」

何この子の笑顔太陽可愛い。とこうして何故か涼州に行く前に魅力チートが合流した。真名の交換にはちよつと早いよ。ちよつとただけだな。後、文を見てはわわ軍師があわわ軍師を巻き込みアップを始めました。

尚、次の話までには交換している模様。

お気に入り900突破したと思つたら1300突破してた。皆様ありがとうございます。感想も毎回楽しく読ませてもらってます。きつとウキウキしながら書いてる私が一番楽しんでる事でしょう。多分文章からノリノリ感が滲み出ているだらうなと思います。

第九話・馬超、心酔する

聖人、その噂に偽りなく。

名将、その采配に曇りなく。

皇帝の懷刀、その尋常ならざる切れ味に留まること知らず。

馬超軍のぼちに対する評である。

まず出会いで礼を失する態度で接した馬超にその器の大きさをぼちは示した。サボれるやっとなんて思ってたなんて馬超は気付かない。

涼州に入り、少数の武装した羌族がこちらを見て逃げ出したのを見つけた馬超が強襲しようとしたのをぼちは止めた。ふざけんな今だろと憤慨する馬超。しかし斥候を出してその少数が罠だった事を知る。こちらを誘い挟撃する為の布陣を敷いていた。ぼちの制止にて馬超軍は罠を回避する。ぼちは長い乗馬での移動で尻が痛くて急ぎたくなかっただけである。

次の少数の羌族はぼちが蹴散らすだけでよいとの指示を出す。馬超は指示を疑

い、無視し羌族を捕らえ尋問するも相手は羌族の中でも既に群れから独立していた集団で何の情報も持っていなかった。そこまで分かるのかと驚く馬超。面倒だっただけである。

再び少数の武装した羌族が逃げ出す様を馬超が見つける。今度も馬超を止めるばかり。そしてまたも斥候にて羌族の罌であつた事が分かる。

そして三度、またかと馬超が今度も羌族を見逃すのであらうと考えるもぽちが全軍に号令を掛ける。殲滅せよと。馬超は半信半疑ながらも羌族を苛烈に追う。追つた先にはどうせ漢の奴らは臆病風に吹かれ追つてはこまいと油断した羌族の集団がいた。油断した相手に遅れを取る筈も無く一網打尽と打ち倒すのは簡単であつた。次から次へとズバリの確な采配を振るうぽちに本当に羌族を相手にするのは初めてかと驚く馬超。尻の痛みに慣れてきたので一回くらい行つとくかと思っただけです。

まあぼちの内心は置いといて、その迷いなく的確な采配は大打撃を負いかねなかつた馬超軍を救い、当初の予想より遥かに少ない被害で最大限の戦果を上げた

いえよう。そしてその采配に一切の迷いなく従う曹犬軍。強い。馬超は第一印象でただの優男だと決めつけた自分を恥じた。いやそれで大体合ってるんだけど。そしてこれ程の采配を振るうぼちに反抗的な態度を示した己を恥じる。いや適当に采配振ってるんだから本当なら怒っていいのよ？ 曹犬、尊敬すべき人物であると馬超は考えを改めた。一度そう思えば馬超は全てぼちの言うことを素直に聞くようになった。脳筋だからね。

強襲した羌族の集団から涼州内で暴れている羌族の本体の位置を把握した曹犬軍と馬超軍は、一路敵の本体へ向かう。だがぼちは思う。やはり尻が痛いので休みたいと。

「曹犬様、近くに董卓の街があるがどうする？」

言葉遣いは相変わらずだが、ついに様付けで呼び出した馬超は一応ぼちに聞く。常識で考えれば遊牧民族相手に余分な時間を与えれば相手が移動していなくなる公算が高い。一刻も早く相手を捉え叩くべきである。だが。

「よし寄ろう」

ぼちは即答した。尻が痛いからだ。寝台で寝たいのだ。馬超は、そして馬超軍はもはやぼちを疑わない。ぼちがそう言うのであれば、自分達には分からないがそれが正しい事なのだろうと考える。いやどう考えても間違ってるんだから誰か止めろよ。曹大軍、特に軍師やつてる盧植、お前だよ。「なるほど……、先に董卓と接するほうが利が有るとお考えですか。流石です」とか納得してんじゃねえよ。軍師ならちゃんと助言して止める。後、尻が痛くならない馬の乗り方誰か教えてあげて下さい。鎧とかいうチートアイテム？ 無いよ。よく三国志系のチートもので出てくるけど無いよ。そんな物考えつく頭なんてぼちにある訳がないのだから。

急遽官軍が街に大挙して押し寄せる事になったその董卓達は焦る。普通に考えれば食料の現地調達だと思うであろう。官軍に差し出さないのであれば逆賊の汚名を着せられ街ごと襲われる危険がある。しかし街に余分な食料などない。寒冷地であり痩せた土壌が広がる涼州。懷事情が明るい訳がない。それを知りながら官軍を連れてきた馬家を呪った。同じ涼州の民でありながら自分可愛さに仲間を売るのかと。

しかし、しかしである。例のごとくめっちゃ余計に糧食を持つ曹大軍。なんと現

地調達どころか食料を配り始める。ぼちが「なんかみんな痩せてない？ 飯分けてあげてもいいかな？」と自軍の皆に相談する。糧食を分ける。それは自軍の取り分、つまりそれぞれの報酬が減る事。喜ぶ人間がいるだろうか。むしろ自軍のやる気を削ぐ行為と言えよう。その愚行に反対する者、勿論一人も居る訳がない。

皆、喜んで協力して糧食を分ける。元々総大将たるぼちが相談する必要などないのだ。しかし皆一人一人に、ただの一兵卒にまで「いいかな？」と確認していく。ぼちに反対する者がいる訳もなく、むしろぼちの行いに協力出来る事に喜びを皆覚えるのであった。曹犬軍、ちょっと狂ってきてませんか？

喜んで食料を受け取り感謝する街の人々。何事かと驚き、その曹犬軍の行動を董卓軍の人間が何の企みかと怪しむのは仕方のない事だろう。ただ、100%良かれとぼちは善意でやってるのでいくら怪しんでも何も出てこないよ。何も出てこないのだが、疑惑の目は向けられたまま董卓の館にぼちは迎えられた。

現漢王朝実質No.2と目される曹犬に対し董卓の軍師賈詡文和は出来る限りの金を集めて董卓に便宜を図ってもらう為に渡そうとした。が、当然ぼちは受け取らない。額が足りなかったのかと賈詡は聞く。しかしぼちは「そんなに金があるなら子

供達に少しでも食べさせてやってくれ」と賈詡に頭を下げ頼む。賈詡は驚愕したと言っている。辺境の、官位も何も無い己に、漢王朝の將軍たる曹犬が頭を下げ頼むなど誰が考えるというのか。賈詡は慌ててそのようにするから頭を上げてくれとばかりに願う。ぼちは「ほんとに？　ありがとう」と心から喜び笑顔で賈詡の手を握った。賈詡文和、そのぼちの笑顔を間近で見ても顔を赤らめ慌てる。惚れたな。なまじ地位があるせい、ぼちの笑顔の効果がどんどん上がってる気がしないでもない。「あんなの反則よ……」とは後の緑髪の眼鏡軍師、賈詡の談である。

日刊一位に自分の書いた物が凄く久しぶりに載りました。とても嬉しいです。お気に入りという評価の伸びが凄すぎてびっくりしています。本当にありがとうございます。

第十話・涼州の救世主（童貞）

「食糧の件、本当にありがとうございました。本当に何も受け取っては貰えないのですか？ 全額は厳しいのですが、せめて気持ちくらいは受け取って頂かないと……」

「いいよいいよ、勝手にやった事だし。うちの皆いいって言ってたし。むしろ勝手にやっちゃって申し訳ないというか」

董卓仲穎と会談に望んだぼちは食糧の件を一切恩に着せず、勝手にやってごめんと謝った。完全に想定外の行動しか取らないぼちに董卓は困惑しながらも感謝を示す。まあこんな將軍いるとは思わないだろうしね。

「いえそんな、私達からは感謝しかありません。何せ涼州は土地柄食糧事情が厳しいので……」

「そっか……、じゃあ今日はソバの実の粥でいいか」

「……あの、ソバの実、とは？」

曹犬はグルメである。袁家にて散々色々な料理を食してきた男である。また袁家はどちらかというと家庭的な料理を好むこの男に楽しんで貰うため、その強大な力を家庭的な料理のレシピ探しに使った事がある。その激レアレシピの一つ、ソバの粥。ソバは超臭い花を付ける植物である。誰が食べるかというくらい臭い。が、冷涼な気候、雨が少なかったり水利が悪かったりする乾燥した土地でも、容易に生育し二、三ヶ月で実がなる救荒食物として5世紀頃から栽培されている、現代ではロシアが消費量一位の食物である。ただ、花が凄く臭い。人の食べ物なんて思わないと思う。

「あのくっさい花付ける奴。実を粥にしたら意外と美味しいよ。この辺で自生してるの見たし。あれ育てたら？ その辺で育ってるならいけるでしょ」

「あの、詳しく聞かせてもらえませんか！」

袁家はこの男がいなければソバの粥なんて絶対作らなかったであろう。袁家の甘やかしによるレシピ発見で三世紀程前倒しで救荒食物の栽培が開始される事になるなんて誰が思うだろうか。そしてこれにより、涼州の食糧事情が徐々に改善されていくなんて誰が思うだろうか。魚をやるより魚の釣り方を教えてやれとは誰が言ったか、ぼちは魚を与えた上で魚の釣り方まで教えているのである。ただ袁家で食べた物を袁家で料理人から説明されたの覚えていて、あれ食べればいいかと思っただけだよ。「パンがない？　じゃあケーキで」くらいのノリで言ったただだよ。ソバの説明ちゃんと覚えていたぼち、ファインプレーである。

え、あんな糞みたいない匂いする花の実を食えとと困惑の涼州の民、大恩ある曹犬様が言うならと食した結果、ロシアや東欧の伝統料理カーシャ、中華伝統料理に切り替わる。カーシャが広まるにつれ、曹犬を救世主として崇め始める。もはや涼州民にとって神扱いである。そして涼州民が遊牧民から農耕民に切り替わっていくなんて誰が予想出来たであろうか。これ涼州から西に伝わったらこの世界モンゴル帝国生まれるのかな。万里の長城消滅不可避。

「あの、本当になんと言ったら良いのか感謝をいくら言葉で並べても足りず……」
感謝？ そんなに夕飯用意出来ないくらい困ってるのか。ソバの粥でいいやと言って良かったと一人納得するぽち。民を救う発言だったと本人が気付いてない。
「まあほら、こんなに美味しいお茶を入れてくれたお礼っていうか？　こんなに美味しいお茶、毎日入れてもらえたら幸せやろうなあ」

「へう……」

その言葉に赤面し顔を伏せる董卓。ぽちよ、それ求婚と思われるでも仕方ないぞ。いきなり現れて国に施しを与え国を救う知識を与える男、しかも見返りは何も要らぬという。話せば分かる人の良さに加え、容姿まで美形という。何やこいつほんとに童貞か。聖処女ならぬ聖童貞誕生。オルレ안의乙女は響きが美しいけど洛陽の童貞とか呼ばれたら引き込もっていいレベル。尚、もはや周りが手を出せないレベルになってきているのでしばらく童貞を守り続ける模様。後、何進が弄んでる自慢をしているので何進にヘイトが溜まってる模様。

「で、では私達も羌族の本隊との戦いに同行させて下さい。せめてそれぐらいはさ

せて頂かないと」

「いいの？」

「はい。私達の軍は最前線で常に戦い続けています。決して曹犬様のお邪魔にはなりません」

「っていう訳で董卓軍が加わる事になったけど、良かった？」

会談を終え、主だった将を集め会議を開いたぼち。事後報告ごめんねと董卓軍の参戦の経緯を告げる。戦力アップやったねと告げた筈なのに一同、無言となる。

「あ、あれ？　もしかして駄目だった？　ごめ——」

「ぼち様」

徐晃が口を開く。

「……シヤンは恥ずかしい。……シヤンは異民族と戦い勝てば涼州を救えると思っ
た。ぼち様は本当の意味で涼州を救いに来たのにシヤンはそれが分からなかった」

「ん？　香風、何の事——」

「徐晃」

今度は華雄が口を挟む。

華雄いたの？ 一騎打ちの後、何進に華雄の処分をどうするか聞かれたぼち。華雄はどのような沙汰でも甘んじて受けるつもりだったが、ぼちが「いや別に……、そうだ、仕事頑張ればいいんじゃないかな」と仕事を頑張るのが嫌いなぼち的には罰ゲームだったのだが、そんなの割りと当たり前なのでなんの罰にもならず華雄は恩を返す為に今回の行軍に直訴し参加した。一応勇将にして猛将と名高き華雄は、今のところ曹犬軍の活躍の場が無い為に無駄飯食らいにしかなくていいんだなあれが。

「我々武将の本分はその武で忠義を示すことだ。主の事を誇りに思うのであれば、貴様の武で主の期待に答えることこそ本意と知れ」

華雄の言葉に無言で頷く徐晃。なんか口を挟み辛い雰囲気になったので余計な事を言わず黙るぼち。

「あの、ぼち様」

「ん、何かな桃香」

暫しの沈黙の後、劉備が口を開いた。

「その人はどなたですか？」

「……恋は恋。……宜しく」

誰も突っ込まなかったのです。ずっと黙っていた、ぼちの後ろに控えていた呂布奉先がやっと喋った。実はずっとぼちの後ろにぴたりとくっついていたりする。

「また真名をいきなり言う。あ、この娘は呂奉先って言うんだ」

「……宜しく」

呂布奉先。武を志す者なら誰もが知る最強と名高きビクネームである。何故呂布がぼち様にくっついているのだと皆、疑問符を浮かべる。が事は単純である。

「なんか懷かれちゃった。皆宜しくね」

気が付いたら懷かれていた。ただそれだけである。呂布は董卓に一言言う。「……曹犬についていきたい」と。呂布の武、それを知る董卓は曹犬に恩を返せるならと承諾する。呂布の武を知らぬぼち、よく分かんが可愛い娘が来るなら拒む訳がない。

こうして良く分からない展開で自陣に呂布を迎えた（後、ちんちくりんの軍師も後からついてきた）曹犬軍は馬超軍と董卓軍と共に涼州に巢食う羌族の本体に対峙する。

数、士気、共に敵の圧倒的に上を行く最高の環境を用意して見せたぼちは馬超と董卓に言う。「じゃあ指揮は任せるから」と。

二人は驚く。後は号令を掛けるだけ。それだけで勝つこの状況で、この此度の遠征の最も誉れといえる局面で、この曹犬という漢王朝が誇る將軍は手柄を譲ると言ったのだ。二人は必死に固辞するも、「だってこっちが手柄立ててもさあ。地元の人に悪いし任せるよ」と言うぼち。この人は、この人にどうすればこの大恩を返せるというのだと二人は涙を流した。涙で目が曇った二人よ、そいつ面倒臭くなってるだけだからな。

ここまでされて本気を出さない訳がなく、馬超軍と董卓軍は敵を蹂躪した。大人しくて可愛いと思っていた董卓をチラっと見たら、董卓が恐ろしく怖い闘気を纏っているように見えたぼち。ぼちはその時の事を振り返る。「もうほんと怖くて。魔

王っていう言葉が似合うっていうか。後、酒池肉林とか好きそう」とKOEI董卓が乗り移ったように見えたようだ。こうして涼州遠征は圧倒的大勝で幕を閉じた。董卓が怖くなったばちは、そそくさと涼州を後にした。

第十一話・なんだかんだ姉が好き

「どうかしら？　疲れているようだったから少し味付けを濃い目にしてみたのだけれど」

「華琳姉の作る御飯は中華一だと思う」

「そう、それは良かったわ」

涼州から一度、長安に寄り馬超軍と別れそのまま幽州へ直行するはずだった曹犬軍は、とうにかぼちは何進の命令を無視して洛陽に戻っていた。洛陽へ着くやいなや、「皆頑張ったから一週間休みみな！」と言ってぼちは何進に報告に行く。「馬超軍と董卓軍まじすげえ。うちいらなかったと思うよ？　損害ほぼ無しで大勝」と簡単に報告した後、「褒美で一週間休み貰うから」と勝手に休暇に入った。何進は「手柄もあまり立てず何が褒美だ」とキレたがぼちは無視した。ずっといつもの笑顔で行動していたぼちだが、尻は痛いし董卓は怖いし、何よりそもそも戦場が嫌いな男は心労が溜まっていた。ストレス耐性が余り高くないので、もういいやと勝手

に休む事にした。ぶっちゃけ、勝手な事をするならクビって言ってくれないかなと思いつながら無理矢理休んだが、何進がキレたくらいで意外と休みが通ったので、実家で曹操にその中華一の万能をぼちの好みに料理を作る方向に全力を傾けて貰いめっちゃ美味しい料理を食べていた。才能の無駄遣いをさせる男である。

「ぼち、戦場はどう？」

「血生臭いの嫌い。皆が傷付くのが嫌い。そもそも戦なんてさせないようにすればいいのに」

「漢王朝一の名将と言われてもそういう所は変わらないわね」

「やめてよ、その言い方はさ」

「でもそうね、戦なんてさせないようにすれば、ね。今この大陸でそう言う資格があるのはぼち、貴方だけかもね」

「……戦無くならないかなあ」

「理想を語るなど切り捨てるのは簡単だけれど、貴方ならばと私は思うもの。私はぼちが戦を無くすと言うのであればそれを信じてあげるわ」

「いや無くすのは俺じゃなくていいんだけど」

「じゃあ無理ね、それを出来るのは貴方だけよ」

「いやなんでさ。華琳姉ちよっと大陸制覇してどうぞ」

「あら、漢の臣下として謀反の教唆は見逃せないわよ？」

「実家でまで堅苦しいのは嫌！」

「ふふ、それでおかわりはどうするの？」

「頂きます！」

軽口を叩きながらとても美味しそうに食べるぽちを、華琳は幸せそうに眺める。
この姉弟、なんだかんだとても仲が良い。

実家でだらだら袁家でだらだらしてぼちに会いに来た、正確に言えば媚びを売りに来た連中に会わずひたすらグータラするぽち。ぽちはもう仕事いなくていいんじゃないかなとたった三日で完全に駄目人間思考に切り替わっていた。流されて働いていたが、やっぱりこうして引き込もっているのが一番自分らしいなと改めて思

い直していた。

「ぼち、また人が会いに来たわよ」

「帰ってもらってー」

「いいの？　水鏡女学院から来た彼女は貴方の文通相手のようだと記憶しているけれど」

「……え、諸葛孔明？　わざわざ来てくれたの？」

「ええ、そう名乗ったわ。連れもいたけれど」

「会う」

何故わざわざ来たのだろうとは思ったが、もう文のみとはいえ三年の付き合いになる相手である。色々相談も重ねた相手を気にならない筈もなく、ぼちは直ぐ様会う事にして応接間に孔明を通してもらった。

「は、初めまして。姓を諸葛、名を亮、字を孔明と申します。初めましてというの

も不思議な気もしましゅが……はわわ、囁んじゃった」

「……わ、私は姓をホウ、名を統、字を士元と申しましゅ。……あわわ、朱里ちゃん……」

「雛里ちゃん、どうしよう……」

会いに行くと、凄まじく緊張した様子の囁みまくっているロリっ娘が二人。え？
こんなロリっ娘に色々な事相談していたの？ まじかよと面喰らうぼちに脅えた様子の二人。ああ、いかんいかんと気を持ち直し笑顔で二人に返答する。

「初めましてだね。丁寧な挨拶ありがとう。俺が曹芝犬、君の文に助けられていた男だよ」

笑顔で返したのに、その言葉にビクッと震えた孔明。はてどうしたのかと不思議にぼちぼち思う。

「どうかしたの？」

「あ、あの、今まで大変失礼な文を送り続けて申し訳有りませんでした！」

「え、何の事？」

「曹犬様が漢王朝の將軍となり、その活躍は大陸中に響き渡っています。そんな曹犬様に今まで偉そうに文を送っていたかと思うとても恥ずかしい思いです……」
「いやいやいや、色々相談乗ってもらってずっと助かってたんだよ？　最近で言えばさ、文にも書いたけど髪是件とか！」

髪是件、その言葉に真っ青になる孔明。ぼちの手紙には『最近働きだしてお金持ちになってきたから使うにも悩まずにすむよ』と書いてあった。それに対して孔明は『調子に乗って使い過ぎて衣服や、最悪髪など売らなくていいように気を付けて下さいね』と返した。その文を見て、なるほど、最悪衣服や髪を売ればいいのかと納得したぼち。孔明はまったく悪くない。

「その、お髪是件は……」

「いやー助かったよ、褒美出すお金足りなくなっちゃってさ」

「はわわ……やはりそうでしたか……」

ぼちの言葉に身を小さくし項垂れる孔明と、その様子になんで？ と首を傾げるぼち。

ぼちの文の内容は常に何処かをぼかしたような内容であった。孔明はそのあやふやな内容から推測し返答する楽しみを持っていたし、ぼちはただその言葉が足りないだけである。ぼちが將軍となるずっと前から文通をしていたのに、ぼちは就職したとしか書いた事もないし、曹犬の名が有名になってきても孔明は同名の人くらいの認識だったのは仕方がないかと思える。

徐々に孔明が何かおかしいと思い、文通相手が漢王朝の名将と呼ばれるその人と気付いた時は自分がまるで上から助言してたかのような文を送り続けていた事に恥ずかしくなったものだ。その助言全部正しかったよ。そして髪是件、見目麗しき男性と噂が聞こえたその將軍に、振り返れば暗に髪を売れと言った内容になってしまっていた事に気付いた孔明はなんて失礼な事をしてしまったのだと思う。そして

あの噂が聞こえてくる。示唆してしまったのは自分だと目の前が真っ暗になった。勝手にやったのはぼちなので孔明は何も悪くないよ。すぐに謝罪をと、しかし幼い彼女は一人では勇気が出ず親友の士元に相談して勇気を振り絞り、少し時間は掛かったが二人でここまでやってきたのだ。

「あの、本当に申し訳有りませんでした。私に出来る事ならなんでもします」

「ん？ 今なんでもって言った？」

「は、ひゃい」

「あわわ……」

ぼちの返答に、あれ、とんでもない事言ってしまったんじゃないかとちょっと後悔する孔明と行く末が不安になってきた士元。しかしぼちの考えは孔明の斜め上だった。

「じゃあ、俺の軍師にならない？ 漢じゃなくて俺の。良ければ士元、君も」

「!!」

漢王朝の名将、曹犬がいれば漢王朝は滅びぬと言われた男が言った、漢ではなくて個人に仕えて欲しいとの言葉。漢王朝をその行動で善き方向へ確実に変えている筈の聖人が言った言葉。二人は瞬時に悟る。それほどまでに漢王朝内部の腐敗は進んでいるのかと。そして、目の前の人物は漢王朝に見切りを付けたのだと。二人は幼いながらも伏龍、鳳雛と言われている才女である。その言葉の重みが分からぬ筈がない。ごめん、ぼちは二人が才女って事知らないんだ。文のやりとりで頭良い事だけは知っているから代わりに色々仕事してもらおうとしてるだけなんだ。頭良い娘に付いてきてるからこっちも頭良いだろうと両方誘っただけなんだ。

「私と雛里ちゃんの力が必要ですか？」

「当然（俺がサボる為には）必要だとも」

人となりは散々噂で聞いているし三年も文を交換していればその人の良さも知っ

ている。ここまで請われれば断る筈もなく。

「あゝ、でも一応一緒に仕事する為には二人共公的には俺の従者扱いになっちゃうんだけどさ、お願い出来ないかな」

「はい、私で良ければ御力添えさせて下しやい……はわわ」

「わ、私も頑張りました……あわわ」

可愛い。癒される。殺伐とした職場でもこれなら癒されるわと安心したぽち。流石にぼちは幼女を戦場に連れていこうとかいう発想は無かったが二人がどうしても志願した為、二人の幼女を従えた上で曹犬軍は再び洛陽を後にした。勝ったな

（確信）

曹犬軍が離れた洛陽で事件が起こる。

とある酒宴で何進が言う。

「何、ぼちは私の前では発情した雄犬の様なものだ」

その言葉に激昂したのは曹操と袁紹である。恐らく帯刀していればその場で切っていただろう勢いでキレた。「今の言葉を取り消せ」と怒鳴る。「誰にものを言っている」と何進も怒鳴る。「あら、年を取ると誰に話を掛けられているかも分からないのですか？」と袁紹が煽る。「麗羽、もしかしたら大將軍は耳が遠いのかも知れないわ。年増だし」と曹操が更に煽る。激怒した何進とキレている袁紹と曹操を周りがなんとかその場を収めたが、正直その場は地獄だった。

そして後日、ぼちの漢王朝の影響力の大きさも危惧であった何進はその影響力を削ぐという意味合いも兼ね、二人を中央から遠ざける決定を下した。流石に袁家という巨大な力や、余りに理不尽な人事ではぼちがぶちギれるであろうと考えた何進は袁紹を州牧に、曹操を県令とし洛陽から追い出した。まあぼちが文句を言ったら、官位でも正式に与え俸禄を増やし多少なり甘い蜜を吸わせてやれば納得するだろうという己の価値観での判断だった。

何進はぼちの我欲の無さを完全に見誤っていた。

第十二話・幽州到着

幽州を目指す曹犬軍。その主だった將軍達の心はざわついていた。

「この娘達、俺が個人的に雇った軍師だから。いや、三年前に（文通を）はじめて会った時この娘達しかいないと思ってさ」

ぼちの言葉から文通の一言が足りないだけで、まるで三年前初めて会った時から二人を見出だしてやっと迎えたかのような言い方になった。三顧の礼ならぬ三年顧の礼とか凄いですよね。しかも曹犬その人が、である。そこまで請われた二人の少女に、皆嫉妬と羨望の目を向けた。仕事を出来るだけ押し付けるぞやっただと笑顔のぼちを見て、この二人を迎えた事はぼち様がそこまで喜ぶ程の事なのかと驚く。そして、盧植が気付く。

「その二人はまさか……伏竜と鳳雛と言われていたあの……」
周りの者が盧植に尋ねる。

「伏竜鳳雛とは？」

盧植が返す。

「伏竜と鳳雛を手に入れれば天下を握れる、とまで言われている二人よ」

『!!??』

天下を握れる。天下を？ ぽち様はまさか……。皆、一様に口を噤む。漢王朝の臣下としてその先は口に出して良いものではない。でもぽちがまさか仕事サボりたいだけとは皆思うまい。

「……じゃあ恋も」

「あ、私も私も」

「……ぽち様、シャンは駄目？」

話を聞いた呂布、劉備、徐晃が私も個人的に雇ってくれと声を上げる。劉備までいつの間にぽち大好き勢に加わったの？ さすがに大人な盧植は漢王朝の臣下として直ぐ様声を挙げるような真似はしなかったが、内心は己を助けてくれたぽちに追従する事にこの時決めた。

ぽちは思う。そんな金無いよと。

「ま、その辺は帰ってからね？」

と適當濁して、問題を後回しにする男。仕事出来ない奴の典型みたいな男である。

「久しぶりだな、ぼち君！」

幽州に着き、袁紹を通じて知り合いとなっていた州牧を務める公孫サン伯珪に迎えられた。

「や、久しぶり白れ——」

「あーパイパイちゃん久しぶりー！」

「ちょ、桃香」

挨拶中に劉備が公孫サンに抱き付いた。ぼちと思う。あれ？ 真名、白蓮じゃなかったつけ。白白だつけ。やべえ。真名間違うとかやべえ。なんか知らんがこの二人仲良さそうだし桃香のおかげで助かったぜとぼちと思う。

「あはは、仲良さそうだな白パ——」

「久しぶりね白蓮ちゃん」

「風鈴先生！」

盧植の事を先生と呼ぶのであれば公孫サンは劉備と同門なのだろうとぼちは推測した。そしてこれで問題が発生した。白蓮と白白、どっちが正しいのか分からなくなった。いっそ間を取ってパイ○ンちゃんと読んで見るべきか。いやそれでは下の毛が生えてない人みたいだ。困ったのもう真名で呼ぶのは諦めた。

「……再会出来て嬉しいよ、伯珪」

「あ、あれ？　なんで真名で呼んでくれないんだぼち君？」

「あはは、どうかしたかい伯佳」

「え、もしかして私何かしたか？　ごめん分らないけど謝るよ！」

だって二分の一で当てる自信無いんだもと笑って誤魔化すぼちと真名を呼んでもらえなくて焦る公孫サン。公孫サンは今回ぼちを迎えるに当たり、私は曹犬とは真名を交換している仲なんだと周りにちょっと自慢していた。なのに呼んでもらえなくて公孫サン側の周囲から白い目で見られ涙目になっていた。全部真名を間違っ

た劉備が悪い。何でアニメの時、わざわざ真名間違える設定にしたんだろう。あれのおかげで大徳のイメージ無いんだよなあ。

「冗談だよ白白蓮」

「なんだ冗談か……っていま一文字多くなかったか!？」

「気のせい気のせい、いいね？」

「そ、そうかな？」

最終的にくっ付けて力業で誤魔化したぼち。勢いに任せて誤魔化される公孫サ
ン。そんな感じだから残念さんとか公式に煽られるんだと思うよ。

「で、後ろに控えてるのが白白蓮のとこの？」

「ああ、うちの——」

「白蓮殿の所で客将、をしております趙雲子龍と申します。どうぞお見知り置き
を、聖人殿？」

「同じく、〽客將〽をしております関羽雲長と申します。お会いできて光栄です」
「鈴々は、じゃなかった、えーと、張飛翼徳！　愛紗と同じで〽きやくしょう〽、なのだ！　宜しくなのだ！」

「なんで皆客將をそんなに強調してるんだ!？」

「いやいや白蓮殿、ただ私は事実を申しただけの事」

「そうです。強調などしておりません」

「してないのだ」

「いや絶対してるだろ!？」

なんで將じゃなくて客將ずらっと並べてるんだよとか突っ込む所はたくさんあるのだが、ぼちはとりあえず公孫サンの肩にポンっと手を乗せて慈愛を込めて言った。

「なんか州牧になっても相変わらずで安心した」

「どういう意味だよそりゃ……」

意味はそのまんまです。

とにかくやたらぼちに対して売り込みを掛けるといふか、大陸を駆け巡った噂から興味津津々な公孫サン客将組と、辿り着く前の経緯からか客將組を牽制しながら、私達のほうがいいですよねとアピールする曹犬軍の將軍面々。ぼち、美女から人気は嬉しいが流石に面倒臭くなり現実逃避する。具体的に言えば対烏丸対策を考えるから時間をくれといって勝手に勝手に城の一角を貸し切り、引き籠った。勿論対策なんて思いつかないからちゃんと伏竜鳳雛も連れて。

「ぼち様の烏丸対策、聞かせてもらえませんか！」

目をキラキラさせながら聞く孔明。何も考えてないなんて言えない。ぽちは質問に質問で返す。

「ん、でもその前に何か策はあるかい？」

「はい！ 雛里ちゃんと二つの策を考えました！ まず……」

それは上策、中策、下策、それぞれローリスクローリターンからハイリスクハイ

リターンなものまで幅広い策を二人は献策した。ぼちに仕えて初めての献策。二人の練りに練った策である。それをぼちは、ぼーっとしていたのであまり聞いていなかった。

「ふむ……」

とりあえず思案する振りをした。振りだけである。だが、そのぼちの様子を見て伏竜鳳雛の精神は大きく揺さぶられた。何せ今まで聞いていた話だとぼちは即断即決で軍師の策に任せて全て委ねていたと聞いていたからだ。それが二人に対してはそれをしなかった。信用されていないのでは。それとも気に入らなかったのか。はたまたその程度かと思われたのではとぼちの悩む様子にはわあわあと気が気ではない二人。ほんとに聞いてなかったただだからね。あと「じゃあそれで」っていつも言っていたのは大体皆一つだけ献策してきたから聞いてなくても決められただけなんだからね。

「なあ、朱里」

「は、はい」

「旨い酒、用意してくれない？」

「はい！ ……はい？」

「旨い酒、宜しく」

「わ、分かりました」

長考の末、現実逃避しかねえなと思ったぼちは酒を所望した。慌てて酒を取りに部屋から出る二人を見ながら、やっと一人になれたと思うぼち。戻ってきた二人に「二つ目の策で行こう」と思いついた無難な返答を告げ、幼女二人にお酌をしてもらった。

「……これ旨いな」

「趙雲さんから酒ならこれをと渡されました。あとこれもと。秘蔵のメンマらしいです」

何故メンマなのかと思いつながら渡された箸をメンマに伸ばした。その時からぼちはメンマ党になりました。趙雲超良い奴じゃねえかとぼちも名前をばっちり覚えめました。白白蓮さんよりはっきりと覚ええました。旨いなと酒を呑むぼちを見ながら、伏竜鳳雛は考える。私達の策には恐らく至らない点があったのだろうと。しかしぼ

ち様はそれを飲み込み託してくれたのだらうと。だがもしかしたら烏丸と対峙した際にそれが分かるかも知れない。此度の私達の初陣でしっかりと見極めなければと二人は密かに気合いを入れた。

しっかりと見極めるといい。今、二人の前にいるのはただ酒に逃げてる駄目人間だからな。

今週入って頭痛が引っ込んでくれなくてロキソニン漬で死んでて更新遅くなりました。まだ治ってないので次も遅くなったらすいません。

感想の返信は後で纏めて返します。頭痛はいつも目にくるから嫌いです。偏頭痛この世から消えないかな。

第十三話・戦場の盃

対烏丸の方針を孔明が公孫サンに伝えそれを公孫サンが了承した為、今まで遭った襲撃の情報を中心に伏竜鳳雛が予測を立て次に襲撃されるであろう地点に陣を構えた曹犬軍と公孫サン軍。

戦場に向かうぼちは険しい表情を崩さない、それは曹犬軍の誰しもが見たことのない顔だった。いつも笑顔で飄々としているぼちが初めて見せる顔。厳しい戦になるかも知れないと皆一様に思う。そしてその思いは曹犬軍の兵にも伝染する。兵士一同の心は一つ。いざとなれば我が身を盾にして曹犬様を守り抜くと。

皆、ぼちは二日酔いなだけだからな。

伏竜鳳雛の予想通りに、烏丸が現れた。今まで神出鬼没だと思っていた公孫サンは半信半疑で、しかしぼちの言う事ならばと陣を構えていたのでこの結果は驚きを少なからず隠せなかった。けれど予想外の事があった。当初の予定では二軍を持つ

て烏丸の倍の数で当たる想定であつたが、烏丸の数が予想を上回り同数、または少し相手のほうが上といえる兵数だったのだ。

将や兵の質、氣力共に曹犬軍のほうが圧倒的に上ではあるが、将の質はともかく兵の質、氣力という面では公孫サン軍に若干の不安がある。また曹犬軍は騎馬隊が多くない。対して烏丸はほぼ騎馬で揃えている。そして一番不安なのは横の連携が取れるかである。即席連合と言つて良い布陣であるこちらは細かい連携を取る事は難しいだろう。勝つには勝つだろう。だが多くの犠牲を強いるかも知れない。ただ勝てばいいのか。ぼち様の性格であれば犠牲が多く出る事をきつと悲しまれるだろう。恐らくぼち様は予見出来ていたのだ。これから出る犠牲を悲しみ、しかし総大将として一言も弱音は吐かず凛々しい姿で鼓舞してくれているのだらうと曹犬軍は考える。この方の為に少しでも犠牲を少なくせねばと得物を握る手にいつもより力が入った。

吐かずに我慢しているのはゲロなんだけどね。

「……ぼち様」

「ちょっと行ってくる」

「ぼち様!？」

涼州の時は任せていたけど、戦の前はたしか舌戦だよねとぼちは一人、ゆっくりと馬を前に出した。烏丸という蛮族相手に舌戦なんて聞いた事ないぞと驚く公孫サ
ン陣営はぼちの姿を見て更に驚く。帯刀していないのだ。ぼちは己の陣から誰も連
れずに一人対陣している中央まで行くであろうことか馬を降りてその場に座り込ん
だ。まさしく豪胆としか言えない行動である。曹犬軍の面々は、見れば全員何かあ
ればいつでも弾丸の様に飛び出せるよう構えていた。

ぼちは疲れてるだけなんだけどね。

烏丸の陣から一人、馬を走らせぼちの前までやってきた。丘力居、单于（君主）で
あり女性である。

「貴様らが蛮族と罵る我等の前に単身で姿を晒した馬鹿の顔を見に来てやったわ」
啖呵を切った丘力居の言葉を何処吹く風と気にせず腰に手をやるぼち。腰には大

きな瓢箪が下げられていた。こいつこんな場所で迎え酒する気である。瓢箪を腰から外し、杯を取り出し酒を継ぎ一気に飲み干した。ぼち。呆氣に取られる丘力居。そしてその杯を差し出してぼちは言う。

「呑む？」

丘力居は笑った。先に飲み毒が入ってない事を示した上で、更に同じ杯で酒を呑もうと言っている男が目の中にいるのだ。蛮族と称し我らと戦い続けている漢民族の男が、しかも戦場のど真ん中である。そして良く見れば何千という烏丸の集落の長である丘力居も見えた事が無い良き見た目の男であった。これは応じねば怖じ氣付いたと見られるであろうなと馬から降りぼちから杯を受け取った。ぼちが注いだ酒を一気に飲み干し丘力居は問う。

「私は丘力居だ。貴様名はなんという」

「曹芝犬」

この男が曹芝犬かと丘力居は驚く。稀代の名将、聖人、その人となりの噂は風となり烏丸まで聞こえてきていた。

「ねえ、戦やめない？」

「降伏するならば応じてやるぞ」

「降伏はしないけど、なんで戦しなくちゃいけない？」

「知れた事、我らの土地では育たぬ食糧を奪いに来たまでの事」

「食糧？　育たぬって寒いから？　水不足？」

「なんだと言うのだ貴様は」

「それなんとかなるんじゃないかな。涼州と一緒に」

舌戦であればお互いの陣営に届く声で言葉の応酬があったはずなのだが始めの丘力居の言葉のみがお互いの陣営に届き、その後は二人して座り一つの杯で酒を交わしあっている様子しか見えない。その様子自体が両陣営からしたら信じられない事である。しばらく様子を見守っていると丘力居が笑いながらぼちの背を叩き肩を組んだ。この様子に曹犬軍が違う意味で殺氣立った。だいたい一つの杯とか何様だと。ぼち様にお酌してもらうとかふざけてんじゃねえよと漆黒のオーラが立ち上ったように公孫サン軍からは見えた。

それからしばらく二人で話し合っていて、ようやく終わりぼちが戻って来て一

言。

「戦は無いよ。話せば分かるっつゝ事だね。じゃあしばらく烏丸の所行くんでどっか近くで待ってて」

流石に言葉が足りな過ぎてどういふ事かと皆が問い詰める。ぼちは言う。「食糧問題解決するまで向こういるから。収穫終わる二、三ヶ月後には帰るよ」と。つまりだ。戦を回避し向こうの食糧問題の目処が立つまで、自らを人質として烏丸に差し出すと言うのだ。誰しもが反対をする。「御身自ら行かなくとも」「せめて護衛を」と口々に言うがぼちは聞く耳を持たなかった。「ならうちに収穫終わるまでいるなら最大限の歓待をしよう」とか言われたからではないと思う。決して「上手い酒を用意しよう」とか言われてほしいほい蛮族と呼ばれる民の元について行くような馬鹿はいないだろうし。……いないよね？　しばらくニートだ万歳とか思ってる馬鹿いないよね？

三ヶ月後、戦場で交わした杯の誓い通りにぼちは烏丸の地に実りを与え幽州に

帰って来た。烏丸は漢王朝に降伏、いや曹犬に降伏を申し出た。单于となり烏丸を治めて欲しいと願ったが曹犬が断った為、曹犬に服従を誓った。不毛の地に実りを与えた衝撃が大きすぎた模様。烏丸でも相変わらず子供達と遊んだりして食べて飲んで寝ていただけなんだけどなんだろうね。ソバって凄い。どうしても何かさせてもらえないかと言われたばちは、「じゃあ軍馬売って」と独自の交易ルートを開拓。烏丸、曹犬を通してのみ軍馬を売る事を了承。精強な軍馬を容易に仕入れる事が出来るようになりました。後、曹犬に烏丸史上最高の汗血馬の白馬、緑牧場王が贈られた。なのねーって鳴きそう。

戦をせず烏丸を降伏させた曹犬。伏竜鳳雛は己を恥じる。振り返れば初陣でいかに相手を圧倒的に下すかという考えに固執していたのではないかと考える。勝つ事に固執した時点で視野が狭くなった。戦になれば勿論勝ったであろう。それにいかに視野を広げようとも、己の主を人質に差し出す真似など出来る訳が無い。恐らくだから何も言わなかったのであろうと考える。己が仕えた曹犬という人物がいかに高潔で器の底知れぬ人物かという事を思い知らされた二人は、伏竜鳳雛と言われ自らの才に思い上がっていたと恥じ、曹犬に相応しい軍師となれるように心に再度誓う

のであった。

ぼちは食べ物に釣られてあっちで遊んでただけだな。

こうして烏丸を降した曹犬軍は何故か付いてきた元公孫サン軍の客将三人を新たに加え、洛陽へ帰るのであった。

孔明チートからバグ化フラグ。

第十四話・洛陽激震

王都洛陽。遠征から帰ってきたぼちは、門を抜けた時点で違和感を覚えた。いつも迎えてくれる華琳姉や麗羽さんの姿が無かったからだ。仕事かなとぼちは思ったが、なんとなくではあるが街の雰囲気も暗い気がした。洛陽の人々はぼちの顔を見ると皆「帰ってきて下さった」と喜びの声を上げる。曹犬軍面々一様に洛陽で、というより王城で何かあったなと悟る。皆がぼちを見るとぼちは飄々といつも通りの表情を浮かべていたので騒いでは駄目だなととりあえず平静を保つ事が出来た。こういう時、トップがどっしりと構えていると安心するよね。ぼちは久しぶりに華琳姉の飯食べられるって事で頭が一杯なんだよ。……なんだよねえ。

「ぽっちっ！ 大変っすっ！」

夕飯何かなと呑気に考えながら移動中、城に着く前に曹仁がぼちを捕まえた。慌てた様子の曹仁に何事かと尋ねる。

「どしたの華崙。何進に報告したら家に帰るよ？」

「それどころじゃないっす！ 実は華琳姉が——」

「……は？」

「じゃああたしは伝えたっす！ あたしも明日洛陽から出るっす」

「……分かった。ありがとう華崙」

曹仁の話を周りで聞いていた曹大軍の一同は心配そうにぼちを見る。一同がぎよつとした。そこにはいつもとまったく違う感情を削ぎ落とした無感情な表情を浮かべるぼちがいた。

何も言わず、馬をそのまま城に進め始めたぼちに誰も声を掛ける事が出来なかった。

「——この度の活躍で、正式に驍騎將軍として——勿論褒祿も——

——おい、聞いているのかぼち」

何進の元へ一人報告しに来たぼち。部屋へ入るなり何進がいつもより大袈裟にぼちを誉める。そしてその褒美にと驍騎將軍、ようは文官でいう三公の地位に正式に任ずると話すもぼちは完全に上の空といった様子だった。驚かせようと地位を用意

した何進は肩透かしを喰らったようでまったく面白くない。

「おいぼち貴様——」

「お疲れ様でしたー」

急に何か決めたように顔付きを変えたぼちが、一言だけ言って部屋から出ていってしまった。呆氣に取られる何進に側に居た何太后が声を掛ける。

「ぼち君遠征で疲れてるのよ」

「ふん、ならそう言えればいいだけだろう」

「あらあら、困った姉様。そろそろ私がぼち君頂いちゃおっかなあ。疲れてるなら癒してあげないと♪」

「くくく、なら二人で今度相手をしてやるか」

「あらあら♪」

何太后が軽口で何進の毒気を抜きながら、ぼちに対しての姉の方針ではきつと上手い事にはならないだろうと考える。何太后はどうしたらぼちを上手く懐柔出来るか考えていた。時既にお寿司である。

ぼちが何進の部屋から出ると、護衛にと呂布と徐晃が控えていた。ぼちが何進の部屋からある程度遠ざかり周りに人がいない場所で徐晃に頼む。

「香風。至急、集められるだけでいいからいつもの所に皆集めてくれないかな」

「……分かった」

言葉を受けすぐに徐晃は駆けた。至急、とぼちが言った。それはぼちに仕えて今まで一度も聞いた事のない言葉だった。勿論ぼちの様子に動揺していた曹犬軍の将達は城に着き解散したばかりであつたが直ぐ様一人残らず集合した。皆を見渡し、ぼちが喋りだす。

「曹犬軍は今日で解散します。皆、今まで本当にありがとう」

「ぼち様！ それはどうい——」

破碎音。誰かがぼちに意見を言おうとしたその時、呂布が戟を床に突き立てた。

「恋、大丈夫だから」

「……ん」

「俺、姉の居る頓丘に行くからさ。まあ皆優秀だから俺なんていなくても変わらないと思うけど」

ハハハと笑うぼちに皆口々に言う。そんな事は絶対はない。我々には、洛陽には、漢にはぼち様が必要だと。まあぶっちゃけ今まで仕事ほとんど周りに振ってたから仕事回るのは回るんだけどね。周りが悲鳴にも似た声で引き留める中、孔明が聞く。

「いつ発たれるおつもりですか？」

「明日」

「分かりました」

「……朱里？」

「私は、そして雛里ちゃんもぼち様の『個人的な』軍師ですからね？」

「……残ってたほうが待遇良いよ？」

「私も朱里ちゃんも、ぼち様が雇い主ですから」

明日。随分急な話である。皆困惑する中、真っ先に伏竜鳳雛がぼちに追従すると言った。これをわざわざ口にした事でぼちに追従組の中でイニシアチブが確保され

たのである。さすが孔明である。そこからは皆、私も私もと追従すると誓いを口にする。孔明の一言から会話の流れが完全に変わった。これ孔明の罠とも言ふ。

「いや、皆正直残ったほうがいいと思うけど。うちの姉に雇ってもらう事になるけどそれでもいいの？　立場今までより下だよ？」

全員が頷く。この場にいる人間が今さら立場や報酬など気にする訳がない。ぽちが曹操に付くというならそのぽちに付いていく事に疑問を持つ筈がないのだ。

翌日、ぽちに伝える為に洛陽に残ってくれていた華崙と、曹犬軍の将達、ついでに噂を聞いた洛陽の人間の十分の一度、五万人くらいがぽちに付いてきた。民族大移動です。流石に不味いと思った孔明が曹操に五万人の住居と食糧が必要ですよ早馬を出す。民の数は国力であると言ってもいきなりこんな人数増えても受け入れられる筈がない。普通は。

だがここで予想外の展開が起こる。なんと涼州や幽州、洛陽に残っているぽちを慕う官僚などから食糧や金銭の寄付が集まる事となったのだ。そしてぽちもじゃあ皆で畑を作ろうと言い出し、姉より先に屯田兵を生み出す始末である。住居に関し

ても元曹犬軍が中心となり木材の伐採から始め皆協力して作り、城塞都市の周りにもう一段階城塞都市を新たに作り上げ巨大都市がしれつと誕生する事になるのはもうちよい後の話である。最終的に洛陽の人間の四分の一がぼちを慕って移住してくるからそりゃあ都市も出来るってもんよ。

ぼちや曹犬軍、更に大量の民がまるっと居なくなった洛陽は混乱の極みである。軍の増強をと何進は董卓を洛陽に呼びつける。が、ぼちが居ない事を知った董卓なんとこれを仮病で拒否。次に馬一族を呼びつけるも当然同じく拒否。更に公孫サンも人材不足を理由に拒否。最終的にKOEIで言う所知力、武力共に50くらいの微妙な人材を後釜に据える事になり王都は更に混乱する事になるのであった。

聖杯戦争に呼ばれそうとの声を幾つか頂きました。呼ばれるとしたら調停しない事で有名なルーラーですね分かります。うちのカルデアにはルーラーはジャンヌしかいません。でも邪ンヌと邪ンタちゃんと三人揃っているのではっこり出来ます。

幕間・賢姉愚弟

姉、曹操孟徳は神童であつた。弟、曹芝犬は凡人であつた。

姉の優秀さから次に生まれた弟も大層な期待をされた。が上役のほとんどを女性が勤めるこの世界で、弟の才は一般的な男性のそれ程度しかなかった。姉に似て、というより曹一門の血を受け継いだ弟は容姿だけは端麗であつた。将来、政略結婚の為にどこかに婿に出す男。幼少の頃、ぼちは一族からそう思われて育つた。

「犬、私が貴方の真名を呼ぶことなど絶対に無いわ！」

「近寄らないで。私は貴方と仲良くする気など無いわ」

姉七つ。弟五つの頃、姉が弟に言った言葉である。姉は既にその大器をあらゆる方面に發揮していた。勉強を学べば教師を論破し武術を学べば大人を倒す。対して弟は凡庸にして凡庸。年相応のただの子供であつた。姉は嫌悪した。将来、家から只の駒として扱われる血の繋がった弟が、その事実を受け入れ抗う努力をしない事に対してだ。姉は弟を突き放した。弟に自身の才を見せつけ、少しでも近づいてくれるよう高みを目指す事を決めた。

弟はただただ寂しそうであった。

事件が起きた。弟を連れて他家へ向かっている際、賊に襲われた。勿論二人の姉弟を守る為の護衛や世話役の大人もいたが、抵抗したが殺された。路地裏に追い込まれる。相手が一人であるならば幼き姉とて自信があった。だが、相手は五名。そして親しき人間の流血した死体を初めて見た。幼き姉はどうすれば生き残れるか必死に考える。剣を取り震えながら構えた姉の前に手を広げた弟が立った。

「どうかお姉ちゃんを助けて下さい」

「犬！ 何を言っているの！ 引っ込んでなさい！」

「どうかお姉ちゃんを助けて下さい。どうかお姉ちゃんを」

袈裟斬り。幼き少年は斬られる。胸から腹に掛け切り裂かれた傷から大量の血が流れる。だが少年は倒れない。泣きながら少年は言う。

「どうか、どうかお姉ちゃんだけはっ」

異常であった。少年は血と涙を流しながら、それでも姉の前に立ち懇願した。姉

だけは助けてくれと。賊はその異常な少年に気圧された。姉は混乱した。弟は何を言っているんだと。優しくした覚えなどない。冷たくあしらひ続けた弟が、何の才能も感じなかった弟が、それを受け入れている事に嫌悪すら示した弟が、弱き弟が何故必死に自分を助けようとしているのだと。

遠くから声が聞こえた。幼き弟に気圧されていた賊達が、どうやら騒ぎを聞き助けに駆け付けたその声を聞き逃げ出した。幼き弟が倒れる。慌てて弟を抱き締める。

「ぼち！」

思わず叫んだ。

「ぼち！」

泣きながらぼちの名を叫んだ。

「……お姉ちゃんが、真名、呼んでくれた」

傷だらけの弟が姉に笑った。

「馬鹿！ ごめん、ごめんなさい！」

姉は弟を抱き締めながら、泣きながら謝った。

「……お姉ちゃん、暖かい」

弟はそれだけ言っただけで気を失った。

「ぼち！　ぼち！　駄目よ！　私まだ貴方に真名を呼んでもらってないんだから！」

弟は三日生死の境をさま迷った。姉は弟に付きっ切りだった。姉は家族に「ぼちが守ってくれた」と話した。家族は、そして一族はもしかしたらぼちは姉を立てる為に昼行灯を演じていたのではないかと話した。姉はそれを否定しなかった。この姉が否定しなかった事で弟に対する一族の見方が変わっていく切っ掛けとなった。弟がやっと目を覚ました。

「ぼち、おはよう」

「あれ、お姉ちゃん……」

「華琳よ。真名で呼ばないと許さないんだから」

「うん！」

ぼちの笑顔を見て、華琳は泣きながら笑った。

「華琳姉、泣いてる？」

「嬉しいの」

ぽちが華琳が手を握ってくれている事に気が付いた。

「えへへ。華琳姉暖かい」

「ぽち、今までごめ——」

「華琳姉」

ぽちが華琳の言葉を遮った。

「仲良くしてくれる？」

「勿論よ」

華琳にとって口にした~~ゞ~~絶対~~ゞ~~を覆した初めての、いや最初で最後の相手が凡庸だと評したぽちだった。この出来事以降、華琳は無条件でぽちに対して信頼を口にした。華琳が結果を出せば出すほど、優秀だと評される程、ぽちは一族の中で単なる駒扱いされる事は無くなった。ぽちは、才は確かに凡庸であったが人を惹き付ける魅力がある事を弟と接するうちに華琳は理解した。誰とでも分け隔てなく接する事が出来るぽちは、自分が持っていない別の才と特別な運を持つのだと華琳だけが理解した。

この世界中で、華琳だけがぼちを正確に理解しながら応援し続けている。

ただ、夜な夜な寝ているぼちの所に行き胸の傷をぺろぺろする妙な性癖に目覚めたのは内緒である。

第十五話・曹一門合流

「まったく、將軍ともあろうものが地方の県令を頼ってくるだなんて」

ぺたぺたぺたぺたぺたぺた。

多少の嫌みを言った姉がぼちの身体をぺたぺたと全身を隈無く触る。そこまで近づく必要無いくらい至近距離でぺたぺた触る。セクハラである。

「貴方の事だから心配ないとは思うのだけれど、怪我はないみたいね。疲れてるでしょう？　長旅でついた埃、湯を沸かしてあるから落としてらっしゃいな」

「華琳姉、なんか近い」

「あらあらまあまあ〜♪」

歓喜の声が聞こえたので横目で見ると、生粋のロリコンという某有名漫画家と同じ立派な趣味を持つ曹洪が徐晃、孔明、ホウ統、陳宮、張飛を捕獲していたので見て見ぬ振りをする事にした。徐晃と張飛が逃げ出せないってすげえな栄華。

「ま、とりあえず貴方が湯浴みしている間に自己紹介は済ませておくとして、諸葛孔明だけ借りていいかしら。先に早馬をくれたお蔭で大分助かったのだけれど、これから先の打ち合わせをしたいの」

「……栄華が捕獲しているから栄華に聞いて」

「……そう、まったく、あの娘ったら」

「とりあえず皆華琳姉のところに再就職って事で話済んでるから華琳姉の好きにどうぞ。皆優秀だよ。あ、孔明とホウ統だけは俺個人で雇うけど」

「あら、伏竜鳳雛は手元に置くのね」

口元に手をやりクスクス笑う曹操。その様子に若干困惑するぼち。二人盗られたら俺の仕事誰がするのさと心の中で思っている。てめえでやれと言いたい。

「ならいっそ連れてきた全員貴方が面倒見なさいな」

「いやいやいやいや」

「貴方を慕ってついてきたのでしょうか？ いいじゃない」

「俺、ここで派閥とかそういうの嫌だよ？」

「何言ってるの？ 私の所で曹犬派というのが出来るのであれば、その筆頭は私よ！」

「いやいやその理屈はおかしい」

「おかしくないわよね？ 春蘭、秋蘭」

「は！ 華琳様が筆頭であるなら私がこの剣でその道を切り開きましょう！」

「よく言ったわ春蘭！」

「ぼち様、あきらめたほうが早いかと」

明後日の方向に盛り上がり意気込む夏侯惇と、ぼちに諦めを促す夏侯淵。お馬鹿な惇ちゃんも可愛いってはつきり分かるよね。夏侯淵は若干肩を震わせている。おい秋姉、確信犯やんけとぼちは溜め息をついた。曹操の元で曹操派と曹犬派に別れたら曹犬派筆頭は曹操だったとかこれどういう事。派閥争いなんて起きないんですね。分かります。

「というかぼち、貴方のほうが漢王朝での立場は上なのよ？　私が貴方の下に入れば何の問題もないと思うのだけれど？」

「……やだ。立場とか、そういうのじゃない。人の上に立つのは華琳姉がやるべき」

「……そう。ま、今はそう言う事にしておきましょうか。秋蘭」

「は、ぼち様。城内を案内します」

「ふいふいふい……」

城内をずっと案内してもらい、湯浴みでじっくり疲れを癒すぼち。湯船に浸かり旅の埃を落とす。この至れり尽くせり感、やっぱり姉の所は最高だわと今日のご飯をワクワクしながら鼻歌を歌っていると、外が急に騒がしくなってきた。

「ぼちちち！　入ってるっすかー！」

「華崙、入ってるよーってちょ」

真っ裸の曹仁、躊躇無く推参。ぼち、目を逸らす振りしてガン見である。しゃあ

ない。誰か曹仁に羞恥心を教えて……って無理か。

「姉さん！ 勝手に入っちゃって……ああ！ ご、ごめんなさい！」

おそらく曹仁を案内していたであろう曹純が曹仁を追い掛けて入ってきた。そしてぼちを見て赤面、顔を両手で覆って蹲ってしまった。やはり柳林は天使、間違いない。

「柳林、お風呂に服着て入っちゃ駄目っすよー？」

「も、もう姉さんったら、ぼちさんほんとごめんなさい！」

曹純が曹仁を怒りながら慌ててその場から連れて出ていった。……柳林と一緒に入らなかったなあとか考えながら、これがいつもの騒々しさだと、ぼちは皆の所に帰ってきたんだなあという実感が凄く沸いてきて嬉しくなった。

風呂から出たぼちは夏侯淵にぼちの自室に案内された。っていうか風呂場の外にいて曹仁止めないとか完全に確信犯な夏侯淵。ある意味空気読んだとも言える。

「皆、ぼち様が帰ってきて浮わついているのですよ」

そ、そんなんで誤魔化されないんだからね！ イケボで言われても口元がニヤ

ニヤしてるの分かってるんだからね！　と少し抗議するも出来る女秋蘭にぼちが勝てる訳もなく。

「私物も全部そのまま持ってきているそうですよ」

との夏侯淵の一言でぼちが一瞬固まり硬直を脱した後、一人で慌てて部屋に籠った。私物も全部。という事はある。部屋の様相は洛陽にいた時の自室が完コピされている。ぼちの春絵艶本コレクションはどうなっているのか。大切に集めた妹系巨乳物である。ぼちの好みは大人しい控えめな感じの巨乳である。ドキドキしながら元々隠していたはずの場所を探ると、そこにはちゃんと艶本が隠されていた。ただし、全部貧乳物にすり替えられていた。

ぼちは泣いた。全部姉が悪いんですよ。

短めです。

感想の中で大分考えさせられるものがありプロットをじつと眺めていたのです。が、今更プロット弄るとエタる気しかなかったので予想通りだったり気に食わなかつ

たりという事があるかも知れませんが元々考えていた流れで完結まで書くつもりです。

途中からプロット弄るとか無理……。

今まで書いた中で一番お気に入り登録してもらってるし、評価もたくさん貰えて凄く嬉しいねん。作者として返せる事なんて完結させる事くらいしかないから……。

第十六話・曹犬軍の日常

徐晃は誓っている。その魂、身体、髪の毛一本まで、己の全てをぼち様の為に捧げ、主の為に命を懸ける事を。

その徐晃が今最大の危機に直面している。全力を持っても、自分の全てを掛けても、自身の持つ実力以上を振り絞っても勝てない相手がいる。しかし、闘いが始まる前にぼちに言われた言葉、「がんばれ」だけを胸にここまで最強の強敵相手に食らいついてきた。

しかし、もう限界であった。徐晃は手に持つ得物を落とした。その意識は朦朧としている。

「香風！」

ぼちが徐晃に駆け寄る。

「……ぼち様、シャン……頑張れるだけ頑張った……よ？」

「香風！」

徐晃がゆっくりと意識を手離した。ぽちが徐晃を抱き締め急ぎ医療班を呼び、運ばせた。ぽちは言う。

「何で皆こんなに頑張っちゃうんだ……」

戦場では闘いが続いている。

「ま、負けないのだ〜!」

唯一、食らいついている張飛もどうやら限界が近い。それほど相手は強大である。誰もが、勝てない。

「恋殿に勝てる訳がないのですぞ!」

呂布側に付いている陳宮が既に勝ったかのように勝ち誇る。それは正しい。ぽちの周りは、限界を越え倒れた將軍達で死屍累々である。誰しものが、呂布に敗北している。

「もう入らないのだ……」

最後まで残っていた張飛が倒れた。この瞬間、勝者が決まった。勝利を告げる銅鑼が鳴り孔明が告げる。

「第一回、曹犬軍大食い大会、勝者、恋さんです！」

食糧の備蓄が怪しい中で何やってんですかね？

曹犬軍の面々はかなり忙しい毎日を過ごしていた。急に人が増えすぎた、元々居た住民よりも多い人間の衣食住の確保が現在の曹犬軍が総出で取り掛かっている仕事である。というかここまでくればもう街を新しく作っているのと変わらないレベルである。孔明とホウ統、盧植に陳宮が計画を練り、ぼちが「じゃあそれで」と丸投げして他の武将が指揮を取る。周りが忙しそうなのでさすがにアレだなと思ったぼちはいつも書簡をざっと眺める振りだけだったのをたまに書簡を見ながら「これは……どうかな？」と思わせ振りに、しかし具体的な事は一切言わない質問をしたりする。するとどうでしょう。全員で再検討し元々見事な計画が更に立派になって返ってくるのです。

暇なくせに周りの仕事増やしてんじゃねえよ。

そんな忙しい皆やまだ落ち着かない生活を送っている元洛陽の住民に何か見えて楽しいような催し、祭りみたいなモノをやらうとぼちは提案した。くそ忙しいのに。しかしぼちは気付いていなかったが若干の疲れを見せていた皆はぼちの息拔きの提案に、この氣遣いこそがぼち様だと感謝したらしい。ぶっちゃけ皆には休みを上げて欲しい。

そして行われた犬祭りのメインイベントが大食い大会である。備蓄？ やったからにはなんとかなるんやろ。ともかく曹犬軍の将がこぞって参加したこのメインイベント、景品はぼちと一日自由に過ごす。ただそれだけである。つまりだ。ぼちは祭りを開いた挙げ句更に誰かと一日休むつもりなのである。お前まじで働け。まあ、提案したのは孔明とホウ統だけれども。その景品を巡って文字通り死闘となった大食い大会は呂布が無双しただけで終わった。

「……恋さんや？」

「……ん？」

「どうかしたの？」

という訳で今日は一日ぼちと呂布は一緒である。それはいいが呂布がさっきからぼちの背中に抱きついて離れない。そしてなんかくんかくんか匂いを嗅いでいる。ぼちはある。あれ、昨日湯浴みしたから臭くないと思うんだけど。

「……ぼち様、昨日、華琳様と……寝た？」

「いや普通に一人で寝たけど？」

「……そう」

何言ってるのこの娘とはてなマークを頭に浮かべるぼちと再度匂いを嗅いで不審がる呂布。ほんとなんでやろうなあ。

「姉弟だから匂いが似てる……とか？」

「……そうじゃないけど……いい」

そう言っただけ呂布がその身体を、胸をぼちの身体に擦りつける。

「ちょ」

「……匂い、上書き」

そんな事して童貞が耐えられると思ってるんですかね？　すぐに何処かが固く

なるよ。ぼちはやべえと思つて前屈みに座り込む。

「……恋じゃ嫌？」

その行動を避けられたと思ひ悲しそうな顔をする呂布。

「いやむしろぼっちこいだけど、今はちょっと待つて」

「……わかった」

二人が街に出掛ける前的一幕である。デートの日に他の女の臭いを付けてくるとか最低ですぼち様。

二人で街をぶらぶら歩いていると、女性向け衣服店から何やら騒がしい声が聞こえてきた。気になって覗いて見ると曹洪がロリっ娘達を連れ着せ替えさせて楽しそうだった。これは面倒だとぼちは見て見ぬ振りをして呂布を連れてそそくさとその場を後にした。

「……ぼち様、良かったの？」

「ん、皆楽しそうで良かったね。女の子の服とか分からないし、栄華はお洒落だから間違いないと思うよ」

「……ん」

ぼちが適当に言つて呂布は納得し頷いた。お洒落は間違い無いかも知れないけど性癖が間違つてるんですがそれはいいんですね。

衣服店をスルーしてそのまま適当に歩いていると、広場に人だかりを見つけた。何か皆熱心に聴いているようだったのでなんだろうとぼちが覗いて見ると、人だかりの中心には劉備がいた。

「それでね、ぼち様は、曹犬様は戦場のど真ん中で丸腰で烏丸相手にこう言ったの！ 『今まで敵対していた、それがどうした。私達はお互いこうやって盃を交わす事が出来る。ならば友になれぬ道理は無いであろう』 って！」

『おおー！！！！』

『さすが曹犬様だ』

ど真ん中で民衆相手に劉備が布教活動をやっていたのでこれもぼちは見なかった

事にした。スルー安定である。劉備さん何で話盛って捏造してるんですかね。見つかからないようさっさと逃げたぼちは精神的にどっと疲れてきたので休憩して腹を満たす事にした。ちょうど曹仁が「あそこの角の店の点心、すごく美味しかったすよー！」とか言っていた店があつたのでそこで休憩しようと呂布に言つて店に入る。

「恋、お腹空いてる？」

こくりと頷いた恋に、財布これで空になるなと思ひながらぼちは店主にありつたけ点心持ってきてと頼み席に着いた。

「おや？　ぼち様、奇遇ですな」

声を掛けられ振り返ると、趙雲と関羽が二人で点心を食べていた。

「ああ、今日は恋と二人でしたな。これは悪い事をした。恋、すまない。私の事は気にせずゆっくりしてくれ」

意外と氣遣いが出る女、趙雲が呂布に声を掛けた事を謝る。関羽がチラチラチラチラ見てるのはスルーする。こちらに声を掛けた後、趙雲が関羽を嗜める。

「愛紗、その様なはしたない姿を見せては愛しのぼち様に嫌われてしまうぞ。今日は恋の日だ。私とてぼち様と共に食事をしたいが我慢しているのだぞ？」

「わ、分かっているから黙っているだろう！」

「おやおや、分かっていると云っている人間の態度ではないな」

くっくくくと笑いながら酒を飲み始めた趙雲にぶつぶつと文句を関羽が顔を赤らめながら言う。ぼち、全力でスルーしている。

「……皆で一緒に食べる？」

「恋、私達に気を使わなくて良いぞ」

「……皆で一緒に食べたほうが、ご飯は美味しい」

「ふむ、恋にそう言われては断るのも失礼かな。宜しいですかなぼち様」

「恋が良いならいいんじゃないかな」

「だそうだ。良かったな愛紗。愛しのぼち様のお顔をたと眺めると良い」

「星！ お前飲み過ぎじゃないか。まったく……」

趙雲に怒りながらもぼちの顔を良く見られるベストポジションに付く関羽。分かりやすいですね。趙雲はその様子を見ながらからからと楽しそうに笑った。そうこうしている内に卓に山盛りの点心が運ばれてきた。

もきゅもきゅと呂布がひたすら食べ始める。呂布の食べている様子はとても可愛い。ぼちを眺めていた関羽も、いつの間にか呂布がもきゅもきゅ食べている様子を眺めて顔が蕩けてきている。

関羽と趙雲の分までお金足りるかなとぼーっと考えていたぼちに趙雲がこそっと声を掛ける。

「おや、ぼち様。……ぼち様の身体から恋の匂いがしますな」

横で聴いていた関羽がぶふうと噴き出して顔を赤面させた。

「ああ、出会い頭に抱きつかれたからかな？」

「なんだ、それだけですか。ふむ。では今度機会があれば私も……」

「星！」

「愛紗、自分もやりたいのであれば素直に言うといいだろう」

「っっっ！」

とても騒がしくなってきた卓をぼーっと眺めながら、明日小遣いをくれと姉に言わなければと現実逃避し始めたぼちだった。

ぺろっ

?? 「ぼちの身体から他の女の匂いがする……ですって!？」

第十七話・こうきんのらん？

「みんな大好き——！」

『てんほーちゃー——ん！ ほわああああ！』

「みんなの妹——！」

『ちーほーちゃー——ん！ ほわああああ！』

「とっても可愛い」

『れんほーちゃー——ん！ ほわああああ！』

張三姉妹が声援に応え、手を振り笑顔で返す。そして。

『そして——！！ 我らの——！！！！ 曹犬様——！！！！』

ほわ、ほわあ

ああああ——！！ ほわあああ！ ほわああああ——！！』

「あ、どうも」

この日一番の大歓声を受けた我らがぼち様が遂にステージの中心に立つ。

なんだこれ。

最近売り出し中の旅芸人、数え役満☆姉妹こと張三姉妹がこの地にやって来たのは必然だったと言える。曹操の治めるこの地は賊がいない。いやほんとにいないのだ。元々曹操の治世は評判が良く他の地域と比べても格段に少なかった。そこにぼちが入り込んだ。もちろん、それだけで賊が消えるはずがない。

ぼちが行った賊狩りが今の事態を生んだ。「一番活躍した人には一つ何か言う事聞くよー。出来る範囲で」と言ったぼちの発言に目の色が変わった曹犬軍の將軍達は人を超え鬼となった。そして一番やばい呂布もやる気を出した。戟を一振りすれば大地に大穴が空き百人単位が宙に舞う、リアル無双を始めてしまったのだ。賊は恐怖した。恐怖は風に乗り噂となり伝染した。そんな馬鹿な事あるはずがないと言った賊達はその姿を目撃し、僅かに逃げ切れた者は曹操の地から逃げろと言い残し自害した。そんなこんながあつて賊は皆逃げ出してしまった。という訳でこの地域からはとりあえず賊は殲滅された。なので他の地域には賊はちゃんという。

まあそれは置いて、賊に襲われる心配がほとんど無いこの地に三姉妹の旅芸

人が噂を聞いて流れてくるのは当然だと言えよう。街の広場で三姉妹が歌を披露している。と街の見廻り（散歩）をしていた。ぼちがその歌を暇潰しに聴いていた。別にただ立ってぼーっと聴いていただけである。その様子を見た街の人々が、「あのぼち様が聞き入っていらっしやる！ きつと素晴らしい歌に違いない！」と話題にしたために三姉妹は一気に人気になった。その話題は曹操の耳にも入り、三姉妹は城で曹操やぼち、その他皆の前で歌を披露する事になった。

「ふむ」

歌を聞いた曹操は、周りで歌を褒める將軍達を尻目にこの娘達の利用価値を瞬時に、正確に見抜いた。兵の心の癒し、戦意高揚、興行による収入、話題性による流民等だ。が、正確に見抜いた後に完璧超人華琳様が弟馬鹿華琳ちゃんモードに切り替わってしまった。

こういうキラキラな衣装をぼちに着せて歌わせたらどうだろう。絶対イケるわ！

その意識は伝染した。チラッと目配せをすると曹洪が頷きその場を離れた。衣装の準備である。更に孔明に視線をやる。無言で万事承知してますといった具合に力強く頷いた。更に曹操が面々に視線を送る。ぽち以外の皆の心は一つとなった。曹操が口を開く。

「見事な歌ね」

「わーい、ありがとー」

「とーぜんでしょ！」

「天和姉さん、地和姉さんも失礼よ。……失礼しました。曹操様、お褒め頂きありがとうございます」

姉二人を制し、三女の人和が礼を言う。これだけで姉妹の関係がはっきり分かるというものだろう。そして、今の会話を聞いたぽちが微妙な顔をした。え？ この娘ら芸名を真名と同じにしてんの？ 頭おかしいの？ と初対面の人間とは真名絶対交換しないマンであるぽちはどん引きした。まあこれに違和感無いのは初対

面の相手でも誰にでもわりと真名を名乗る曹仁や張飛くらいなものである。

「ええ、褒美を取らせたいのだけれど?」

「褒美だってー! お姉ちゃんお金欲しいなー」

「ちよつと天和姉さん黙ってて。ありがとうございます曹操様。それで褒美とは一体」

「そうね、朱里。今新しく作ってる街に一画用意出来るかしら」

「ちようど人が集まりやすい一画を用意出来るかと」

「ならいいわね。張三姉妹。数え役満☆姉妹と言ったかしら。貴女達専用の劇場、欲しくない?」

曹操の言葉に三姉妹が食い付いた。行政公認の劇場を用意してやるというのだ。あの聖人と呼ばれる人間がいる今大陸で一番人で賑わっている、恐らく一番安全なこの街で。しかも今の話振りからすればかなり好条件の土地で。

「わーすっごーい！　劇場だつて！」

「わ、私達ならそれくらい当然よね！」

「ちよつと姉さん達、いくらなんでも話がうますぎるわ」

「ま、そう思うのも当然でしょう。貴女達の歌が良いと言つてもいきなり劇場なんて与えられても客を集めるなんて出来ないでしょうし？」

「むっかー！　何よ！　ちい達を舐めてるの！　私達なら劇場なんて常に満員にしてやるんだから！」

「ぷんぷん！　私達ならそれくらい余裕だよ！　ね、人和ちゃん！」

「ちよ、ちよつと姉さん達」

「へえ？　見ず知らずの土地で劇場を常に満員に、ねえ？　出来なかったらどうするのかしら？」

「ふん！　私達が出来ない訳ないでしょ！」

「あら、じゃあ初公演で満員に出来たら劇場をあげるっていう条件にしようかしら」
「姉さん達やめて。まだここでそこまで顔も売れてないのにいきなり劇場を満員なんて無理よ」

姉二人を止める三女を見ながら曹操はチラッと孔明を見た。孔明は頷きぽちに言う。

「ぼち様……なんとかあの姉妹に協力してあげられませんか？」

「うん、そうだね」

急に話を振られたぼちは完全に途中から話を聞いてなかった為、適当に相槌を打った。その返事を聞いた孔明は横にいたホウ統に合図を送る。ホウ統も頷き呂布に話し掛ける。

「そ、そういえば恋さん、この間の賊討伐の褒美保留にしましたよね！」

呂布は一瞬なんでこのタイミングでその話をと首を傾げたが、話を理解し合わせた。

「……ぼち様、三姉妹に協力してあげて」

「え、褒美それでいいの？」

「……うん。いい」

一番手柄を挙げた呂布がそう言うのであればぼちが断れるはずもない。

「いいけど、協力って何を――」

「良いそうです華琳様！」

ぼちから求めていた返答を引き出した孔明が曹操に即座に報告する。そしてこのタイミングでこの場から離れた曹洪がバタバタと書簡片手に戻ってきた。

「出来ましたわ！」

「栄華、良くやったわ！ 見せて頂戴！」

曹操が曹洪から書簡を受け取り勢いよく広げた。そこに書いて合ったのは、ぼち用のステージ衣装の原案である。

「栄華……完璧よ」

「仕立てもお任せ下さいませ！」

興奮している曹操達をよそに、完全に話から置いていかれている三姉妹とぼちがポカーンとなっているが多分気にはしていない。

「ふふ……楽しくなりそうね！」

曹操が笑みを浮かべた。將軍一同も笑みを浮かべた。当人達は何の事だかさっぱり分かっていないというのに。

集客の手伝いとしてぼちも初回のステージに立つように言われたのはこのすぐ後である。もちろん三姉妹は文句を言った。素人と一瞬に、しかも女三姉妹のユニットに男を混ぜるなど普通に考えて暴挙である。しかし三姉妹も初めに文句を言っただけで受け入れた。なんせ相手はあの天下の曹犬である。顔が良い曹犬である。一曲くらいなら一緒にやっても役得ってやつよねという精神が働いたのである。ぼち本人は呂布から褒美として頼まれたので断れない。かくして記念すべき初公演にぼちがステージに立つ事が決まった。

言うなれば張三姉妹は宝石である。ステージ上でいつまでも輝き続ける美しき宝石である。その輝きは見る者を魅了する。しかしその真ん中にぼちが立った。言うなればぼちは太陽である。輝きそのものである。歌の上手い下手いでは無い、魅力チートどころかバグである。アイドル三姉妹のユニットに異性を混ぜるとか暴挙？現在大陸で一番信仰を集め、一部地域から神扱いされているぼちと現在地下アイドル程度の知名度の三姉妹、どちらかと言えばおがましいのは三姉妹のほうであ

る。来た客からすればバックダンサー扱い、安室奈美〇とスーパーモ〇キーズ以上の差がある。

ま、その辺りは置いといて初公演は当然成功した。元々実力のある三姉妹である。ファンも当然根付いた。ぽちも何故か一曲限定でたまにステージに立つ。褒美としてせがまれる事があるからである。ぽちの歌を聞いた人々は口々に言う。

全漢王朝が泣いた。

腰痛や四十肩が治った。

豊作になった。

不作だった頭皮まで豊作になってきた。

寿命も伸びた。

隣の人がいきなりテクノブレイクした。

等々まことしやかに噂が大陸中に広がっていった。もちろん三姉妹の公演の素晴らしさもついでに広がった。なので大陸から更にこの街に人が集まってくる事になった。

え？　こうきんのらん？　何それ知らない子ですね。

わい、今日が誕生日なんだ……。

第十八話・曹一門の金庫番

ぼちが曹操にお小遣い下さいと言いに行くと、曹洪に話通しておくから後で向かうように言われた。曹洪は曹一門の金庫番なのです。

「ああ、それと新しい娘が入ったから紹介するわ。季衣、自己紹介しなさい」

「あ、はい！ 僕は許緒仲康、真名を季衣っていいです！ 曹犬様が初対面の人とは真名交換しない事は聞いてるので、曹犬様と呼ばせて貰いますね！」

「うん、宜しくね許緒」

また曹洪が喜びそうなロリっ娘が来たなとぼちは思った。しかし既に姉と真名を交換している辺り相当な実力を持つてるんだろうなとぼちと思う。ま、実力があるが無かろうが素直そうない娘だからいいかとぼちは特に深く考えない。今度点心でも奢ってあげようとぼちと思う。ぼち、その娘も胃袋ブラックホールだからな。その後、ぼちは言われた通り曹洪の元へ向かう。曹洪の執務室の前に立つと中か

ら喧騒が聞こえてきた。

「予算に余裕はありません！　これは煮詰めればもっと予算を削れるはずです！　こちらには計算が間違っています！　それからこちら、なんですかこの項目は！　きちんと説明して下さいませ！　これだから使えない男は嫌いなんです！　なんですの？　きちんと利を説いて説明出来るならやってみなさい！　出来ないならさっさと作り直しなさい！」

曹洪の怒号が聞こえバタバタと文官が複数名部屋から逃げるように飛び出してきた。それを見ながら、また後で来ようかなと部屋の前から立ち去ろうとしたら曹洪から声を掛けられた。

「あら？　ぼちさんではないですか？」

見つけたのでしょうがなくぼちは入室したが、先ほどのやりとりの後でお小遣いくれはさすがに言いづらい。

「ああ、お小遣いですわね。お姉様から聞いていますわ。そんなに畏まらなくても
ぼちさんのお小遣いは別枠できちんと用意してますわ」

それ給金を管理してもらってるのと何も変わらないと思うが、ぼちが気付いてないから何の問題も無い。

「あら？ 衣服が乱れていますわ」

曹洪がぼちの衣服を直し始める。

「服が乱れてはだらしく思われてしまいますわ。……髪も寝癖がついていますわね。民にも部下にも、ぼちさんは憧れの人なのですからシャンとなさらないと……。これでマシになりましたわね」

ぼちの衣服や髪をささっと直していく曹洪。まるで新妻……！曹洪の嫁力が上がっていく……！

その様子を偶然報告にきた曹純が目撃した。おどおどした様子で書簡を手に曹純が話しかける。

「あ、あの……何してるの栄華ちゃん」

「あら柳琳。何ってぼちさんの服と髪 of 乱れを直してただけですわ？」

「あ、そうなんだ……」

「どうかしましたの？」

「いえ、なんでもありません……」

ま、普通勘違いするよね。曹純が勝手に勘違いした様子をぼちと曹洪は不思議そうに眺めていた。その後、曹洪は曹純に何を何故勘違いされたか気付き顔を赤らめながら曹純に違うんです！ と必死に弁解していた。

「華琳様、お疲れのようですが……」

いつも神速で政務に取り組む曹操の手がまったく動かず、机に肘をついて頭を抱える様子に、仕事の報告に來た夏侯淵が心配そうに声を掛ける。

「ああ秋蘭、違うのよ。疲れてる訳じゃないわ」

「では華琳様、何か悩み事でも……。私で良ければ話を聞かせて頂けませんか」
「……そうね」

あの曹操に悩み事というだけでも驚きだったが、それを打ち明ける事に内心驚く夏侯淵。普段弱味を見せぬ曹操だけに何事かと身構える。

「……ぼちの貞操、危なくないかしら」

「……は？」

一瞬呆気にとられるも、考え言葉を絞り出す夏侯淵。

「華琳様。ぼち様の周りには今、魅力的な娘達がたくさんおります。さすがに誰か既に御手付きであるかと思いますが……」

「まだ無いわね」

「何故判るのでしょうか」

「あの娘達の好意は信仰に近いもの。ぼちが手を出すなら拒まないでしょうけど、ぼちは手を出さないわ」

だって童貞だものと断言する曹操。

「ならば何をお悩みですか？」

「……一人だけ危ない気がするのよ」

「それは？」

「恋よ」

呂布だけは流れのままそうなりそうな予感がすると曹操は言う。

「ですがそれならばち様も恋と既に至っている可能性も——」

「無いわ。皮膚と汗は嘘をつかないわ。童貞の（味と）匂いをぶんぶんさせているもの。あの童貞臭はまだ間違はなく童貞よ」

匂いは比喩と受け取れるが皮膚と汗とは一体……と目を瞑り聞かなかった事にしようとして頭から切り捨てた夏侯淵。

「はあ、童貞とは匂うものなのですか？」

いつの間にやら部屋に入ってきていた夏侯惇が曹操に尋ねた。

「当然でしょ」

「なんと」

驚く夏侯惇と同じく内心驚く夏侯淵。二人共に曹操としか閨を過ごした事がないので男に関する知識が足りなかったのかと思うに至る。違うよ？　そこにいる弟馬鹿がおかしいだけだからね？

「よし」

何やら決断した夏侯惇が部屋から出ていった。まあいいだろうとそれを流した夏侯淵に曹操は言う。

「やはり貴女にぼちの初めてを頼んでおくべきかしら」

「ぼち様の好みというのであれば柳琳かと思います。私は少し外れているかと」

「柳琳だとまずいのよ。なんとなくだけれど」

「まずい……ですか？」

「ええ」

曹操の勘は当たっている。ぼちと柳琳だともうゴールしちゃってぼちは本当に引きこもるだろうし、そんなぼちを甲斐甲斐しく柳琳は世話をするだろう。完璧駄目人間完全体となるのは明らかである。柳琳が天使過ぎるので仕方ないね。しかしその裏で栄華の新妻力が上がっている事はさすがに読めなかったようだね。

「ではその……華琳様が……」

「駄目よ。その……だって……無理矢理そういう事して嫌われたくないじゃない……」
夏侯淵がキュンッと来たのは仕方ない事だろう。恥ずかしそうに悩む華琳様可愛

「……私とてぼち様には嫌われたくはありません」

「……とりあえず保留ね。」

ぼちの貞操に関して曹操が悩む際、いつも保留で話が終わる。政務に関しては即断即決の曹操もこの話題にのみ二の足を踏みまくっているのは嫌われたくないからである。夏侯淵辺りが夜這いに行ったら拒否しないと思うけど自分からぼちが動く事はない。童貞だから。

「ぼち様はいるかー！」

ドオオオオンと執務室の扉が吹き飛び直線上の壁にドカーンと叩き付けられ扉がお亡くなりになりました。わりといつもの事なので一緒に仕事している孔明もホウ統もこの程度で驚く事は無い。夏侯惇は何故扉を蹴破るのか。そこに扉があるからなのか。わりといつも扉が吹き飛ぶので扉から壁までの直線上は空白を作っておくのが、この部屋の常識です。

「春姉、また栄華に怒られるよ？」

「う……それより！」

部屋に入ってきた夏侯惇がぼちの元へ駆け寄る。

「匂いを嗅ぐぞ！」

「へ？」

いきなりぼちの匂いを嗅ぎ出す夏侯惇に困惑するぼちと呆気にとられる孔明とホウ統。なんだろう、ぼちの匂い嗅ぐの一大ブームなの？

「なるほど、これが童貞の匂いだな。覚えたぞ」

「」

ふふんと鼻を鳴らす夏侯惇と、その一言で日向一族の如く白目になったぼち。

「あ、あの、春蘭様？」

ホウ統が一体何してんのと夏侯惇に尋ねる。

「ああ、ぼち様が童貞の匂いがぶんぶんすると華琳様が仰っていたからな。童貞とはどういう匂いにするものなのか嗅いでおこうと思ってな。これが童貞特有の童貞臭というやつか。参考になった」

「」

華琳姉ひどいと思ひながら魂が抜けたぼちと、やはりぼち様はやおい！ と顔を赤らめ興奮する孔明とホウ統。孔明とホウ統は無言でアイコンタクトを取りその夜熱い二人の会議が行われ、謎の同人サークル『はわあわ☆軍師』から新刊『曹犬×虎豹騎 犬から女豹に変わる夜』が発売され、裏でめっちゃ売れたのは内緒だよ。そして夏侯惇は満足そうに帰っていきました。

日常パート書いてたら話が進まない……。

皆さま誕生日祝って下さりありがとうございます！

あの日は仕事帰りにコンビニでケーキ買って皆さまのコメント見ながら一人でケーキ食べるというリア充な日を過ごしました。

第十九話・聖人の手刀は音速を超える

その戟の一撃は誰にも見えなかった。

一瞬、手元の戟が消えたように見えた。しかしその消えたように見えた戟は確かに手元に有った。そして、音と衝撃が後から襲ってきた事で確かに呂布が戟を振ったのだと場の全員が理解した。呂布の戟が音速の壁を超えたのである。聖闘士みたいな真似やめて下さい。作品が違います。

「恋さん？」

「……ハエがいた」

孔明の問いに対して答えた、恋の指した先を見ると確かにハエが両断されていた。重量武器で宮本武蔵を超えるような真似をさらっとやる公式チート呂布。ハエを斬る為に大袈裟過ぎると思うよ。

「ハエ、斬れるんですね」

「……蚊も斬れるよ？」

呂布の戟が再び一瞬消える。再び音が遅れて襲ってくる。そしてまた、呂布が指

した先には蚊が両断されていた。蚊を両断ってどういう事。その人から外れた絶技を見て刺激された曹犬軍の將軍達が一匹の蚊を集団で取り囲み、一般人を超越した絶技を振るう。

それは見るものが感動する関羽の洗練された一撃。それは見るものを魅了する徐晃の舞うが如く一撃。それは見るものが怯える張飛の豪腕から繰り出される一撃。それは見えぬ趙雲の神速の一撃。それは猛将といわれた華雄の一撃。しれっと混ぜたけど華雄ここにいたの？ まあ華雄はこの際どうでもいいとして、一匹の蚊に対し、豪華な布陣がそれぞれ最高の一撃を振るう。しかし当たらない。当たらないのだ。当たる前に風圧で吹き飛ぶのだ。蚊は泣いている。

「……皆何してるの？」

「あ、ぼち様」

「今、皆が蚊を……」

「蚊？」

曹犬軍の訓練場にやってきたばかりに、孔明が説明しようとしたが説明する前にぼちが蚊に目をやり前に出た。

「えい」

パンッと乾いた音がした。

両の掌で蚊をぼちが叩き潰したのだ。実に空気を一切読まぬ男である。場がシンッと静まり返る。

「栄華が皆に人員表提出してって言ってたよ。じゃ、朱里行こうか」

「は、はい！」

ぼちが孔明を連れてさっさと場を後にした。自分の仕事を孔明に押し付けたいだけである。場を後にした二人を見て、趙雲が笑った。

「くっくくくくく。確かに、斬ろうが潰そうが一緒であるな！」

「むー、でも鈴々は斬りたかったのだ！」

「鈴々よ。ぼち様の言いたい事が分からぬか？」

趙雲の言葉に腕を組み悩む張飛。横から関羽が趙雲に言う。

「むう。星、お主は分かるのか？」

「確かに恋の力は皆の中で、いや大陸中を見ても抜けているだろう？　だがやりようはいくらでもあるとぼち様が見せてくれたのさ」

「ふん、確かにぼち様がああの時の速さで得物を振れば、いや手刀でさえ呂布と同じ事が出来るだろうに、敢えて手で潰したのはそういう事か」

この中で唯一、ぼちと手合わせをした事がある華雄の言葉に一同が驚いた。関羽が聞く。

「……ぼち様は恋と同等の速さを？」

「いや。あの時私が得物を振った瞬間にぼち様は消え、気付いたら負けていた。私は辛うじて呂布の一撃は見えるというのにだ。つまり、呂布より速い」

華雄さん。それ消えたように見えただけだから。呂布より早いとかありえないから。しかしそれを聞いて目を輝かせる將軍達。

「いつかぼち様と手合わせをしたいものだな」

「鈴々も全力でやるのだ！」

「ふむ、それまでに恋に一撃を入れられるようにならねばな」

関羽、張飛、趙雲が気合いを入れる。ぼちの死亡フラグがびんびんに立った。

一人静かな徐晃は空を見る。確かに呂布と同じ事が出来る訳では無いが、呂布のようである必要もない。それぞれ、違うやり方で良いのだとぼちが示してくれたのだから自分には何が出来るだろうと考える。

皆、ぼちの野郎仕事をさっさと孔明に押し付けたかっただけだからね？

ある日、隣の豫州沛国の相である陳珪漢瑜が訪ねてくるとかで偉い人が来るなら部屋で大人しく引き込みとおこうと思ったぼちだが、姉に同席を命じられ仕方なく会う事になった。一番立場が上なのはぼちだという事は、姉の所に来た時点ですっかり忘れている模様。

長い髪と、巨大なおっぱいを見せつける為だけに作られたようなドレスの裾を緩やかに流しながら曹操やぼちの待つ部屋に陳珪が現れた。あれかな？ 夏侯姉妹

といいまだ出てきてない孫家といいこの世界は巨乳をさらけ出す文化でもあるのだろう。実に素晴らしい。陳珪の後ろに続いて現れたのは娘である陳登元龍。母に似た髪色とまったく母に似なかった乳を持つメガネっ娘である。政治家である母の余裕のある笑顔と違い、こちらは実に緊張している様子だった。

「お初に御目にかかります、曹犬様。曹孟徳殿も御目にかかれて光栄ですわ」

じつと値踏みをするように陳珪がぼちを見る。ぼちも陳珪をチラッと胸を見る。でけえなと思った。ただそれだけである。エロい格好だろうが巨乳を見せつけようが、巨乳見せる衣装なら夏侯姉妹で耐性が出来ているしそもそもぼちの好みから外れているからしょうがない。童貞だからチラッと見てしまうのもしょうがないが、ぼち的には政治家とかいう面倒臭い人種とは関わりたくないという気持ちのほうが強いのでチラッと見ただけで目を瞑り会話を姉に任せる事にした。

対して陳珪はそのぼちの様子を見てアプローチの仕方を間違ったかと笑顔を崩さず内心舌打ちをする。蠱毒の壺のような洛陽で軍事の実質頂点まで登り詰めた曹犬は間違いない怪物と考えられる。

軍事において漢王朝の頂きに立った男である。しかしただ武勇に優れているというだけで、あの魑魅魍魎だらけの洛陽で上にいけるはずがない。噂は嫌というほど聞いている。ここにくる前に人手を使い情報も集めた。聞く話はほとんどがぼちのその人となりを褒め称えるものばかり。そんな事がありえるのだろうか。漢王朝にいる官僚をあつさり抜き去った怪物である曹犬が、果たして本当にそのような人物なのだろうかと陳珪は自身の目で確認したかったのだ。まさか武勇にも優れていない低脳でたまにお人好しなだけの基本クズだとは思うまい。

とりあえず陳珪の内心は置いといて曹操と陳珪の会談が始まった。内容は簡単にいえば同盟である。軍事力の低い豫州だが、近年米や麦の生産力が飛躍的に上昇している。対して曹操側の軍事力は大陸最強といつていいが急激に住民が増えすぎて足りないものが多すぎる。お互い補える物がある。が、豫州側として最大の利は曹犬との結び付きであるとぼち以外の誰しもが考える。

「——まあ、そんな所かしら」

「ええ、実りのある話となって幸いですわ」

ぼちは目を瞑ったままもう半分意識を夢の中に移動させつつあった。さすがにこのままじゃ寝ちまうなど目を開けると、この部屋に入りまだ一言も話していない陳登と目が合った。ずっと見られてる気がする。姉のほうの話も大体纏まったようなのでぼちは少し話しかけてみる事にした。

「……えっと、どうかしたかな？」

ぼちに話し掛けられた事に驚いた様子の陳登に陳珪がフォローを入れる。

「この娘は後学の為に連れて来ました。喜雨、自己紹介を」

「僕は姓を陳、字を登、名を元龍と申します。まさか本当に神様にお会い出来るなんて思わなかった……」

陳登の発言にぼちが固まった。面と向かって神様扱いされたのは実は初めてです。その発言に曹操が笑いながら話す。

「ふふふふ。そう、貴女ぼちを尊敬しているのね。陳元龍の名は聞いているわ。ぼち、豫州の収穫量が飛躍的に増加しているという話を会議でしたの覚えてるか

しら。その農法の改革をしたのがこの陳元龍よ」

「おお！」

姉の話聞いて、軍事や政治の話はほとんど覚えていない男が思い出した。食べ物に関する事だけはほんと覚えてるんだね。

「君が豫州の！ いやー凄い人だね！ 尊敬するよ！」

陳登の手を取り上下にブンブン振り回しながら陳登に尊敬すると伝えるぽち。普段鉄仮面のように表情を崩さない陳登、これには大慌てである。

「そ、尊敬だなんて……。僕は土や水と向かいあっただけだよ。それに答えてくれたのは作物達だから。新たな作物で食糧不足を解決したり戦を止めた曹犬様に比べたら僕なんて」

「それは違うよ陳登！ 君は素晴らしい！ 何故なら――」

ぽちが陳登をベタ褒めする様子を見て陳珪は娘を連れてきて良かったと思う。ちなみに曹操視点でいうとぽちを尊敬しているという時点で陳登の評価は元々関心があり高かったのに素晴らしく上昇した。

「ところで曹操様。中央の動き、把握していらっしやいますか？」

「反曹犬連合を企んでいる何進の事なら知っているわ」

陳珪の言葉に曹操がそれくらい知っているけど何？ と答える。

「ぼちの討伐命令が下されるのであれば戦うだけよ。私達はね」

「……頼もしい限りですわ。中央にも知り合いが何人かいます。情報は常に集めておきますわ」

「あら？ 土壇場で裏切って貰っても構わないのだけれど？」

「いえ、私は曹一門こそ寄り添える大樹だと思いますから」

「ふふふふ。そう有り続けられるようありたいわね」

ちなみに何進の動きは中々進んではいけない。ぼち信者が予想以上に洛陽に多い模様。

「あ、そうだ。陳珪さん」

「なんでしょう曹犬様」

この日初めてぼちが陳珪に声を掛けた。

「ちょっと『はわわ！』って言ってもらえませんか？」

「はわわ？」

「はわわ……」

ぼちの言葉に答える元祖はわわと新はわわ。大人になったら孔明もきっと陳珪みたいな立派な胸になるはずだぞ。萌将伝的に考えて。

音速を超える手刀。つまりエクスカリバー。

すいません。風邪引いて長引いてるので話書けてません。感想の返信後でします。

第二十話・ヴェルタースオリジナル

ハチミツ大好き美羽ちゃんの朝は早い。

四世三公の血筋は伊達ではない。ぼちにより性格が若干矯正され、姉妹仲が良い姉麗羽も私塾では曹操を上回り常にトップであつたように、美羽ちゃんも一見アホの娘のような振る舞いをしながらその血統の優秀さを遺憾無く發揮し凄まじい改革を次々に成し遂げていった。

美羽ちゃんの思考の基本は「ぼち兄様ならきつとこうするのじゃ！」である。美羽ちゃんはぼちが活躍し、その逸話を聞く事が大好きである。なので部下が活躍すればその愛らしい笑顔で「よくやったのじゃ！」と言いながらちよつと大袈裟なくらい褒美を出しちゃうのである。美羽ちゃんは一度、洛陽にいた頃にぼちに付いて戦場に行った事がある。戦場で傷付いてしまった兵を見ながら「戦なんかしたくないんだよね」と常勝無敗の將軍と言われ始めていたぼちが言ったのを美羽はよく覚えていた。

ほんとにそのままの意味でぼちは働きたくないと言っただけなのだが、これだけ

の才が有りながらそれに酔わず一人一人を思いやるぼちを凄いと美羽ちゃんは思った。なので美羽ちゃんは今この大陸で最も優秀と言われるゴッドヴェイドオオオオオオの華佗を呼び、私財を使い医療研究所を作った。そして研究所の医療班を常に戦場に同行させ、少しでも亡くなる人間を減らせるよう努めたのだ。勿論戦場で傷付いた分の治療費は無料である。

街に出歩いては困った人を見掛けると大袈裟なくらいに心配してすぐに対処したり、ぼちがやっていたからと点心の店の行列に普通に並んでしまう美羽ちゃんは幼いなりに凄く国の為に頑張っているのである。

そんな美羽ちゃんの配下には江東の虎の娘である孫策を筆頭とした孫家がいる。「家族が離れて暮らすなんて駄目なのじゃ！ 皆仲良く暮らすのじゃ！」と言った美羽ちゃんの一言で孫家は纏まる事が出来たし、その武功に応じた報酬もきちんと、いや過分に出される。一度孫策が「報酬なら孫家としては建業が欲しいんだけどねー」と軽口を言った結果、まだそこまでの武功を立てていないにも関わらず「雪蓮ならきつと大丈夫なのじゃ！ わらわは信じておるからの！」と言ってあっさり建業をあげてしまった。

「この恩は働きで必ず返します」と言つた孫策の言葉に偽りは無い。しかし美羽ちゃんは「ならその働きは建業の民の為にしても！ 建業の皆がそれで笑顔になれるならそれが一番なのじゃ！ 雪蓮ならきつと出来るのじゃ！」と返す。もう孫策は、孫家は、この天真爛漫な幼い主に対する忠誠が揺らぐ事は無いだろう。「ぽち兄様ならきつとこうするのじゃ！」思考で美羽ちゃんがチート化している。

美羽ちゃんは幼いが故に思考が浅い所も多分にあるがちゃんと考えて結果を出してるのだから、ぽちの野郎よりはるかに優秀だと思ふよ。ちなみに幼さ故の危うい所は裏で七乃が全部処理してるので安心していいよ。今は孫策と周瑜も、美羽の為に喜んで七乃に協力しているから、袁術陣営は裏も表も磐石なのです。そしてそんな主である袁術が『兄』と慕う曹犬も袁術陣営にとって特別な存在なのです。そのせいで後で問題が起こって悩む人が出るなんてこの時点では誰も思ふまい。

ちなみにぽちにとつても美羽ちゃんは可愛い妹で、張飛や許緒から兄と呼んでいかと聞かれた際に、「既に兄と呼んでくれてる子がいるから、その子が悲しむかも知れないから駄目」と普通に拒否したくらいに特別な存在なのです。ヴェルタースオリジナルがあればプレゼントしあつてくるくらいの関係なのです。

「ほくら、ネコじゃらしだぞー」

「あ、反応しましたねぼち様」

「よし季衣、エサで釣って軒下から誘い出そう」

「はい！ 怖くないよー。エサですよー」

曹犬と許緒が軒下に向かつてネコじゃらしやらエサの入った器やらで軒下にいるネコ（仮）を釣り出そうとしていた。夏侯淵も軒下に声を掛ける。

「姉者、いい加減機嫌を直して出てこい」

「うるしやい、また皆でわたやしをバカにしようとしていりゆんだー」

酔っ払って酒瓶を抱え、軒下でネコのように蹲ってしまった夏侯惇こと春蘭……春にゃんでいいか。春にゃんはなかなか軒下から出てこない。一瞬の隙を見てぼちが付けたネコ耳カチューシャが良くお似合いです。ぼちが振るネコじゃらしに反応している辺り大分猫化が進んでいる模様。飼いたい。

「誰も姉者をバカになんかしていないぞー」

「そうだよ春姉」

「何しているのあなた達」

「あ、華琳様。春蘭様が軒下から出てこなくなっちゃって」

「はあ……春蘭、何をしているの？ ネコなのは閨の中だけで充分よ？ ほら、

行くわよ。秋蘭も」

「はっ」

「華琳様」

曹操の言葉に嬌声をあげて付いていく春にちゃんと秋蘭。ここR・18じゃないので後は裏側で宜しくお願いします曹操様。

「ぼち様、ねやでねこってなんですか？」

「寝台でにゃーんって言わせるみたいなの？」

「寝台でにゃーん？ ぼち様、僕頭悪いからよく分からないんだけど……」

「季衣は悪くないよ。大人になれば分かる……、いや分からなくても問題無いから」
「閨でネコ……寝台でにゃーん……、あ！ それってぼち様も確かそんな感じで

噂されてるの聞きました！」

「……にゃん？」

「そっか。あの時も良く分からなかったけど大人になったら分かるんですね！
ぼち様がネコって言われてるの僕良く分からなくて」

「」

笑顔と純粋な目の許緒にさらっと言われ、白目を向いたぼち。何処かの伏竜鳳雛のお蔭で熱い風評被害が広まっている模様。

尚、先日の童貞扱いとネコ扱いのダブルパンチで流石に耐えられなくなったぼちは、気が付いたら街から失踪していた。主に霸王と伏竜鳳雛のせい。

皆様良いお年を。来年も宜しくお願いします。

第二十一話・幼女の元へ逃げる聖人

「ぼちがいないですって？」

「はい、ぼち様の姿が何処にも見当たらないようです」

「ふむ……」

ぼちがいなくなったとすぐさま孔明から曹操の元へ報告が上がった。

「……洛陽の動きは？」

「確か、何進の動きが活発になっているとか……まさか!？」

「でしょうね。ぼちらしいじゃない」

「私達は、頼りにならないんでしょうか……」

「違うわ。誰も傷付けたくないのよ、ぼちはね」

まるでぼちが一人で反曹犬連合の起こりを、戦を止めに行ったかのように話をし
て納得している曹操と孔明。出ていったのまじでお前ら二人のせいだからな。

「あ、後は恋さんもいなくなってます」

「なんですって!？」

「あの、華琳様？」

曹操は口元に手をやり、わなわなと震えだした。曹操は考える。ぽちと恋、その組み合わせの二人きりはまずい。これじゃ折角ぽちの童貞が守られるように噂を色々こっそり流した意味がなくなるじゃない！と。曹操よ、元凶お前かい。弟の事になるとほんと馬鹿になる曹操様可愛い。馬鹿姉よ、震えて眠るがいい。

とりあえずぽちが戦を止める為に恋を連れて街から出たという事になったので、他の皆はしぶしぶ納得してぽちの帰りを待つ事にした模様。

まさか年単位で帰ってこないとは誰もこの時は思うまい。弟馬鹿の震えて眠る夜が始まる。

場面は変わって、ぽちは泣いていた。ぽちは童貞扱いは事実だからまだ耐えられたがネコって。俺犬やぞと謎の突っ込みを心で入れながら気が付いたら牧場王に跨がって街から飛び出していた。

「……拭く？」

「ああ、ありがとう……って恋？」

ぽちに涙を拭えと手拭いを差し出してきたのは呂布。一人でこっそり飛び出したと思ったら元々護衛していた飛將軍が付いてきていた。ぽち、お前程度が撒ける相手じゃねえぞ。この世界最強の武力チートだからな。お前光栄で武力表示されると5くらいだからな。おそらく運補正が乗る系のスキル付いてるけど。

「……ぽち様、街、戻らない？」

「このまま麗羽さんと美羽ちゃんの所に顔出しに行く。久しぶりに会いたいし」

「……分かった。……恋、ぽち様守る」

「え、あーうん、宜しく」

ほんとには一人旅して麗羽や美羽の所でうだうだごろごろして惰眠を貪る予定だったぽちだが、よくよく考えると賊に襲われれば瞬殺されるので、たかが賊相手の為に呂布に護衛してもらおうという贅沢な選択をした。尚、賊は呂布が一睨みするだけで脅えて逃げ出す模様。

美男美女の二人旅。普通に考えて何も起こらない訳がない。が、残念！ 普段

究極の武を見せつけてくれる呂布に手を出す勇氣が童貞で無くても有る訳がなく、何事も浮き沈み無く普通に袁術のいる街までやって参りました。城の門番に「曹犬だけど、美羽ちゃんいる？」っと聞いたぽち。は？　こんなとこに聖人様がおるわけないやろと怪しまれ、偽名を名乗ったと決め付けられ引っ捕らえられそうになる始末。そして始まる呂布無双。バッタバッタと次から次に現れる袁術軍の兵士を薙ぎ倒しその数が百を超えた辺りでやっと、袁術に仕える古参の兵士が、「あ!? 本物の曹犬様だ!？」と声を上げる。「うっそだろ」「え、まじもの？」と疑惑の聲が上がるも、話を聞いて慌てて出てきた袁術軍の大將軍、張勳がぽちに平謝りし始めたのを見てその場の全員が打ち首を覚悟した。

「ぽち様、大変失礼致しました」

袁家の関係者は、全員ぽちに対して様付けである。

「いやいや、連絡無しに来てごめんね?」

「そんな、ぽち様ならいつでも大歓迎です。お嬢様もお喜びになりますし、そんなお嬢様の姿は大変可愛いらしいですし」

「七乃は相変わらずだね」

「いえいえ、ではぼち様に失礼をしたこの者達は私のほうで処罰しておきますのでー」

「処罰？ この人達は真面目に働いてただけなんだからそんなのいらないよ。ね、恋」

「……殺さないよう手加減はした」

「ぼち様がそう仰るのであれば処罰はしな——」

「ぼち兄様——!!」

城からとてとと駆けてきた美羽ちゃんがそのままぼちに飛び付いた。美羽ちゃんが走って飛び付くのはぼちに対してのみ。張勳はあらあらと言いながら羨ましそうな表情を隠さない。気持ちに分かる。

「ぼち兄様、久しぶりなのじゃ!」

「美羽ちゃん、久しぶり。走ると危ないよ?」

「わらわもぼち兄様に負けないうよう鍛えておるから大丈夫なのじゃ!」

「七乃?」

「はい、お嬢様は治世も武も頑張っておられますよ」

「ふふん、ぼち兄様のように立派になる為に頑張っておるのじゃ！」

「そっか、美羽ちゃん偉いね」

「ぼち兄様、もっと誉めてたも！」

「偉い偉い」

ぼちに誉められたくて凄く色々頑張ってきた美羽ちゃんはここぞとばかりにぼちに甘えた。尻尾があればはち切れんばかりに振っていることであろう。まさかとうくに知力も武力もぼちを超えているなんて美羽ちゃんは思うまい。ぼちは多分もう俺より上やろうなあと思うてると思う。幼女に負ける自信満々なネコ。じゃなかったぼち。お前それでいいんか。

「雪蓮、何故今皆で美羽様の元へ行かねばならんのだ？」

「冥琳、そりゃあなんとなくよ。なんとなく行ったほうが面白そうだからね」

「……はあ」

「雪蓮姉様、冥琳もため息をつきます。いきなり全員連れていくだなんて。私と思春だけでも建業に残っていたほうがいいのでは？」

「だーめーよ。蓮華は絶対連れていくわ」

「何故です？」

「勘よ」

「……はあ」

「何よー。蓮華までため息付いてー」

「まったく、最近は落ち着いてきたと思ったらこれじゃからのう」

「いいじゃない。美羽の所で美味しい酒でも貰って呑みましょう？」

「……まあ旨い酒に罪はないからのう」

「さっすが祭は話が分かるー！」

「雪蓮！ 祭殿もあまり雪蓮を甘やかさないで下さい！」

「あっははー。冥琳こわーい」

「雪蓮！」

ぼちが無事に美羽の元へ辿り着いたその頃、孫家一向も孫策のなんとなくだけどと言ったあやふやだけど超強引な命令で全員美羽の所を目指していた。

明けましておめでとうございます。本年も宜しく願います。

呉の人物は真までしか出しません。太史慈や魯肅やは呉の革命待ちなのです。恋姫シリーズは英雄譚だけ未プレイなもので。呉革命のティザーサイト公開されましたね。真では呉が一番好きだったので待ち遠しいです。蜀は話のラスト作り直せまじで。あの話のままだと蜀だけ買わないぞ。

第二十二話・虎の口を塞ぐ

「曹犬様って確か強いよね？ 手合わせお願い出来ないかしら」

「雪蓮、頼むから無礼だけはやめてくれ」

「あら、私がそんな事しそうに見える？」

「見えるから言っている」

「ぶーぶー。冥琳ひっどーい」

城に着いた孫家一同は、現在城に曹犬が滞在している事を告げられた。相変わらずの孫策の勘にもはや呆れる孫策以外の面々。お目通り出来ると知った時、孫策が物騒な事を口走っていたが何時もの軽口だとこの時一同は思っていた。

玉座に通され、美羽と並び顔立ちの整った男が立っていた。あれが曹犬。その男を見た孫策が不思議に思う。

あれ？ 確か華雄を御前試合で一瞬で倒した豪の者って話よね？ 全っ然強そうに見えないんだけど。むしろ後ろに控えてる赤髪の……うわあ、あの娘は底が知

れないわね。一度手合わせしたいわ。うん、でもやっぱり曹犬様、まったく力を感じないわ。

孫策の勘がぼちの非力を正確に読み取る。合ってます。美羽ちゃんが孫家一同を紹介してくれている間も、孫策はぼちの一挙一動を見続けた。

おかしいわ。やっぱりまったく強そうに見えない。実力を隠してるようにも見えないわ。

合ってます。しかしこうなると孫策の好奇心が騒ぎ出す。噂で聞くぼちの人となりならば多少の無礼は許されるのでは？　なら試して見ちゃえば分かるわよねと罰は受けても最悪極刑は無いだろうと高を括ってしまった。

ぼちが孫策の前に出て握手を求めようとした時、孫策は自身の好奇心を抑えきれなかった。バトルジャンキーの血が騒ぎまくったのだ。孫策は握手を交わす振りをして、自身の腰に帯刀している南海霸王に手を掛けた。掛けたのだが抜けなかつ

た。孫策が拔刀するまでに掛かる時間はコンマ数秒。南海霸王の柄を握り鞘に刃を走らせようとした瞬間にトンッと孫策の身と南海霸王に軽く重量が乗った。

実は握手を交わそうとした時、ぼちは何故か転けた。平地で段差も無い所で転けるとか幼児かお前は。転けた拍子にぼちの顔は孫策の大きな双丘の谷間に突っ込み、握手しようとした手は孫策の腰の南海霸王の柄頭を押さえた。孫策が拔刀する刹那、ぼちが南海霸王の柄頭を押さえ孫策の拔刀を防いだのだ。

江東の虎の娘である孫策も又、虎である。例えるなら虎が牙を剥こうとした瞬間、頭を抑えられ口を開く事すら許されなかった事になるであろう。これには孫策も、又孫策の周りの孫家の面々は驚いた。これでは子供扱いどころではない。孫策の武勇はまさしく天賦の才である。調子の波はあれど、大陸において明確に孫策を上回る事が出来る人物など呂布のみと言って良い。その孫策を同じ舞台にすら立たせなかったのである。同じ舞台に立ったらぼちは即死確定。

「あ、申し訳ない」

ぼちが顔を上げ謝罪した。本来謝罪すべきは孫策である。いかにぼちが許そうとも、拔刀していれば何らかの罰を与えなければならなかったであろう。いや、今孫

策の手は南海霸王の柄に掛かっているのだ。ぽちが柄頭を押さえている時点で言い逃れは出来ない。叱咤され罰を与えられて当然の状況である。が、ぽちは自ら軽く孫策の身体に当たる事でその件を謝罪し孫策の件を有耶無耶にしたと孫家側からは見てとれた。これだけ書くと実に紳士的な男である。転けて巨乳の谷間に突っ込んだだけなのに。そのまま斬られて死ねば良かったのに。

「え、ええ……」

「改めて宜しく、孫拍符」

ぽちは改めて笑顔で手を差し出した。こいつ巨乳に顔突っ込んだのを笑って誤魔化す気である。

「はい、宜しく曹犬様」

言葉使いも先程の態度も全てを受け入れ笑顔で改めて握手を求めた曹犬の器の大きさに、孫家一同呆気にと取られたと言って良い。そいつの器おちよこくらいだけだな。

「雪蓮、ぽち兄様が良いなら良いが次は無いからの」

横から美羽ちゃんの厳しい言葉が飛ぶ。つまり美羽ちゃんも孫策の抜刀の動作を

見抜いた事になる。成長してるね。ぼちは抜刀しようとしたなんて全く気付いてないのに。爪の垢でも煎じて飲んどけ。

「雪蓮……」

「冥琳、私の勘もまだまだみたい。今の私じゃ格が違い過ぎて見通せないわ、あの人の事は。……ふふ、やっぱり大陸って広いわね！ 強くなったつもりだったけどまだまだ赤子同様に扱われるだなんて」

「いや、策殿は強いぞ？ 相手が希代の天才だっただけじゃ。策殿に抜刀すらさせぬとは。大殿とどちらが強いか興味がある。わしも一手指南してもらおうかのう」
「祭が指南される側ねえ。ねえ祭。母様以外だと他にいる？ 曹犬様と比べられそうな人」

「いや、おらぬ」

「なら私の目標は決まったわね。曹犬様にはまた手合わせしてもらわなくっちゃね」

「思春、見えた？」

「はっ、雪蓮様が柄に手を掛けるのと同時に柄頭を押さえていました。雪蓮様の動作を見て動いたようにも見えたので……」

「つまり雪蓮姉様より早い？」

「……そう見えました」

「そう、凄いのね、曹犬様は。一度ゆっくり話してみたいわ。幽州での話を聞けるかも知れないし」

「蓮華様は曹犬様の幽州での逸話が好きなのですね」

「だってまるでお伽噺みたいだって思ったもの。思春は思わなかったの？」

「……私も興味は有ります」

「すっごーい、ねえ穩見てた？」

「はい、武勇に優れているとは聞いていましたがまさかあれほどとは」

「シャオも曹犬様と手合わせ……うん、指導してもらいたい！」

「曹犬様は優しいお方のですし、頼んでみてはいかががでしょうか。私は涼州のお話を聞いてみたいですな」

「希代の名将だもんね！」

孫家との顔合わせをしただけで、ぼちの化けの皮が剥がれるフラグが此処彼処で乱立してしまった。尚、孫策を遥かに上回る武勇を見せた事になってしまった事により、孫家の方々のぼちに対する好感度が急上昇してしまいました。ちよつとでいいから代わってくれ。

第二十三話・最短記録

聖人とか呼ばれてるらしいわん公が孫家から夕食の招待を受けてほいほい釣られて行つた。飯食わせてやると言われたら異民族の地にもほいほい釣られちゃうからね。この謀略だらけの国でなんで死んでないんですかねこのわん公は。

「それでは曹犬様が先陣を切り一人で千程の兵を薙ぎ倒して、烏丸の本陣まで乗り込んで一騎討ちの末、丘力居を倒した後に手を差し伸べて一緒に酒を呑んだという話は嘘なのですか？」

その問いをわん公にお酌をしながら投げ掛けたのは孫権仲謀。恋姫のメインヒロイン（作者の中で）にして巨乳でエロい服着てるくせに普段は大人しく礼儀正しい上に、姉に憧れて努力と苦悩を重ねている超可愛い娘です。更に声も最高どす。わん公、いくら払えばその席替わってくれますか？ 幽州の話が大袈裟になつてる事なんてどうでもいいから蓮華からのお酌替わってくれませんか？

「そんな事してないからなあ」

「で、では事実はどうなのですか？」

「ん？ 戦場のご真ん中で、一対一で丘力居と酒を飲んでただけだけど？」

「戦場のご真ん中でお一人で……、あの、いくら曹犬様が武勇に優れているからと言っても怖くはなかったのですか？」

「いや別に……（二日酔いでそれどころじゃなかったし）」

「曹犬様なら襲撃されても打ち払う事が出来るからでしょうね。お姉様ならともかく私ではさすがに……」

「いや酒瓶と杯しか持ってなかったから無理じゃないかな」

「で、では丸腰で烏丸の元にお一人で行かれたのですか!？」

「そうだけど？」

わん公の話を聞いて開いた口が塞がらず驚き固まってしまった孫権。周りで話を聞いていた孫家一同皆固まっている。孫策以上の武勇もあれば力でねじ伏せるのも可能かと皆納得していたのに、この話はそれぞれの理解が追いついていないのだ。お酌してくれてる時の孫権のふともとか絶対まぶしいだろうなあ。硬直から脱した周瑜が横から口を挟む。

「では烏丸とはどうやって話をつけたのですか？」

「いやー呑んでたら食糧が無いから幽州から奪うしかないとか言ってたからさ、じゃあ食糧足りればいいよねって話になって」

「それで例のソバの……。なるほど、魚を与えるより魚の釣り方を授けた訳ですか。本来であれば家で代々伝えていくべき知識、知識というのは宝です。それを異民族などに……。抵抗はありませんでしたか？」

「いや別に……（なんで抵抗あるんだ？）」

「……しかしよくその話を烏丸は飲みましたね。烏丸からすれば本当に食糧として取れるか分からないというのに」

「収穫まで付き合ったからね」

「農民を派遣したのですか？」

「いや、俺収穫までの間は烏丸の家で暮らしてたんだ」

「それは……曹犬様も、曹犬様のお付きの方も優秀でしょうがあまりに危険かと」

「一人で行ったけど？」

「……。」

周瑜が黙ってしまった。わん公と話していると常識ってなんだっけ状態になるのもしょうがないと思う。人はそれこそ夢のような、自身の常識から逸脱した話を聞くと否定から入ってしまうという。だから全部わん公が悪い。

「事実と噂がかけ離れておるが、事実のほうがよっぽど荒唐無稽じゃな。事実が信じられなくて、まだ有り得そうな噂のほうが広まるのは無理もない」

そう言いながら静かに杯を傾けるのは孫家の宿将、黄蓋公覆。誰がなんと言おうが呉の中で二番目に作者は祭さんが好きです。

「ところで曹犬様、わしにも今度一手指南願いたいのだが」

「あー、それなら恋……呂布が相手するから。恋、いい？（にもってどういう事？加齢でぼけてる？）」

わん公のくっそ失礼な内心は置いといて、静かにわん公の後ろに控えていた呂布が無言で頷いた。無言で呂布が後ろに控えてる為か、わん公は何故か少し緊張している。孫権の谷間やふとももに如何わしい視線を投げる事が出来ず、ひたすら孫権と話す際は孫権の目をじっと見つめながら話す事となっている。呂布に威圧されないといけないなら替わらなくても大丈夫です。

何故わん公はプレッシャーを掛けられているのか。呂布の野生の勘が告げている。孫権と一緒に危険だと。ぼちを獲られてしまうかも知れないと。皆さんお気付きの通り、孫権はわん公の好みど真ん中ストライクだし、孫家はほぼ全員巨乳祭りだし、お猫様大好き忍者だって視力悪い軍師だって鈴の音ちゃりんちゃりんの人だって周りがでかいだけで普通にあるし最高だよ。末っ娘？ 声大好きだよ！

「ほう、まずは呂布殿からか」

黄蓋はまず、と言ったが残念。わん公に出番は回らない。危険を感じてる呂布が本気を出すからです。どうか死なないで下さい祭さん。ここは赤壁じゃないです。

「あ、じゃあ私もー！」

そしてバトルジャンキーな長女も手を挙げる。いやそこは大陸屈指のバグった勘で回避しとけやと思うが、原作でも呂布と戦いたくしょうがなかったから仕方ないね。

「恋、いい？」

わん公の問いにまた無言で呂布は頷いた。呂布対孫策、金取れると思うわ。大晦日でやったら良いと思うよ。幽州の件に続き涼州や洛陽での話を次々に聞かれ事実

を包み隠さずわん公が話すと、大体噂より事実のほうが頭おかしい事になっていて驚きを隠せない孫家一同と、わん公が真名を交換したのはなんと初対面からたったの三日後の事だった。これに驚いたのは呂布は勿論、袁術である。袁術はわん公がいない所で孫家に言った。

「良いか、ぼち兄様の正室は麗羽姉様なのじゃ！ そちらは望んでも側室じゃかな！」

この一言によりわん公がいない所で、勝手に望めば漢王朝の驍騎將軍の側室に成れる事が決定した。姉が知ったら怒ると思うよ。そして孫家の血が勿体無いと思います。しかし酒宴でお互いにじっと目を見続けたわん公と孫権は端から見れば良い雰囲気に見えたであろう。孫策は孫権を嫁がせる気満々である。政略的にもこれ以上ないくらい繋がりが出来る優良物件である。でも本人がカス以下だよ。孫権とかほんと勿体無いよ。ソーメンでも嫁がせとけばいいよ。

この世界なら婿入りが普通だと思うが嫁入りとか婿入りとか細かい事を気にしてはいけない。

あ、ついでに無表情ではあるが真名の件で嫉妬した呂布は孫策と黄蓋を一撃で倒

しました。そしてわん公からピタリとくっついて離れなくなりました。普段ずっと腕組んでます。寝る時もピタリとくっついて離れません。

キュピーン

変態姉「この感じ！ ぼちの貞操の危機の予感がするわ！」
姉がニュータイプに目覚めました丸

第二十四話・迷子犬探してます

「いーやーじゃ！ 久しぶりに会ったのにもうちよつといてもいいと思うのじゃ！ …… ぼち兄様、わらわが嫌いかえ？」

「俺が美羽ちゃんの事嫌いな訳ないよ」

「だったらもうちよつとわらわと遊んでたも！」

「また来るから、ね？」

二ヶ月程無駄飯食らい、じゃない滞在した袁術の地を離れ袁紹の元に向かうと告げたぼちに袁術が珍しく駄々を捏ねていた。あらあらと笑顔で見守る張勳にぼちが目線で助けてと言っても張勳は微笑むだけである。わがまま言う美羽様可愛いくらいにしか思っていないから仕方ないね。

「絶対！ 絶対じゃからの！」

「うん、またね」

二ヶ月の間に孫家と仲良くなったぼちの描写は悔しいからカットするが、呂布にしこたま鍛えられた孫家の武将の武力が上昇したり、孫子について周瑜や陸遜から

問われ、姉が注釈つけた孫子をうろ覚えで答えてなるほどさすがと感心されたり、孫家の末っ娘の「大きくなったらお嫁さんになる！」宣言に対して軽くいよいよと返してしまったり次女としょっちゅう飯食べに行ったり、長女が既成事実作ってしまえと閨に忍び込んだり色々な事があったが、呂布の鉄壁ガードによりぼちはちゃんと童貞のままです。呂布の存在がある限り安心だね！

まあ色々な事があったのは間違いないがようやく更なる無駄飯食らいをする為にぼちは袁術の地を旅立ち袁紹の元に向かった。筈なのだが何故か樂進、李典、于禁のいる町にたどり着いて色々あって三人を加え旅立った。そしてここから何故か袁紹の地に辿り着かず各地でまるで水戸黄門のような活躍を残し後の世で「曹犬世直し行脚」と呼ばれる旅が始まろうとしていた。そして袁術の元を出て一年、ぼち達一向は大陸の何処からも噂が聞こえなくなった。

「おーっほっほっほ！ おーみこーしワッショイ！ おーみこーしワッショイ！」

と言って街中を御輿に乗り爆走したり、無駄に兵士の装備を金ピカにしたりする袁紹さんはこの世界にはいない。あんな派手な喧嘩御輿みたいなものは当然作って

ないし、兵士の装備は品質は大陸最高クラスではあるが、見た目は派手というより質実剛健、見た目より機能性に金が使われている。城内も来客を通す場所や玉座はそれこそ見る人が見れば唸る絢爛さがあるが、それらも必要と思われる箇所のみで袁紹自身が使っている執務室も使っているものこそ最高の品質のものではあるが、それは部下が自分より上の物が使えなくなならないように配慮してあるだけで無駄な金使いがほとんど無い。

砂漠にオアシスを掘ろうとすれば人手が必要となり、そこで人が生きていく為には飲食が必要になり、衣食住全ての需要と供給が生まれる事が分かっている袁紹は積極的にインフラ整備を行い仕事を作り、仕事が無い民に優先して仕事を与え金の流れを廻した。

この基本方針を元に動いているのが田豊元コウとネコ耳フード荀彧文若の両軍師である。ネコ耳、袁紹が正しい意見をちゃんと聞いてくれる人なので出ていかなかった模様。二人の献策を袁紹が色付けする事が多い。献策に色付けされる事に関して両軍師は納得して受け入れている。それは例え名家の生まれの両者であっても金の使い方にしても、更に視点や物事を捉える規格というものが袁紹が上に行く事

が多いからである。

例えば川の氾濫を押さえる堤防を作る工事をしたいと献策をする。ならば川沿いに丘を作り桜を植え桜並木通りを作り、人通りを増やせば人通りで道も丘も自然と固まる。噂が人と呼ばび春になれば大陸中から人が集まる大陸屈指の桜の名所にするようにとの指示となり袁紹から帰ってくるのだ。勿論、一度袁紹からGOサインが出れば大陸屈指の賢者である二人が完璧に纏め上げる。人が増え続け発展途上である曹操の地や幼い君主を皆で支え笑顔溢れる袁術の地、人も豊富で、民優先で大陸屈指の資金を潤沢に使い政を行う袁紹。そして三ヶ所とも一つの共通の絆で結ばれている。もう他の所の出番は無いと思うわ。

「なあ斗詩、麗羽様もしかして機嫌悪くないか？」

「文ちゃん、もしかしくなくても麗羽様機嫌悪いよ」

「……やっぱりぼち様の件？」

「うん、まだ見つからないみたい」

ぼち、袁術の地を出て袁紹の元へ行くと言って既にこの時二年が経過していた。

「桂花」

「は。大陸中に人を放ち探してはいるのですがまだ曹犬様の足取りは掴めてはいません。曹犬様程の人、何処かしらにいらっしゃれば噂くらいは立つ筈なのにこれだけ探して見つからないとなると。……洛陽の動きが怪しいとの話もあります」

「ありえませんか。あの何進程度にぼちさんが謀られる訳がありません。どうか何進も間違いなくぼちさんの行方は掴めていません。何故なら未だに反曹犬連合というものを画策、……いや、あれは恐らく余りに反曹犬連合というものが作れなかった為にもはや意地で固執しているだけの愚物ですわ」

「麗羽様。その反曹犬連合の件、目処が立ったみたいです。恐らく近く使者が洛陽から来るかと」

「……まったく、ぼちさんに拘り過ぎて時勢も読めぬようになるとは大將軍が聞いて呆れますわ」

ちなみにぼちが来ると聞いて、ぼちの宿泊用の邸宅を立てぼちの生活の為だけの

用水路を作りぼちの食事専用の畑を作らせたのは袁紹である。この時、初めて袁紹の指示にネコ耳が疑問に思ったのは仕方ないと思う。他の事は優秀なのだがぼちが絡むとぽんこつになる所はぼちの姉と一緒になのだ。

「使者が来たら斬りなさい」

「宜しいのですか？」

「当然ですわ。それと挙兵の準備を。漢王朝を我が物とする逆賊、何進から皇帝をお救いするのが漢の臣としての務め」

「はっ」

建前は尤もではあるが恐らく曹犬様の件が無ければ挙兵まではしなかったであろうなど、ネコ耳がならば袁術や曹操の元へ派兵の協力を要請せねばと考えていた所にとんでもない情報がネコ耳の元へやってきた。

「麗羽様、報告します！ 董卓、馬超の涼州連合が洛陽を強襲した模様です！」

「なんですって！」

ここから後の歴史家が、いや今までの曹犬の行動全部信じてても流石にこれは盛り

すぎだろと言われる戦いが始まってしまふのであった。

←以下駄文

完結見えてきた。犬↓猫↓？ ぼちの最終進化を当てれる人、凄いと思います。
ヒントは人↓聖人君子↓？ です。

※完結した後書くか悩んでいる物をいくつか挙げてましたが、指摘を頂いた為、活動報告に移します。

第二十五話・犬、猿になる

「月、何進が城外に陣を敷いたわ」

「さすがに何進さんも王都洛陽での籠城は避けたみたいだね」

「当然でしょ。それこそそんな事しちゃったら逆賊の汚名拭えなくなるわ」

「うん、詠ちゃんの読み通り」

洛陽城外に布陣した何進軍と対峙するは董卓、馬超の涼州連合である。流石に皇帝のいる洛陽に籠城する訳にはいかず、荒野にて涼州の騎馬軍団と戦わなければならないとなった何進。数は同数程度、どちらも数万の兵ではあるが、片や対異民族で最前線で鍛え上げられた騎馬軍団。片や常勝無敗であったぼちに頼りきりだった挙げ句、その常勝軍団がすっぱりいなくなってしまうた何進軍。漢王朝の武官最高位である大將軍とかいう肩書きだけで勝負になる訳がない。

「……やはり舌戦には出てこないようね」

「詠ちゃん、抜け道は全部塞いであるんだよね」

「勿論、洛陽からの隠し通路は事前に全部調べてあるからこの隙に何進が逃げる事なんてないわ。鼠一匹通さないんだから」

「じゃあ後はいつも通り——」

董卓と賈クが相手の布陣を眺めながら、後は鎧袖一触、しかし油断はしないようにと話し合いを進めている所に凶報が飛び込む。慌てて馬を走らせ知らせに來たのは顔を蒼白させた馬岱である。

「急ぎだから馬上から失礼するね、後方より砂塵あり、数……十万や二十万を遙かに超えるって！」

「なんですって！　今の何進にそんな軍勢が動かせる訳……」

「詠ちゃん、落ち着いて。旗印は分かれますか？」

「旗は上がってないよ、でもどこから分かる。私達不在の涼州を抜けて五胡が連合で！」

「ッ！」

「数は百万に下らない、迎え討たない！」

「……詠ちゃん、正面の何進軍に休戦を要請。共に五胡を迎え撃つよ」

「無茶よ！ こっちは何進の所と合わせても二十万にも届かないわ！ 野戦で五倍以上の敵を迎え撃つなんて！ 大体馬家とならともかく何進の所と連携なんて取れっこないわ！」

「それでも！ 背後が洛陽なら逃げられない。分かるでしょ詠ちゃん」

「……くっ！ 誰か、早馬を何進の所に……陣の構築が異常に早い!？」

漢王朝滅亡。誰もがそう思ったと思う。五胡側以外。

「あれー？ なんで軍が洛陽囲んどるん？」

「そんなの知らないのー。真桜ちゃん、もしかして敵だと思われてたりして」

「まあ普通に考えたらそうだろうな。これでも付いていきたいと言った人間を半分減らしたんだが」

「やっぱそうやんなー。百万も異民族来たら攻めて来たって普通思うよなー。ぽち様が付いて行きたいって言った人らに全部『いいよー』で返すからこんな事にー」

「真桜！　ぽち様を悪く言うな！」

「い、言うてへんよ、凧、落ち着いて！」

「凧ちゃんぽち様にベタ惚れなのー」

「ち、違う！　あの人は素晴らしい方だ！　尊敬しているだけだ！」

「あー、凧ちゃん顔真っ赤なのー」

「沙く和く！」

何故か五胡を廻っていたぽち達一向。そして各地で食糧問題を解決したり、長年に渡る民族間の対立をあっさり取り持って解決したりを繰り返す事僅か一年。五胡全てで代表扱いされて面倒臭いと思ったぽちは「じゃあ俺、漢に帰るから」と一言で出ていこうとした結果、皆付いてこようとして今に至る。多分一番苦労したのは三羽鳥である。

「……なあ、あっちの軍、臨戦態勢に入ってるん？」

「そ、それはまずいの！」

「真桜、牙門旗を掲げろ！」

「よっしゃ！」

ウィーンとこの時代に似つかわしくない音を立てながら、全長三十メートル程の巨大な旗が掲げられた。

「どーや！ こんな時の為にうちが作った、全自動牙門旗掲げ装置や！」

「下で二十人くらいが手巻きして全自動……？」

「風！、細かい事気にしたらあかん！」

全自動（手動）により掲げられた牙門旗、黒地に金にて犬の文字。いやそこは曹にしとけよと思うが、この旗印こそ漢にて常勝無敗を誇り涼州を救った曹芝犬の旗印である。五胡の中からまさかの牙門旗が掲げられた事で涼州軍も何進軍も動揺が拡がりまくりである。

「ぼち様」

三羽鳥の元へ牧場王に跨がり呂布を伴いぼちがやってきた。ちなみに牧場王は全速力を出すとどの馬も追い付けないが、マスタング走法を始めてしまうので絶対走らせてはいけない。ぼちはその乗り心地に一度気絶した事がある。よく振り落とさ

れなかったな。ロデオの才能あるんじゃないだろうか。

「ちよつと恋と行ってくるから留守番宜しく」

「は！」

楽進の元気な返事を聞いて、ぼちは呂布を伴い牧場王をゆつたりと進める。急がないだけなんだけどね。ゆつたりと五胡から出てきたぼちに気付いた董卓と馬超は急ぎぼちの元へ馬を走らせた。その様子を見てぼちは羨ましいと思った。馬、走らせれないからね。

「ぼち様、これは一体！」

馬超が叫ぶ。

「大丈夫、五胡はもう敵じゃないよ。皆もう仲間だから」

その一言に絶句する董卓と馬超。長年漢民族と争ってきた五胡、全てを僅かの間に纏め上げ引き連れ凱旋してきたというのだ。目の前の事実とあり得ないという思考が喧嘩をして理解が追い付かない。

「何進に久しぶりに会うから通ってもいい？」

「……はい、皆さん、道を開けて下さい！」

「おい、ぼち様が通るぞ！ 散開しろ！」

まるで旧友に会いに来たかのような口振りのぼちに困惑しながらも、董卓と馬超は涼州軍を二つに分けた。人の海が割れ、その中をゆっくりと歩を進めるぼちに困惑しながらも付き従う兩名。ぼちの命を奪う号令を掛けようとした何進に対し、恩義に報いる為に兵を動かした兩名はぼちの内心を計りかねていた。そりゃあそうだろう。ぼちは時間大分たったし、反曹犬連合なんてもう流れただろくらいにしか思っていないから事実を知らないのだから。無知は強い。なので本当に旧友に会いに来たくらいの感覚で五胡全部うちで面倒見るからと報告しに来ただけなのである。漢王朝の常勝軍と五胡の軍勢全てを支配下に置くとかどういいう事が多分分かってないのは本人だけだろうね。

ともかくまるでモーゼのように割れた人の海をゆっくり歩を進めると、何進軍もその異様な雰囲気には圧倒されたのか自然と軍が二つに割れていった。何進の元まで一直線にある。元々魅力バグによりぼちに陥落されている洛陽の方々が目の前に本人が現れたら戦意喪失してしまうのも仕方ないのかも知れない。白馬に乗ったぼちはまるで絵画のように見えたであろう。見た目だけはいいいからね。神々しい煌

めきを放ちながら、遂にぼちは何進の元へたどり着いた。何進の隣には妹、何太后までいる。

「よくその顔を私の前に出せたなぼち！」

いきなり何進に怒鳴られ困惑するぼち。

「黙って下さい何進さん。漢王朝を我が物とし、自身の私物化の象徴としてぼち様の命を奪わんとするとはそれでも貴女は漢の臣でしょうか。貴女は漢を私物化しようとする逆賊です！」

「黙れ！ 涼州の田舎者風情が何を偉そうに！」

「なんだあー？ その田舎者に異民族との防波堤させて自分は何もせず引きこもってる大將軍様が偉そうに！」

「ふん、馬臭い涼州の——」

「あ、ぼち君久しぶりー」

「おー瑞姫元氣？」

「うん、私は元気だけど姉様が暴走しちゃってねえ」

「そっかー大変だなー」

冷静な口調ながらも何進を非難する董卓と喧嘩口調の馬超に対して思いつき偉そうに罵倒する何進と、久しぶりに駅で会った同級生くらいのノリで話しているばかりと何太后。温度差が激しいね。罵り合う三人を見ながらぼちが何太后に聞く。

「これどうしょっか」

「……姉様がやりすぎて取り返しがつかなくなってるのは事実よ。ねえぼち君、姉様助けてあげられない？」

「ふむ」

状況がまったく分からないが、どうやら何太后は何進を助けて欲しいらしいと理解したぼちは今にも斬りかからんとする馬超の槍に手を添えて止め、三人の中に割って入った。そしてぼちは内心で良く分からないがしょうがないよねと考えながら口を開いた。

「年増婆」

「なっ——」

ぼちの一言に何進のDMスイッチが入る。そこから怒濤の罵倒を捲し立てる。ぼちらしくない一面に驚愕したのは董卓と馬超であるが、どんどん様子がおかしくなる何進を見て察した。顔が紅潮し、息を荒げ、身を悶えさせ地に堕ちた何進に口撃を緩めないぼち。そして何進は、遂に大勢の前で絶頂に至った。これ殺してあげたほうがマシだったんじゃないかな。失神した何進を担いでと恋に頼むも色んな液が駄々漏れしていた何進を担ぐのを恋が嫌がった為、ぼちは何進を何進の旗で巻いて牧場王に乗せた。ぼちも触りたくなかったらしい。

「待って下さい！ 何進は！」

董卓がぼちを止める。そりゃあそうだろう。

「まあ、いいんじゃない？ 許してやってよ」

よく原因は分からないがとりあえず許してやってよとぼちは言った。漢王朝の大將軍から逆賊の汚名を着せられ命を狙われた男が許すと言うのだ。一步間違えば歴史に汚名が刻まれていたというのに、それでもぼちが許すと言ったのだ。そのやり取りを目撃していた誰かが言った。

「大聖者様だ……」

「まさに曹犬様は天にも齊（等）しい大聖者だ！」

この日よりぼちの異名は齊天大聖となり、人々から大聖様と呼ばれる事となる。それ西遊記の孫悟空のやつやん。犬なのに猿になった。天界に殴り込みそう。ていうか天は陛下を指す言葉の筈なのに誰もがぼちを齊天大聖と言ってまったく不敬に思わない時点で、漢王朝からこの犬猿野郎の時代に移る事を皆が自然と認識していたのは言うまでもない。

何進はしょうがないのでぼちがそのまま引き取りました。そして何太后も何故か着いてきました。後、大変そうなので洛陽は董卓と馬超に任せてさっさとぼち達は離れてとりあえず姉のいる所へ帰っていきました。

第二十六話・唸る袁家の豪運

桃太郎という話の中で犬、猿、雉を共に桃太郎が鬼退治に行ったというのはとても有名な話である。しかし何故この三匹なのかというのはそこまで有名ではないと思うので一応話をしておく事にする。中国より伝わる陰陽五行説と風水が関わってくるのだが、風水における鬼門が北東、裏鬼門が南西。そして十二支を円で十二等分しその裏鬼門側に属するのが、犬、猿、酉である。これを聞いた時に、あれ？

十二支の酉って鶏じゃねえの？ という疑問がふわっと湧いたりするのだが、犬、猿、鶏よりやっぱり雉のほうが絵になるし強そうだからいいかと作者がそこで思考を放棄したのは内緒である。

ともかく一人で犬兼猿をやっているぼち、そして鳥の如く舞う飛將軍、呂布。そう、この話を今まで読んでくれた聡明な読者様ならばお気づきであろう。別に鬼なんて出てこないし桃太郎なんてこの話に何の関係もないと言う事に。

この日、ぼちはなんとも言えない妙な予感で朝からそわそわしていた。早起きは三文の徳と言うが、深夜に寝苦しくて目が覚めてしまったぼちは全裸で恋が抱きついてぼちの胸を枕にしてすうすう寝ている事に気が付いた。気持ち良さそうに寝ているので動くに動けず、しかしこんな興奮しない訳もなく、ドキドキが止まらなくなっていた所に、恋がぼちの心音の変化で目を覚ました。その後なんやかんやあったが恋と閨を共にするのは、ぼちが旅の途中で夜襲を受けて以来護衛を兼ねての事であると言っておく。護衛を兼ねて。何に兼ねてるんですかね？

その朝、ぼちが茶を入れたら茶柱が立った。というか湯呑みが茶柱で埋まった。そして天幕から出ると白蛇の大群が全身に巻き付いた。その後てんとう虫が大挙してぼちに止まり全身を覆い尽くし、どさっと天幕が崩壊する音がしたので振り替えると、天幕に燕が異常にデカイ巣をいくつも作っていた。更にふと地面を見ると生えている草が全部四ツ葉のクローバーだったりしたので今日はなんか凄い事がありそうだとぼちは思った。幸運の予兆といわれる出来事が大量発生しても、ていうか寧ろ不幸な出来事が大量発生してその程度の認識しかしてないのはさすがぼちと言っていると思う。もうちょっとでいいから頭を使おう。

「ぼち様、前方に袁の旗の軍勢がいます」

楽進が声を上げた。袁紹は洛陽襲撃の報を受けて急ぎ軍を纏め洛陽に進軍中であつた。まさか一日で、しかも犠牲が何進が社会的に死んだくらいしかなかったなんてさすがに思うまい。いや何進的には重傷だけだね。袁と聞いてぼちが牧場王の歩を進めた。袁紹軍も犬の旗印に気付き袁紹が軍から出てきた。

「お久しぶりですわ、ぼちさん。いろいろ積もる話もありますが……とりあえずこの軍勢は一体なんですか？」

袁紹が当然の疑問を口にしたのでぼちがざっくり説明した。五胡全部仲間にして付いてきたがった人を連れてきたと。洛陽の動乱は話つけてきたから大丈夫。人が足りなさうだったから董卓と馬超に任せてきたと。

「……ぼちさんが洛陽をと声が上がったのでは？」

「面倒だから任せてきた」

「……そうですね」

曹柴犬は大陸最強の軍勢を持ち、外敵である五胡を手中に納めて首都洛陽を委ね

られたにも関わらず拒否したという事実。これは漢王朝が終焉を迎え、新たな時代が始まる事に他ならないと拒否した本人以外この国の全員が気付いている事である。この国は、この男の発言で血の海に染まる事だって簡単にあり得るのだ。本人は気付いてないしそんな事しないけど。袁紹はぼちの目をまっすぐ見て言った。

「ぼちさん」

「はい」

「私と子供を作りましょう」

「はい……はい？」

全盛期の藤川球児ばりのど真ん中火の玉ストレートを投げた袁紹が更に言葉を繋ぐ。

「ぼちさん」

「はい」

「……私では嫌ですか？」

「宜しく願います」

元々、袁家のヒモになろうとしていた男である。そして自分の立場がまったく分

かっっていない男である。ある意味初志貫徹をした男、ぼちは袁紹を本妻として迎える事となる。勿論、口約束の側室が大量にいたりするのだが、この本妻の器の大きさはぼちのお猪口並みの器とは格が違うので笑って受け入れる事になる。ぼちを初見でこの人しかないと思ひつときた袁紹、最高のタイミングでぼちを落とす。好み云々の話は何処に行ったかって？ 幼なじみ属性に見た目が好み程度で勝てるとは思わないね。ともかく袁家の豪運ここに極まり。そして大陸最高の血筋にして大陸最大勢力の袁家の当主を嫁に迎えたぼちはもうこれ後適当にしてもゴールしちゃうんじゃないかなって思うけど、そもそも敵なんじゃないから問題ねえな。

異民族百万人と幼なじみを嫁として連れて帰ってきたぼちに対し、姉が「これは……胡蝶の夢かしら？」と訳がわからない事を言い始めたが、そもそも出ていった原因お前だから諦めろ曹操。後、夏侯惇が「ぼち様から童貞の臭いが消えた……？」とか言ってた。ちなみに異民族百万人は「想定範囲内だしゅ。はわわ、囃んじやった」と言った孔明が余裕でなんとかしたらしい。

次回作について頂いた意見で、お前炎上するからアンチは辞めろ、な？という最もな意見をいくつか頂きました。ほんとその通りだと思います。そしてエタったアレを限定解除してとの意見もいくつか。エタったアレ、炎上した部分省いて再構成して書き直し完結させようか考え中です。あれに蒼天の覇王のキャラ出してもいい気がする。完結までストーリー作れたら書こうかなと。

また炎上して途中で辞めるんやろって？

あ、あの子のポップとこれもちゃんと完結させれそうだから（震え声

第二十七話・日向ぼっこ式

「麗羽、洛陽から袁家を通して打診が有ったというのは本当なの？」

「ええ、随分洛陽は混乱しているようですわね」

庭先にて優雅にティータイムを取っているのは曹操と袁紹であった。

「どうせぼちは断ったのでしょうか？」

「勿論、『特権なんかいらぬ。美味しいご飯食べられれば幸せだから』だそうですわ。ふふ、我が夫の器の大きさは計り知れせんわ」

「ええ、さすが我が弟ね」

「ふふふふふ」

「おーっほっほっほ」

洛陽にて政を任された董卓は、政争に関わらなかった。両陛下の確保も行わず、政争に関わらない代わりに民に対する政治に口を出すなど首筋に鎌を押し付けて笑顔で政治屋を説得した。董卓にとっての王とは既に曹柴犬である。そして今まで何

進と何太后の庇護にあった両陛下は魑魅魍魎共の格好の餌となった。幼き両陛下は堪えきれず董卓に泣きついた。が、優しい笑顔の董卓は非情であった。

「お辛いのであれば、同じ劉姓である益州の劉璋様を頼られては如何でしょうか？」

「

辛いなら田舎にでも引っ込んでろという不敬極まりない発言である。素っ首落とされてもおかしくない発言であったが現実、今の洛陽に笑顔で首筋に躊躇無く鎌を押し付けた董卓に対抗出来る人間などおらず、更に言えば董卓の後ろに見える曹柴犬の機嫌を伺っている政治屋共が董卓に手を出せる筈が無く、董卓はこの件に關して突き放し知らぬ存ぜぬを貫き通した。その結果、陛下が口にしたのは禅讓である。曹柴犬にその位を明け渡すと言い出したのだ。そして我らがぼち、それを拒否。「あの方らしいですね」と董卓は笑ったが、お陰で洛陽は大混乱である。

「……で、実際どうなの？」

「どうとは？」

「ぼちの考えよ」

「ふふっ」

「麗羽？」

「この国は新しくなりますわ。文字通り、今までに無い新しい形に生まれ変わりますわ」

「どういう事よ」

実際、禅譲の話が来た際、袁紹はぼちを説得するつもりであった。最悪形だけでもと言うつもりであった。政争が続けばそのまま洛陽が火に包まれてもなんらおかしくはない。それはぼちだって望まぬ筈だからと。しかし、ぼちは面倒なので適当にのらりくらりと避けていたつもりだった会話が、袁紹の心を打った。

「王にはならないそうですわ。特権なんていらぬ。もっと言えば王なんていらぬいと。民が村の中から優秀な者を長として村の代表にしている。異民族なんかでもそんな事は良くある事。なら国の運営も優秀な人間が代表してやればいい。その代表も民が選べばいいと」

「……へえ？」

「州もそのようにすれば良いと言っていましたわ。王ではなく、民主導でと」

「麗羽は、袁家としてその話を認められるというの?」

「現世代はぼちさんのお陰で一枚岩になれると思います。ですがその遥か先をぼちさんは見てらっしゃいます。殿方に夢を語られたらその夢を追ってみたいかなるではありませんか」

「ぼちの夢?」

「千年先も人々が笑って暮らせる泰平の世」

「千年……ふふっ、これが笑わずしていられようか。私が見ようとしていた未来は百年先。それを、我が弟は遥か先の未来まで案じようとしていたなんて」

「先ほど言った民主導というのは法の整備こそが要ですわ。今、朱里と雛里、桂花を主としてまずその礎となる根幹の部分に着手している所です。勿論、華琳さんも手伝って下さるのでしょうか?」

「当たり前でしょう。千年国家の根幹となる大事業に携われるだなんて、後の人間の誰もが羨む誉れだわ」

「ええ、皆目を輝かせて取り組んでいますわ。……王権などいらない。こんな事が言える人間、如何に大陸が広かろうとまさしくぼちさんしかない、だからこそ生

まれる発想ですわね」

「さすが我が弟ね」

「さすが我が夫ですわ」

「ふふふふふ」

「おーっほっほっほ」

本当にぼちがそんな事言ったのかは袁紹の頭の中にしかないが間違いなく都合良く解釈された結果、この国はとんでもない方向に向かおうとしていた。そしてそんなぼちはというと。

「ぼっちと日向ぼっこ久しぶりっすねー」

「だねー」

華崙とのんびり日向ぼっこしていたりする。勿論無理矢理であつたが柳琳や栄華も一緒である。

「あつ、そうだぼっちにお願いがあるっす！」

「何？」

「おっぱい揉んで欲しいっす！」

「は？」

「ちよ、姉さん何言ってるの！」

「だってー、柳琳だって栄華だっておっぱい大きくてずるいっす。ぽっちはおっぱい大きいほうが好きなんすよね？ おっぱいは揉むと大きくなるって聞いたっす！」

「ちよっとそこでわたくしを巻き込まないでくれます!？」

「落ち着いて華崙、華琳姉を見るんだ。春姉や秋姉が夜な夜な揉んでいる筈なのに華琳姉は大きくない。だからそれは迷信だ」

「あー、きつとそれは男の人が揉まないと効果無いて事っすね！」

「姉さん！」

「だっておっぱい大きくなってぽっちにお嫁さんにしてもらいたいっす」

「いやそこはおっぱい関係無いというか」

「じゃあ私はお嫁さんは駄目っすか？」

「華崙がいいならいいけど……」

「わ、私はどうなんですか！」

おっぱいからのまさかの流れに困惑しながらもぼちが答えると横から柳琳が食い付いてきた。

「柳琳、落ち着いて」

「姉さんが良くても私は駄目ですか!？」

「いやむしろぼっちこいなんだけど……なんだこの流れ」

更にぼちが困惑しているとぼちの袖をくいくいと引っ張り、俯き顔を赤らめながら栄華が言う。

「わ、わたくしは駄目ですか」

「駄目な訳無いよ。でも何というかいのこの流れで」

曹操と袁紹が国の行く末の話をしている中、屋根の上では遠縁の親戚筋の綺麗所を纏めて頂いた糞野郎がいるらしい。

「あ、そうでしたわ。これ華琳さんに返しておきますわ」

「何よそれ」

「ぼちさんの部屋に新しく置いてあった姉系貧乳物の艶本ですわ」

「」

「無駄な努力でしたわね」

「」

これはぼちのでは無いなと思った分を曹操に返した袁紹。ぼちが隠していたその他艶本の分は見て見ぬ振りをしていた。まあ別に艶本をぼちが読んでもうが、側室をどれだけ迎えようが笑って受け入れる女、袁紹の懷は海より深い。

第二十八話・愛情の種類

泰平道という新興宗教がある。三国志の時期の中華の人口はおよそ五千万人弱と言われているが、この泰平道の信者の数は一千万人を超える超巨大宗教となっている。若い世代や軍事、農業に関わる者が挙って集うその宗教の教祖の名を劉備、崇めるは曹柴犬である。劉備、まだぼち生きてるよ？

「あ、ぼち様こっちこっちー！」

劉備に手招きされぼちが訪れたのは泰平道本部。ぶっちゃけ洛陽の城よりデカく豪華である。これ全部寄付金で出来たとかそれまこと？　そしてその城を見てぼちが一言。

「悪趣味」

「解体！　すぐに解体して！」

ぼちの一言に反応した劉備の指示で即刻解体され、装飾は売り払われその資金は民への炊き出しに使われた。ぼちが食欲以外興味を示さないのを知っていた筈の劉備、悪手を打つ。まあぶっちゃけ資金が集まり過ぎて使い方が分からなくなった

元々庶民の出である劉備だから仕方ないかも知れない。勿論、民への炊き出しや、農業指導等も無料で各地で行っていたが使っても使っても金子が集まってくるのだ。

「……あははー。失敗しちゃった」

「ていうかこれ何？」

「ぼち様の素晴らしさを皆に広場で定期的に話してたら、皆協力してくれていつの間にかこんな事になっちゃった」

そう、劉備はぼちの話を広場でしていただけである。大袈裟だったりしたがただそれだけである。それが大規模になってきて気付いた曹操が、さすがに方向性をコントロールせねばまずいと判断した。そこから曹犬軍の面々、主に伏龍鳳雛が裏で色々動いた結果、大陸最大宗教の誕生した。ぶっちゃけ劉備本人はよく分かっていない。またお前の仕業か孔明。

「でもねでもね！ 皆ぼち様の話を聞きたがつてるし、話をするときずっと喜んでくれるの！」

ぼちは内心知らんがなと思う。こんな面倒臭そうなものにこの男が関わりあいた

い筈がないのだが、姉から行ってこいと言われ仕方なくやってきたのだ。ぶっちゃけ今一番大陸の火薬庫となっているのがここ泰平道だと思う。ぽちが血迷った事をぼつりとでも洩らせば大陸は血の海に染まるだろう。ていうか血の海に染めれる案件多すぎませんか？ 馬鹿に核ミサイルの発射スイッチ持たせたら駄目だと思ふよ。

「えーっと、とにかく皆の前で話せばいいんだよね？」

「はい！」

にぱーっと人懐っこい笑顔を見せる劉備。その笑顔を見て思わずぽちも笑顔で返す。美男美女、魅力バグと魅力チート。この組み合わせはあかん。

「おっほん！ ぽち様、こちらへ！」

「おう？」

わざとらしい咳き込みをした関羽がぽちを誘導しようとし、その様子を見た張飛と趙雲が煽る。

「にゃははー、愛紗、桃香に嫉妬してるのだ」

「鈴々にすら言われるとは。愛しのぽち様の前でそのような余裕の無い態度では嫌

われてしまうぞ愛紗よ」

「うっうるさいぞ二人共！」

からかわれ顔を真っ赤にして怒鳴る関羽とにやにやしなから煽る張飛と趙雲。それを笑顔で見守る劉備とこの面子は本当に仲が良いなとぼちと思う。

「やれやれ、まあ私はぼち様に貰って頂く予定なので愛紗より余裕があるのは仕方ないか」

妖艶な笑みを浮かべながらつつつと寄り添うように近付いた趙雲が関羽を挑発する。ぼち、えっ何それ初耳と困惑。しかしぼち、低脳故にもしかして約束してたつくと悩み出す。適当に約束してるから悩む羽目になるんだよ。ちなみに趙雲と約束なんてしてない。

「ええー!! 星ちゃんそうなのー!! ねね、ぼち様、私はどうかな!!」

趙雲の言葉にいち早く劉備が食い付いた。あれ、この流れ知ってるぞとぼちは思う。そしてその通り、全員ぼちの嫁となる事になった。多分信者の方々に劉備も嫁になっといったほうが暴走を押さえられると思う。

「麗羽様、あの、美羽様の所の孫家の面々がぼち様の所に約束通り嫁ぎにきた、と言っています」

恐る恐る袁紹に報告したのはネコ耳軍師である。つい先日、劉備、関羽、張飛、趙雲が側室となったばかりである。間違はなく曹犬軍の面々はこのまま皆側室になるだろうと思われる。いくらなんでも節操が無いのではないか、本妻である袁紹を蔑ろにしているのではないかとネコ耳は思う。

「あらそうですか。美羽さんから話は聞いていますわ。では部屋を用意してあげて下さいますか？」

なんでもない事のように言う袁紹にネコ耳は違和感を感じた。

「はっ……、あの、麗羽様。お聞きしても宜しいでしょうか」

「なんですの？」

「その、側室がこうも急に増え続ける事に麗羽様はどうお考えなのかと」

「ぼちさんがいいと言ったのであれば別にいいではありませんか。増やす増やさないはわたくしが関与する事ではありませんし」

「しかしこれでは麗羽様が蔑ろにされてしまっているように感じてしまいます」

「心配して下さいますのね。ありがとうございます。ま、蔑ろにされるというのであればこの麗羽はその程度の人間という事ですわね」

「そんな！」

ネコ耳は袁紹が自身をその程度と言った事に噛みついた。大陸でも有数の富を持ちながら驕らず民の為の治世を敷き配下の者へ事細かく配慮を忘れぬネコ耳の主が自身を卑下するのは認められなかった。

「麗羽様がのように扱われるなど私は許せません！　ぼち様に抗議してきます！」

「ふふっ」

「麗羽様？」

ネコ耳軍師の頭にぼんっと手を乗せ慈愛の表情を浮かべながら袁紹が言う。

「ありがとう桂花。でも大丈夫ですわ」

「しかし……」

「何故ならわたくしが一番ぼちさんを愛していますから」

曹家の従姉妹を除けばぼちに対する感情は敬愛であろう。従姉妹のぼちに対する感情は親愛に近い。ぼちに純愛と慈愛を向けているのは自身ともう一人だけだろうと袁紹は思う。

「まったく、業が深い姉弟ですこと」

「麗羽様？」

「なんでもありませんわ。それよりあの件はどうなっていますか？」

「はっ、大梓は整ったかと」

「では朱里に伝えて下さいな。こちらの準備は整ったと」

「ではいいいよですか」

「ええ、董卓さんにも連絡していますわ。歴史を動かします。桂花。その智謀、思う存分振るいなさい」

「はっ！」

主人公がイチャイチャしてるだけで歴史は進んでいくらしい。

第二十九話・本妻無双

「ぼちさん！」

ぼちが久しぶりに一人で自室で惰眠を貪っていた所に袁紹が扉を激しい勢いで開け怒鳴り込んできた。ぼちは何事だろうと飛び起きる。袁紹の後ろには慌てた様子の徐晃がいた。

「ぼちさん！ 香風さんと最近いつ会話をしましたか！」

「え、昨日だけど？」

「仕事の話以外です！」

「仕事以外で……、あれ、いつだっけ？」

「……あの、麗羽様、シャンは大丈夫なので……あの」

「大丈夫ではないでしょう!? ぼちさん！ 香風さんは貴方をずっと支えてきた大切な方ではないのですか！」

「はい、その通りです」

「それなのに、貴方は香風さんが最近ときおり悲しい顔をされているのに気付いて

いないのですか!」

「え」

「麗羽様、あの、シャンは……」

「香風さん。奥ゆかしいのも美德ですがこういう事はきちんとしなければいけません。ぼちさん、もう一度聞きます。貴方をずっと支えてきた大切な方と最近仕事以外の話をされましたか!」

「……してないです」

「ぼちさん。わたくしが貴方の側室が増えようと今まで何か言った事がありますか?」

「ないです」

「ええ。わたくしはぼちさんの周りの方も貴方なら全員幸せにしていると思います。始めから幾人側室にしようが貴方ならその全員を幸せにする器量があると信じていますもの」

「……あの麗羽様」

「香風さんは黙って下さい」

「……はい」

「ぼちさん！」

「はい」

「今からきちんと香風さんと話をして下さい。それに香風さんだけではありませんわ。ここに帰ってきて、仕事以外の話をされてない方々全員とです。貴方と相手が望むのであればお互いが幸せを享受出来る形をきちんと取って下さい」

「はい。でも麗羽さんは……」

「わたくしに遠慮なんていりませんわ。わたくしがその程度だと思われるほうが心外ですわ」

「麗羽さん、ごめ——」

「ぼちさん、わたくしは謝罪は望みません。感謝ならありがたく受けとりますわ」
「麗羽さん、ありがとう」

「いえ、どういたしまして。では香風さん、きちんとぼちさんと話をされて下さいね？」

「……麗羽様、ありがとう」

「礼には及びませんわ」

袁紹はそれだけ言つてぽちと香風を部屋に残しきつさと出ていった。部屋の外には文醜と顔良が待っていた。

「ひゅー、麗羽様かっこいいー！」

「麗羽様、ご立派でした」

外で話を聞いていた二人が声を掛けた。が、何なら袁紹の様子がおかしい。

「……麗羽様？」

「わたくし、言い過ぎてしまった気がしますわ。必要な事だとは思つたのですが、皆さんならきつと分かつていたような気がします。余計な事を言つて嫌われてしまったかも知れませんわ！」

部屋の中で気丈にぽちを叱つた袁紹とは一転、ぽちの前から離れ急に不安になつたらしい袁紹は気落ちしていた。その様子を見て二人は思った。可愛いと。

「大丈夫ですよ麗羽様。ちゃんとぽち様に麗羽様の気持ちは伝わりましたって！」

「そうですよ麗羽様、ぽち様の器量、信じてるのでしょう？」

「そ、そうですね」

二人に励まされなんとか袁紹も気を持ち直した。

「ふう……、それで二人が来たと言う事は董卓さんから返答がありましたか？」

「はい、陛下と陛下の妹、お二方を益州へ移動させる手筈は整ったとの事でした」

「そうですか。では全てを始める前に後一つ、やっておかねばなりませんわね」

「まだ何かあるんですか？」

「ええ、憂いは断たねばなりませんから」

「華琳さん、失礼しますわ」

袁紹が返事を待たず遠慮なく曹操の私室に入った。突然で驚いた曹操に袁紹はぶしつけに言う。

「あら、華琳さんに会いに来たのにいないのですか」

「なんですって？」

「わたくしの幼なじみの華琳さんは誇り高く凛とした立派な女ですわ。うじうじとした小娘などではありません」

「貴女何を言って……」

「華琳さん、貴女いつまでぼちさんとの事をうやむやにしておくつもりですか」

「——ッ」

「姉弟だから？　言い訳など華琳さんらしくない」

「貴女に何が分かるって言うの！」

「分かりませんわ。わたくしが分かるのは貴女が思いをぶつけた結果の良し悪し程度であなただ姉弟の仲が崩れなどしないという事だけ」

「……麗羽」

「大事の前に片付けられる事は片付けたほうがいい、ただそれだけですわ。貴女なら分かるでしょう。前を見て、前に進みなさい。貴女ならそれが出来る筈です」

「……でも」

「あら、まだ悩むのですか。なら光武帝が言ったとされるこの言葉を貴女に送りましょう。『とにかく頑張れ』」

「絶対嘘でしょうそれ!？」

「ふふ、叫ぶ元氣が出たようで何よりですわ」

「はあ……、まったく。強くなったわね麗羽」

「わたくしは弱い華琳さんなどみたくありませんわね」

「分かったわよ。ちゃんと、ちゃんとするわ」

「では今夜ぼちさんの私室へ行つて話をなさい。他に誰も近付けさせないようにしておきますから。貸し一つ、でいいですわよ？」

「一つ、ねえ。しょうがないわね」

その夜の姉弟の会話は、他の誰も知る所ではない。一つだけ言えるのは、ぼちは夜中姉がぺろしに来るのに気付いていながら寝た振りをしていた程度には姉の感情を受け入れていたという事だけである。ま、夜な夜なぺろされてたらそりゃあ気付くわ。

終話・初代大統領、犬

「ぼち様」

「朱里、どうかした？」

いつになく真剣な表情の孔明に何かあったかなとぼちは首を傾げた。先日、ぼちは袁紹に言われ曹犬軍の主だった將軍達を側室とした。勿論目の前の大陸屈指の幼女軍師もその一人である。但し、ぼちは皆に一つだけ約束している。それは袁紹との間に子が出来、産まれるまでは他の誰とも閨を共にしない事である。まあその辺はおいという朱里の表情を見てぼちも顔付きを真剣な振りをして向かいあう。

「はい、以前より指示を頂いていた法、の基本的な枠組みが出来上がりました」
「ふむ」

ぼちはある。何の話だろうと。袁紹に王になりたくないが為に誤魔化す為に適當言った事など覚えている筈がないのだ。

「そっか。出来たか」

「はい、書簡に纏めていますので後でお目通しをお願いします」

孔明がそう言うと言簡が次々にぼちの執務室に運ばれてきた。部屋の中がどんどん書簡で埋まっていく。その様子にぼちドン引きである。目を通す振りだけでもどれだけ時間かかるんだと思う量が運ばれてきたから仕方ない。

「……大変だったろう」

「いえ、お役目ですから」

ぼちは単純に量の事を嫌みを込めて言ったが、孔明は仕事をやり遂げた事に誇らしげであつた。

「ぼち様。新たな国を主導する新たな政府の長、所謂国家元首を選ぶに辺りぼち様は民主導の形を望まれていましたが今回はどうしても時間が無く、各州の州牧や県令、王朝の將軍の中からの推薦、その中から投票という形で新たな国家元首を選ぶ事になりました」

国家元首って何？ 王みたいなもん？ ふむ、言ってる事が殆んど分からない。ぼちはとりあえず真剣な顔で頷いた。それを孔明は肯定と受け取り話を進める。

「つきましてはぼち様にも推薦をして頂きたいのです」

「推薦……、華琳姉？ 麗羽さん？」

「いえ……お二方とも素晴らしい人物ですが違います」

「じゃあ誰を？」

「はい。その武勇天下に響きこの国一の名将と云われ負ける事を知らず、個人の武に置いては無手にて名高き武将を一騎討ちにて破る。その知略は未来をも見通すと言われ、州を民を救い、誰からも絶大な信頼を集めその方なら間違ひなく国を泰平に導いて下さる、と我ら一同が信じている方を」

ぼちちと思う。何その人凄い。

「……朱里はどう思う？」

「私もその方以外考えられません」

「じゃあ決まりだね」

「……宜しいのですか？」

「朱里がそう言うのなら、それが正しいのだろうさ」

「はい！ ではぼち様は自薦という事にしておきますね！」

「え？ あ、ちょっと待って……」

王にはならないと公言していたぼちの説得を買って出た孔明の罠に引っ掛ったば

ち。選挙権を持つ人間全員からの推薦と自身の自薦で満票を集めた曹犬はこうして初代大統領となった。

曹犬の指示（と言っている袁紹の指示）により伏龍鳳雛を中心に曹操、ネコ耳、盧植、周瑜といった初代犬政権の中心となった賢人達が、曹犬の思想を基本とした（という事になっている）複数の州の集合体である所謂合衆国制の骨組みを千五百年くらい先取りして作り上げた。十三の州と五胡特別区で構成される連邦共和制国家である。それぞれの州は高度な自治権を持っているが、連邦政府の有する権限は非常に強大である。連邦政府は、立法、行政、司法の三権分立制をとるが、その分立の程度が徹底しているのが大きな特徴で、連邦政府の権力が州の権力に優先されるものらしい。

中華合衆国の初代大統領となった曹犬。初仕事は張三姉妹をバックダンサーとして全国を巡るライブツアーだったらしい。

以来千年を超え千八百年続く中華合衆国の初代大統領である、革命の代名詞とさ

れる曹犬と言う人物の逸話は枚挙に遑がないが、その一部だけを挙げる。

その武、音より速い。

民を救う食物の普及に尽力する先見の明がある。

齊天大聖と呼ばれる程の人格者である。

自身より配下を大切にした逸話が多く、現在においても理想の上司の在り方として曹犬の様にあれと言われる。

中華において初めてカレーを食べた。

側室は多かったが、何より本妻を大切にした愛妻家であった。

曹犬に誉めて欲しくてローマ辺りまで涼州軍が攻めてしまい、意図せず世界最大国家となってしまうが、広がり過ぎた領土の統治を不安視し撤退させた（面倒臭かったとの説も在り）

天使の歌声を持ち、死人や毛根さえ生き返った。

泰平道は現在において世界最大の宗教であり、曹犬は農業の神とも武神とも毛髪の神とも言われている。

中華において初めてコーヒーを飲んだ。

中華において初めてナマコを食べた。

中華において初めてイカやタコを食べた。

曹犬は創作上の人物とも複数の人物の逸話とも言われる事が多いが、実在したという証拠も多数残っている。

以下後書き←

最後まで読んで頂いた多数の読者様、感想を書いて下さった皆様、評価をして下さった皆様、感謝の語彙力が無くなるくらい感謝で一杯です。一部タグが息をしていなかったり突っ込みどころ満載となってしまうしました。この話を書くに辺りチートでモテモテでも嫌われない主人公を目指すつもりが、作者が途中から主人公をどうでも良くなってしまったという問題が発生するとは李白の目を持っても(ry

また次の作品で会いましたらその時は宜しく願います。

【完結】真・誤解†夢想-革命?- 蒼天の 覇王

著者 妙義

発行日 2020 年 6 月 20 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/137708/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。